

# 中高生の地域への参画促進方法に関する研究

平成 19 年度～平成 21 年度

科学研究費補助金(基盤研究C) 研究成果報告書

課題番号:19560612

平成 22 年 3 月

研究代表者 大原一興(横浜国立大学大学院工学研究院教授)



平成22年5月20日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007 ～ 2009

課題番号：19560612

研究課題名（和文） 中高生の地域への参画促進方法に関する研究

研究課題名（英文） Study on the youth participation into the local community

研究代表者

大原 一興（ OHARA KAZUOKI ）

国立大学法人横浜国立大学・大学院工学研究院・教授

研究者番号：10194268

研究成果の概要（和文）：

現代では、子どもの居場所の確保と同時に、子ども自身の地域づくりへの参画が求められているが、本研究はそのための促進方法を考察したものである。とくに中高生になった子どもたちが、いかに身近な生活環境・地域環境と親和的になることができるか、その促進の要件を明らかにするために、中高生のための主体的な拠点づくりの実例の検討、地域参画の事例の分析を行い、それらを促進する教材や道具、組織のあり方について考察した。

研究成果の概要（英文）：

Children are expected to participate efficiently into their local community as general inhabitants. They also require their place to stay and to feel deeply attachment on. The method of involving them into the area management and development was argued on this study. This study shows how students of junior high school and high school could make themselves friendly with local communities where they live in everyday. Also we discussed what the tools, equipments and facilities for the participation should be.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成19年度	1,400,000	420,000	1,820,000
平成20年度	1,000,000	300,000	1,300,000
平成21年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学 都市計画・建築計画

キーワード：中高生、子ども、若者、参画、地域、まちづくり、居場所、ワークショップ

## 1. 研究開始当初の背景

近年の少子化に伴い、子育てを家庭だけでなく地域社会の果たすべき役割として捉え、地域全体で子どもを見守る力を問う意識は、高まりを見せている。こうしたなかで、学校に代表される学びの環境の多様化や地域との連携強化等はもちろん、地域内での活動拠点整備による子どもの居場所（＝心の拠り所）の拡充が質的にも量的にも急務の課題と

言える。これらの課題は地域との関係構築の基盤が比較的整っている小学校で修学する子どもたちだけでなく、行動圏が広がるとともに受験等によって地域を離れる可能性もある中学・高校で修学する子どもたちにとってもますます重要な課題として顕在化しつつある。

しかしながら、子どもの居場所研究について概観すると、いわゆる小学児童に比べて中

学・高校生を取り上げた研究は少なく、学術的にも研究が遅れていると言える。特に中高生を対象にしたものでは、例えば児童館といった特定の施設等を対象に、そこでの居場所としての利用実態や行動と空間の関係を分析する調査研究などはみられるものの、児童期から中学期・高校期の思春期といった子どもの発達段階に応じて地域全体を俯瞰した形で居場所となる拠点をもどのようにつなげる必要があるのか、といった観点からの取り組みは少ない。

一方で、都市化や核家族化といった社会的状況を鑑みると、こうした中高生の子どものたちにとっては、ますます地域への愛着も育ちにくい状況であることが危惧される。

子どもたちが地域になじむためには、まず生まれ育った身近な地域や建築、住宅などを自ら評価し、自分自身の能力に応じて把握し（自分化し）使いこなしていくための「住環境リテラシー」を発達段階に応じて獲得することが必要であると言える。そのきっかけを失ってしまうと、環境への関わりができなくなってしまう。こうした基本的なリテラシーを得るための教育を考える視点から「使いこなしやすい」都市建築環境のあり方を考察することも重要となってくる。

## 2. 研究の目的

以上のことを念頭に置いて、本研究は、特に中高生になった子どもたちが、いかに身近な生活環境・地域環境と親和的になることができるか、という観点から条件を探り、それを促進するための要件を明らかにすることを目的としている。

## 3. 研究の方法

本研究では、①中高生のための主体的な拠点づくりの実例の介入調査、②地域活動への参加の実例の検討、③地域と子ども若者とのインターフェイスとしての各種手法の考察、の3つを課題として設定し考察をおこなった。

① 中高生のための主体的な拠点づくりについては、特定の地域をとりあげ、既に中高生の居場所となっている場所の調査分析に加え、新たな居場所構築の実験的取り組みを行い、そこでの地域の役割、特に地域にある様々な組織や職能に求められる（期待される）役割を整理し、それらをつなぐツールや仕組みの構築と検証を行う。（4（1））

② 地域活動への参加については、中高生視点による地域評価手法の開発を行い、特定の地域における中高生の子どもの参加型調査・ワークショップ等での実践をふまえ、その結果の地域差や評価構造の特徴などについて整理・分析を行い基礎的な知見を得る。また、より広域的な地域や先進地事例を取り

上げ、検討を行う。（4（2））

③ 地域と子ども・若者とのインターフェイスについては、学校現場において進みつつあるまちづくり教育や地域活動参加体験等の状況を、学校で実際に使用されている教科書の分析や中高生へのインタビュー調査等により整理する。また、国内外の先進的な建築博物館やエコミュージアム活動において、中高生が参画するためのプログラム事例を整理した。（4（3））

## 4. 研究成果

### (1) 中高生の居場所と拠点づくり

本研究では、中高生のための地域活動拠点『ハッピースクウェア』を対象として、居場所づくりの取り組みとその計画プロセスを整理した。この施設は引きこもり支援などを行うNPO法人の施設が同一の建物に併設されていることが特徴である。

また、『ハッピースクウェア』が立地している地域を学区としているM中学校、学区ではないが比較的近隣にあるI中学校、H中学校の3つの中学校に対して、利用者となる中学生が居場所へどのようなニーズを持っているのかを調査するためにアンケート調査を実施した。さらに関東の他の地域においてもアンケート調査を行った。

これらの調査から中高生と大人の双方のニーズを把握し、比較考察を行った。

まず計画プロセスとしては、施設の使い方について検討するために計3回のワークショップを実施した。第1回目は「青少年像・使い方に関する意見交換」、第2回目は「施設の利用イメージの検討」、第3回目は「家具配置の検討」を目的としている。この結果から、施設の計画や運営にかかわる大人と中高生のとの関わりについて考察した。

大人側からの働きかけによってワークショップに参加した中高生たちの調査・分析から、居場所づくりの方向性において多少の差異はあるものの、大人と中高生は概ね同じ方向を見ていることが分かった。しかし課題としては、企画において大人の主観が入ってしまうことや中高生特有のニーズに関しては拾いきれていないことが挙げられる。これらの課題をよく理解した上で、大人は中高生のための地域活動拠点づくりの計画に積極的に参画していくことが求められている。

アンケート調査では、中高生のための地域活動拠点「ハッピースクウェア」の認知度、利用度について回答してもらっている。そこで、利用したことのある中学生に対して、どのような点で満足しているか質問の結果、回答率の高かった項目は『くつろげる』『飲食ができる』『気軽に立ち寄れる』『長時間居られる』『マスターの人柄』であった。この中で、マスターの存在が重要な役割を果たして

いる。このような「大人」の存在が、子どもから大人に移行していく中高生の段階においては、意義のある存在となっている。一連の居場所づくりのプロセスやアンケート調査から「大人」の存在についての考察する。

「大人」とは、ハッピースクエアのような活動拠点の「場所」に影響を与える存在である。その影響とは、①「場所」に見えない安心感や落ち着くといった雰囲気を与えるものとなる ②「場所」のもつ安全な雰囲気から離れたい気分させる というものである。このような拠点施設は、居場所として指摘されていた『本屋』や『娯楽施設』のような「場所」にすることで、好きな場所と認知されるようになることが予想される。

居場所として指摘されていた『本屋』や『娯楽施設』のような「場所」にすることで、好きな場所と認知されるようになることが予想される。

続いて「大人」とはどのような存在か、について考察すると、「大人」とはどのような「大人」でも良いわけではなく、信頼の寄せることのできる人であるべき、との意見が強かった。具体的には ①気軽にしゃべれる、②話を聞いてくれる、③安心できる、④尊敬できる、⑤頼りになる、⑥叱ってくれる、といったものが求められている。⑥に関してはやや予想外な答えであった。しかし、「大人」は『甘えさせてくれる』人よりも『叱ってくれる』人の方が信頼が持たれる。今後、同様の調査によって、「大人」の存在することの影響をさらに明確化していくことが求められるだろう。

次に、横浜、東京、埼玉の中学校の生徒に、彼らの居場所についての調査をおこなった。

まず横浜市内の3つの中学校では、2年間にわたり調査をおこなった。アンケート結果に大きな違いはなかったが、違いが出たのは、「中高生の居場所に関心があるのか」という項目で、1年後には関心度が高くなっていた。その理由としては、イベントやワークショップによって「ハッピースクエア」の認知度が高まり、このような施設に関心を持つようになったのではないかと考えられる。

また、いくつかの地域の異なる中学校の差違について分析した。その結果、このような拠点施設の「居場所」があれば行きたい、と回答しているのは東京が最も高く、横浜が最も低かった。しかし、東京では「行きたい」と回答していても利用者以上に、例えば運営や企画側にはいって関わろうとする生徒はいなかった。埼玉では「関りたい」と回答している生徒も少数ではあるがいた。

以上の違いは、実際には東京の中学校が私立で、埼玉の中学校が公立であることにも大きく影響されているものと考えられる。私立の中学校では多くの生徒が遠距離通学のた

めに、地元で「居場所」と呼べる空間がなく、そのような施設を求めているが、公立の中学校は近隣通学で地元であることが多いのですでに自分だけの「居場所」を見つけており、そのような施設を求めていると考えられるからである。

施設への活動への参加についても似たようなことが言え、地域に密着して生活している場合は、活動へも参加しやすく、しかし、私立中学の場合は、地元感がなく、あまり積極的に参加しにくくなっているのではないだろうか。

(2) 地域活動における中学生の役割と主体的参加の考察

① 保土ヶ谷区和田町における調査から

筆者らは先行的に特定地域における子ども参加型まち学習ワークショップを平成15年度から毎年8月にテーマを変えながら継続的に実施している。そこでは、初回に小学3年生であった子どもたちは中学生以上になっても、継続してこのワークショップに参加してきている。

最初に、子どもたちにとって地域がどのように見えているか、つまり子ども視点からの地域の評価構造（およびその変化）を把握することが必要であろう。児童期の子どもにとっての生活環境としては住まいと学校、遊び場などが挙げられるが、子どもの生活は学区域を中心に展開するため、その子ども自身が住む地域環境の影響を強く受けることが一般に知られている。子どもにとって、地域は生活の場であると同時に成長の場であり、子どもの人格形成において、大変重要なステージと言える。そこで、この地域において、「キャプション評価法」を用いたまちあるきワークショップを行い、撮影の判断基準として「まちの見どころ、好き・嫌いなど、気になるところ」を探すよう指示した。

この調査結果から、子ども視点による地域の評価構造の特徴が明らかとなった。

まず、子どもは判断が未熟であるものの全体的には様々な角度から幅広く対象を見ており、低学年ほど特定のキーワードが頻出し、主体的なものの見方、目につきやすいものに対象が集中する傾向が指摘できた。成長に従い地域に対する要望や疑問が発生し、地域に対する働きかけや投げかけを表すような表現も見られ、より感受性豊かに地域を多様な視点で捉えている傾向が見られた。

また、子どもの地域や環境に対する評価は、子ども自身が属するグループの中での流れや雰囲気によって決定される面もあることが指摘できた。

以上のように、子ども視点に立った地域に対する評価構造の特徴や大人と子どもの評価構造の違いなどが明らかになった。

中学生への成長の観点からすると、小学校低学年から高学年にかけて見られた変化、つまり目に付きやすいものへの着目から、より主体的に感受性豊かにとらえる傾向の高まりが考えられる。一方で、学校区の広がりや生活行動範囲の広がりから、地域そのものの捉え方が変化する可能性が考えられる。

次に、小学生を対象にまち探検ワークショップを企画する際に、中学生の運営への参画が求められ、このことから、中学生の役割について考察をした。

最終的に、中学生3名が、事前ミーティングから当日運営に至るまで参加した。このうち2名は第1回ワークショップから継続参加していた児童であり、2008年時点では中学2年生になっていた。1名はこの中学生の友だちであり、ワークショップの趣旨に賛同し協力を申し出てくれた児童である。

事前準備では、地元ミーティングや準備作業の手伝いに参加してもらおう機会を設けた。夜間の会合への参加が困難であったり、放課後に確保できる時間も限られており、全体としての参加時間数はそれほど多いものではなかったが、作業分担を通じて、大学生や地域住民との交流も生まれた。ワークショップの目的の理解や準備作業への参加は小学生にはハードルが高いが、中学生であれば一定の理解を示し、そのプロセスへの参加が可能であることが確認できた。ただし、今回はある程度企画が詰まった段階からの限定的な参加であったため、作業補助の意味合いが強かったが、参加機会の工夫次第では企画検討からの参加も可能であると思われる。

当日運営では、中学生3人にそれぞれ小学児童のグループにサポーターとしてついてもらい、グループワークの支援をお願いした。途中、小学生には危険だと思われる場所への立ち入りを「危ないよ」と制止したり、グループワークの内容でやや難解な箇所をわかりやすく解説したりする姿が見られた。自身もこれまでグループワークに参加した経験から、基本的には小学児童の自由な発想を理解し受け入れつつ、障害に行き当たったときに解決のための情報（解決策そのものではないことが重要）を提供するような気遣いをしているように見えた。

以上より、中学生ならではの関わりの可能性とその有効性が確認された。実際には、大学生も同じような役割を果たしていたが、小学児童には中学生の方がより身近な存在に見えていたはずである。いずれにしても地域を理解する上で媒介者・翻訳者としての役割の重要性が確認できたと言える。

## ② 都筑区「ミニヨコハマシティ」の考察

19歳以下の子どもが主体となって遊んでつくるまち 「ミニヨコハマシティ（以下、

ミニヨコ）」は、NPO法人I Love つづきおよびNPOミニシティプラス（前身はミニヨコハマ研究会）が主体となって2007年3月に横浜市都筑区にある住宅展示場で初めて開催され、その後、毎年1回開催されている。こどものまちはドイツ・ミュンヘンですでに20年の歴史を持つ7歳から15歳までの子どもだけが運営する「小さな都市—ミニミュンヘン」を模したものである。日本においては2003年に千葉県佐倉市で行われた「ミニさくら」をきっかけに日本各地へ広がっている。

この活動を通じて、いくつかのことが浮き彫りになってきた。「ミニヨコ」は当日できあがったまちで遊ぶ楽しみもあるが、なによりも企画する段階での子ども会議を通して子どもたち自身で仮想のまちを創り上げる過程が最大の魅力といえよう。「遊びながら楽しく」進められる過程において、子ども達は、自分たちが現実に住むまちを良くも悪くも手本にすることになるので、まちを評価しながら、自分達が思うまちに必要な地域資源について必然的に考えることとなる。

また仲間がつくった店やルールがどのようなものなのかそれを自分の考えとどう繋げたら発展するかについても、スタッフの大人に聞きながら子ども同士の話し合いで決めている。子ども同士で話し合いで決めるといっても子ども達は同じ年齢ばかりではない。中高生が小学低学年生と接して、こどものまちのルールづくりに向けて合意形成をはかっていく。時に小学低学年生が中高生に意見する場面もある。そして困った時には常に大人がさりげなくサポートをするという自然な介入も行われていた。彼らにとっての大人スタッフは「専門的知識を持つ中間支援者」として解釈できるものと思われる。

また、本研究においては、先進事例としてのドイツにおける活動を調査し、その考察もおこなった。

## (3) 地域参画の方法の考察 —教育ツールとプログラム—

### ① まちづくり・コミュニティ活動への参画を促す教科学習 —高等学校家庭科教科書記述の分析—

良好な住環境をつくるには、市民参加が不可欠であると指摘されて久しいが、中学生や高校生がまちづくりやコミュニティ活動に参画する活動も、学校教育や地域での取り組みとしてみられるようになり、その意味や意義も徐々に理解が広がっている。

そこで、本研究では、中学・高等学校段階で身近な地域生活を積極的に学習項目に掲げている教科として家庭科に着目した。学習指導要領においては大きく取り上げられてはいないが、中学校家庭科では「地域の人々の生活に関心を持ち、高齢者など地域の人々

とかかわることができること」、高等学校においては「衣食住にかかわる生活文化の背景について理解させるとともに、生活文化に関心をもたせ、それを伝承し創造しようとする意欲を持たせる」と非常に大綱的ではあるが、地域や生活文化の主体的創造者になることが学習課題として述べられている。

そこで本研究では、中学・高等学校の家庭科におけるまちづくり・コミュニティ活動への参画に関する学習について、教師の教材研究・授業のもとになる教科書記述を分析し、その現状を把握し考察した。

現在最も新しい平成19年度版の中学校「技術・家庭」教科書2種と高等学校家庭科科目「家庭総合」の教科書9種を対象に、まちづくりやコミュニティ活動への参画を促す記述を抜き出して表にまとめた。結果として、家庭科においては、学習指導要領でのごくわずかな記述を足がかりに、中学・高等学校いずれにおいても、まちづくりやコミュニティ活動への参加・参画に関わる記述が充実していることが明らかになった。おとな中心のNPO活動に目を向けさせるような記述や写真もあるが、中高生の参加・参画にかかわる活動事例も、〈コラム〉や〈参考〉〈話題〉などの形で写真などを用いて紹介されている。

中学・高校時代は、ともすれば地域や周囲の大人との交流に苦手意識があったり批判精神ばかりが旺盛になり、また逆に異世代や地域に無関心になる世代でもある。この時期に、別の価値観や生き方を提示し、さらに体験を促すことは大切であると思われる。筆者の以前の調査では、日本の高校生の社会参加経験や機会の少なさが問題であることが指摘でき、参加経験は問題意識や主体性の育成に繋がる可能性も示唆された。わずかな学習機会であっても、多くの若者が生きた情報に触れ、経験を持つことで、将来にわたる地域への主体的参加が広がることが望まれる。

## ② 建築博物館、エコミュージアム等における取り組み

博物館の基本的機能の一つに、展示を中心とした教育普及活動がある。常設の展示室を持つ博物館では企画展示毎に教育プログラムを組み合わせたことがあるが、必ずしも展示質の展示に関わらなくとも、自立した教育プログラムを展開しているところも見られる。いくつかの博物館では、様々な中高生対象の学習プログラムが組まれるようになってきたが、中でも建築博物館や現代美術館等では、建築やまちづくりに関する展示教育活動が行われているところがある。また、博物館活動において地域全体に広がりをもつものでは、その地域の全体の遺産を保全し学習するエコミュージアムとして発展しているところがある。社会教育機関として地域展開

をしているこれらの博物館における事例から、とくに中高生の世代に対応したプログラム等についての先進的な事例を調査した。

本研究では、ストックホルム建築博物館、ウィーン建築博物館、ヨーロッパや南米のエコミュージアムの地域環境やまちに関する学習活動について調査した結果から、子ども若者にとっての教育プログラムの事例とその効用について述べた。

また、日本国内のエコミュージアムに対してアンケート調査を行った結果からの考察も行った。学習や教育プログラムに関する実態と意見から、子ども達に対してのかかわり方の有効性を持っている活動主体が9割を超えており、さらに実際に子ども達に対するプログラムの充実を図るという強い意向が全般的に確認された。

## (4) まとめと考察

中高生のための拠点づくりの実践の過程を調査した結果から、施設ができてからその来て予定調和的に利用する人々ではなく、参画する主体者としての中高生の存在が求められていることが指摘された。施設計画の共通する課題のひとつであるが、最初に目的を想定して設置される公共施設の多くは、機能先行型のサービス拠点となり、地域のニーズを引き出すための施設となり得ない。要求-機能の相互作用こそ生活の本質であり、本来の社会施設の役割である。「中高生のための」施設づくりに終わってしまったのは、本当に必要とされている「中高生の求める」施設はできにくい。中高生の主体的な参画を引き起こす誘導策としての施設設置が求められる。そのためには、施設機能の固定化ではなく、柔軟に順応性をもつ「場」が必要とされている。

中高生が主体的に施設づくりに参画できるようになるためには、その「場」を自分化することが必要と思われる。場から提供される機能を享受しつつも、そこに何らかの自分に関わらせていくことによって、その「場」づくりの一端に責任を持ち、関係をつなぎとめておくことが必要であろう。

このために、欠かせないのが、「大人」の存在であることが、繰り返し述べられている。移行期の若者にとっては、将来は不安だが目を覆うことができない。少し先の将来を体現している存在としての大人との交流があることによって、自分の位置を確認することもできるし、予測を立て未来を感じることができる。これは子どもにとっての「大人」とは明らかに異なる。子どもと大人は距離がありすぎて、ややもすると対立もある。しかし、中高生にとっての大人は近い将来の姿としてscaffoldingや最近接領域にも類似する概念としての二人称概念に匹敵するものであ

り、その存在があることによって、次の三人称的世界(=社会)につながることもできるのである。従って、中高生のために専門空間化するのではなく、他の世界との接点としての場とすることが重要と考えられる。

このことは、商店街を場として繰り広げられたワークショップにおいて、小学生から中学生に成長していく子ども達の地域評価でも理解出来る点である。年齢の低い子どもの頃の知識吸収的な発達から、自我が確立し、さらに価値観を自ら持たなくてはならない時期において、大人の世界における価値観を意識し、対他的に自分を捉える必要性が大きくなる中高生の時期においては、その場でふるまうこと、役割を發揮することが求められる。とくに最近の社会では「空気を読む」ことが強く要求されており、共に創り上げていく地域社会の同士として協働に参加しなければならない。

中高生にとって協働することは、大人の社会へのイニシエーションとして、大変重要な経験となっている。子どもの仲間でもある一方で、年の少ない子どもたちに対しては大人として振る舞うという、水平でも垂直でもない人間関係をつくり、臨機応変に立場を変えながら関係や制度を構築していくことが重要である。このことは、都筑やミュンヘンでも実例が物語っている。しかもそれは、日常の生活世界において体験されることが肝要であり、日常的にリテラシー形成をはかっていくことが求められている。

地域環境や住環境のリテラシー形成のためには、学校教育や社会教育の特殊な環境において体験する学習ではなく、日常化できる地域において試みられる学習が有効となろう。近年の教育理念のひとつの目標像としての持続可能な社会づくりのためには、それらを支え合う組織の協働の取り組みが必要とされている。地域における触媒としての役割を担う組織や機関がまず存在し、そしてそれらの連携や持続的・継続的な活動の推進が求められている。さらに、これらの社会形成のためには、学際的な研究、分野横断的な研究の必要性がますます高まっていることも指摘された。

## 5. 主な発表論文等(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)(本研究が部分的に活用されたものを含む)

(1) 大原一興・有嶋清之・藤岡泰寛:三浦半島における市民活動によるエコミュージアムの展開—地域を学ぶ場としてのエコミュージアム活動に関する研究—、「住まい・まち学習」実践報告・論文集9、pp.101-106、(発表依頼論文)、住宅総合研究財団、2008.8、査読無し

(2) 妹尾理子:中高生のまちづくり・コミュニティ活動への参画を促す教科学習の可能性—中学校および高等学校家庭科教科書の記述分析から—、「住まい・まち学習」実践報告・論文集9、pp.53-58、住宅総合研究財団、2008.8、査読無し

[学会発表](計6件)(本研究が部分的に活用されたものを含む)口頭発表:いずれも「日本建築学会大会学術講演梗概集」に掲載

(1) 有嶋清之・大原一興・藤岡泰寛:三浦半島におけるエコミュージアムの展開に関する研究、2007年、E-2分冊、pp.53-54

(2) 斎藤潤一・藤岡泰寛・三輪律江・大原一興・妹尾理子:青少年の地域活動拠点づくりの取組みとその計画プロセスに関する研究—青少年と大人の双方のニーズ調査と比較考察から、2008年、E-1分冊、pp.183-184

(3) 竹内智美・大原一興・藤岡泰寛:エコミュージアムの基本理念からみた活動実態に関する研究—チェックリストによる日本とイタリアの比較考察から、2008年、E-2分冊、pp.565-566

(4) 兼松渉・藤岡泰寛・大原一興・三輪律江・妹尾理子:中高生の居場所に求められる要素とその必要性に関する研究—保土ヶ谷区天王町ハッピースクウェアを事例として、2009年、E-1分冊、pp.87-88

(5) 松本有佳子・藤岡泰寛・大原一興:小学校と地域の連携体制と活動内容に関する研究—横浜市における取り組みからの考察、2009年、E-1分冊、pp.373-374

(6) 大脇哲平・大原一興・藤岡泰寛:神奈川区における市民活動からみるエコミュージアム構想の可能性に関する考察—地域のエコミュージアム化に関する研究—その10、2009年、E-1分冊、pp.1263-1264

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

大原 一興 (OHARA KAZUOKI)

国立大学法人横浜国立大学・大学院工学研究院・教授

研究者番号:10194268

### (2) 研究分担者

三輪 律江 (MIWA NORIE)

国立大学法人横浜国立大学・地域実践教育研究センター・准教授

研究者番号:00397085

妹尾 理子 (SENO MICHIKO)

国立大学法人香川大学・教育学部・准教授

研究者番号:20405096

藤岡 泰寛 (FUJIOKA YASUHIRO)

国立大学法人横浜国立大学・大学院工学研究院・講師

研究者番号:80322098



平成19年度～平成21年度 科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書

研究課題：中高生の地域への参画促進方法に関する研究

課題番号：19560612

本報告書は、標記科学研究費による研究によって得られた一連の研究成果をまとめたものである。

研究組織

研究代表者： 大原 一興 （横浜国立大学大学院 工学研究院 教授）  
研究分担者： 三輪 律江 （横浜国立大学 地域実践教育研究センター 准教授）  
研究分担者： 妹尾 理子 （香川大学 教育学部 准教授）  
研究分担者： 藤岡 泰寛 （横浜国立大学大学院 工学研究院 講師）

交付決定額（配分額）

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成19年度	1,400,000	420,000	1,820,000
平成20年度	1,000,000	300,000	1,300,000
平成21年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究発表一覧 （本研究課題に関連するもの）

1. 研究論文・研究報告

- (1) 大原一興・有嶋清之・藤岡泰寛：三浦半島における市民活動によるエコミュージアムの展開—地域を学ぶ場としてのエコミュージアム活動に関する研究—、「住まい・まち学習」実践報告・論文集9、pp. 101-106、(発表依頼論文)、住宅総合研究財団、2008. 8、査読無し
- (2) 妹尾理子：中高生のまちづくり・コミュニティ活動への参画を促す教科学習の可能性—中学校および高等学校家庭科教科書の記述分析から—、「住まい・まち学習」実践報告・論文集9、pp. 53-58、2008. 8、査読無し

2. 口頭発表：いずれも日本建築学会大会学術講演梗概集に掲載、発表者に○、（）内は発表者の発表時における所属

- (1) 三浦半島におけるエコミュージアムの展開に関する研究  
著者:○有嶋清之（フリーランス）・大原一興・藤岡泰寛  
掲載:2007年, E-2分冊, pp. 53-54
- (2) 青少年の地域活動拠点づくりの取組みとその計画プロセスに関する研究 青少年と大人の双方のニーズ調査と比較考察から  
著者:○斎藤潤一（横浜国立大大学院）・藤岡泰寛・三輪律江・大原一興・妹尾理子  
掲載:2008年, E-1分冊, pp. 183-184
- (3) エコミュージアムの基本理念からみた活動実態に関する研究 チェックリストによる日本とイタリアの比較考察から  
著者:○竹内智美（パシフィックマネジメント）・大原一興・藤岡泰寛  
掲載:2008年, E-2分冊, pp. 565-566
- (4) 中高生の居場所に求められる要素とその必要性に関する研究 保土ヶ谷区天王町ハッピースクウェアを事例として  
著者:○兼松渉（横浜国立大大学院）・藤岡泰寛・大原一興・三輪律江・妹尾理子  
掲載:2009年, E-1分冊, pp. 87-88
- (5) 小学校と地域の連携体制と活動内容に関する研究 横浜市における取り組みからの考察  
著者:○松本有佳子（横浜国立大大学院）・藤岡泰寛・大原一興  
掲載:2009年, E-1分冊, pp. 373-374
- (6) 神奈川区における市民活動からみるエコミュージアム構想の可能性に関する考察 地域のエコミュージアム化に関する研究 その10  
著者:○大脇哲平（横浜国立大大学院）・大原一興・藤岡泰寛  
掲載:2009年, E-1分冊, pp. 1263-1264

### 3. 卒業論文、修士論文（本研究が部分的に活用されたものを含む）

- (1) 平成19年度横浜国立大学工学部卒業論文  
斎藤潤一：青少年の居場所づくりの取組みとその計画プロセスに関する研究—青少年と大人の双方のニーズ調査と比較考察から—
- (2) 平成19年度横浜国立大学大学院工学府修士論文  
竹内智美：エコミュージアムの基本理念からみた活動実態に関する研究—チェックリストによる日本とイタリアの比較考察から—
- (3) 平成20年度横浜国立大学工学部卒業論文  
兼松渉：中高生の居場所に求められる要素とその必要性に関する研究—保土ヶ谷区天王町ハッピースクウェアを事例として—



## 目 次

はじめに 研究の目的と方法	1
第1章 中高生の居場所と拠点 —拠点と地域—	5
1-1 拠点づくりとその計画プロセス	
1-2 「大人」の存在の意義	
1-3 中学生の居場所 —横浜市,他地域—	
第2章 地域活動における中学生の役割 —和田町スタディー	57
2-1 子どもの成長にともなう地域との親和性の視点	
2-2 中学生の役割	
第3章 中高生の主体的参加 —都筑スタディー	79
3-1 中高生を主役とした活躍の場	
3-2 先進事例の考察 —ドイツにおける子ども・若者の参画施策—	
第4章 地域参画の方法 —教育ツール、プログラム—	99
4-1 まちづくり・コミュニティ活動への参画を促す教科学習の可能性 —中学校及び高等学校家庭科教科書の分析から—	
4-2 建築博物館、エコミュージアム等における取り組み	
4-3 地域資源の学習 水俣の事例から	
考察とまとめ	125
資料編	133
資料1 はぴすくの友 vol.1~4	135
資料2 2008年ワークショップ活動記録	142

## はじめに 研究の目的と方法

### 研究の目的

近年の少子化に伴い、子育てを家庭だけでなく地域社会の果たすべき役割として捉え、地域全体で子どもを見守る力を問う意識は、高まりを見せている。こうしたなかで、学校に代表される学びの環境の多様化や地域との連携強化（例：「地域子ども教室推進事業」文部省生涯学習政策局 H16 より実施）等はもちろん、地域内での活動拠点整備による子どもの居場所（＝心の拠り所）の拡充が質的にも量的にも急務の課題と言える。

これらの課題は地域との関係構築の基盤が比較的整っている小学校で修学する子どもたちだけでなく、行動圏が広がるとともに受験等によって地域を離れる可能性もある中学・高校で修学する子どもたちにとってもますます重要な課題として顕在化しつつある。しかしながら、子どもの居場所研究について概観すると、いわゆる小学児童に比べて中学・高校生を取り上げた研究は少なく、学術的にも研究が遅れていると言える。特に中高生を対象にしたものでは、例えば児童館といった特定の施設等を対象に、そこでの居場所としての利用実態や行動と空間の関係を分析する調査研究などはみられるものの、児童期から中学期・高校期の思春期といった子どもの発達段階に応じて地域全体を俯瞰した形で居場所となる拠点をどのようにつなげる必要があるのか、といった観点からの取り組みは少ない。

一方で、都市化や核家族化といった社会的状況を鑑みると、こうした中高生の子どもたちにとっては、ますます地域への愛着も育ちにくい状況であることが危惧される。

厚生労働省では平成 15 年度から「児童ふれあい交流促進事業」のメニューのひとつとして、「中高生居場所づくり推進事業」に取り組んでいるがハード面の取り組みに加えて多様なプログラムの構築が急務となっている。

子どもたちが地域になじむためには、まず生まれ育った身近な地域や建築、住宅などを自ら評価し、自分自身の能力に応じて把握し（自分化し）使いこなしていくための「住環境リテラシー」を発達段階に応じて獲得することが必要であると言える。そのきっかけを失ってしまうと、環境への関わりができなくなってしまう。こうした基本的なリテラシーを得るための教育を考える視点から「使いこなしやすい」都市建築環境のあり方を考察することも重要となってくる。

近年、そのための学習の拠点として活動がさかんになりつつある博物館活動、とくにヨーロッパの建築博物館が有効に機能していることは注目に値する。

筆者らは先行的に特定地域における子ども参加型まち学習ワークショップを平成 15 年度から毎年 8 月にテーマを変えながら継続的に実施している。そこでは、初回に小学 3 年

生であった子どもたちは中学生以上になっても、継続してこのワークショップに参加してきている。

以上のことを念頭に置いて、本研究は、特に中高生になった子どもたちが、いかに身近な生活環境・地域環境と親和的になることができるか、という観点から条件を探り、それを促進するための要件を明らかにすることを目的としている。

## 研究の方法

中高生の居場所拡充を定着させるためには、中高生が地域との豊かな関係を持つことが必須であり、その関係の再構築のためにも、地域のあり方を理解し、地域に居住する大人がより積極的に若者と関わり、見守り育てていく具体的な行動が求められていると言える。

そこで、本研究では、①中高生のための主体的な拠点づくりの実例の介入調査、②地域活動への参加の実例の検討、③地域と子ども若者とのインターフェイスとしての各種手法の考察、の3つを課題として設定し考察をおこなった。

1. 中高生のための主体的な拠点づくりについては、特定の地域をとりあげ、既に中高生の居場所となっている場所の調査分析に加え、新たな居場所構築の実験的取り組みを行い、そこでの地域の役割、特に地域にある様々な組織や職能に求められる（期待される）役割を整理し、それらをつなぐツールや仕組みの構築と検証を行う。（第1章）

2. 地域活動への参加については、中高生視点による地域評価手法の開発を行い、特定の地域における中高生の子ども参加型調査・ワークショップ等での実践をふまえ、その結果の地域差や評価構造の特徴などについて整理・分析を行い基礎的な知見を得る。また、より広域的な地域や先進地事例を取り上げ、検討を行う。（第2章、第3章）

3. 地域と子ども・若者とのインターフェイスについては、学校現場において進みつつあるまちづくり教育や地域活動参加体験等の状況を、学校で実際に使用されている教科書の分析や中高生へのインタビュー調査等により整理する。また、国内外の先進的な建築博物館やエコミュージアム活動において、中高生が参画するためのプログラム事例を整理した。（第4章）

## 謝辞

調査にご協力いただいた関係各位に、深く感謝いたします。また、調査研究に尽力された横浜国立大学建築計画研究室の学生、院生の方々にも謝意を表します。

本報告書の主な執筆分担

はじめに 大原一興

第1章 兼松渉（横浜国立大学大学院）、齊藤潤一（同左）

第2章 藤岡泰寛

第3章 三輪律江

第4章 4-1 妹尾理子、4-2 大原一興、竹内智美（元横浜国大学大学院）、4-3 藤岡泰寛  
考察とまとめ 全員





## 第1章 中高生の居場所と拠点 —拠点と地域—



## 第1章 中高生の居場所と拠点—拠点と地域—

### 1-1 居場所づくりとその計画プロセス

#### (1) 背景と目的

近年、中高生のための地域の中の居場所の必要性が指摘され、各自治体が積極的に取り組みを進めている中高生の居場所と呼ばれる場所の多くは、計画段階から利用者となる中高生自身が積極的に参画することが重要視されている。横浜市保土ヶ谷区でも中高生のための地域活動拠点づくりが展開されることとなったが、ここでは引きこもり支援などを行う NPO 法人の施設と併設される形での実施である点が特徴である。このことから、まずは中高生を受け入れる大人たち側から検討を進めていくこととなった。このような背景をもとに、本研究では横浜市で新たにつくられる中高生のための地域活動拠点において、居場所づくりの特徴と今後の取り組みの可能性について考察することを目的とする。

本研究では、横浜市こども青少年局が中心となって取り組みを進めている保土ヶ谷区地域活動拠点『ハッピースクウェア』（図1-1）を対象として、居場所づくりの取り組みとその計画プロセスを整理していく。さらに居場所に対するニーズを知るために、環境心理調査を参考として、ワークショップを通じた大人側のニーズを抽出・分析を行った。また、『ハッピースクウェア』が立地している地域を学区としている M 中学校、学区ではないが比較的近隣にある I 中学校、H 中学校の3つの中学校に対して、利用者となる中学生が居場所へどのようなニーズを持っているのかを調査するためにアンケート調査（表1-1）を実施した。それらの調査から中高生と大人の双方のニーズを把握し、比較考察を行っている。

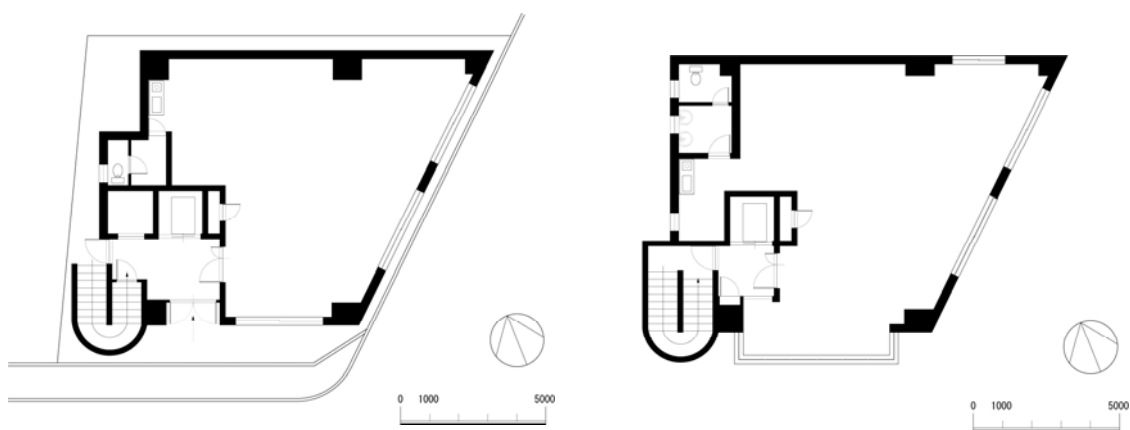


図1-1 『ハッピースクウェア』平面図（左：1F平面、右：2F平面）

表 1 - 1 アンケート調査概要

調査対象	M中学校	I中学校	H中学校	合計
配布数	267	567	652	1486
回収数	239	414	278	931
回収率	89.5%	73.0%	42.6%	62.6%

(2) 計画プロセス

従来では居場所へのニーズが高まり、つくられるものであるが、今回の横浜市の「ハッピースクウェア」では空間ありきで始まったので、まず施設の使い方について検討していった。検討するために計3回のワークショップを実施した。第1回目は「青少年像・使い方についての意見交換」、第2回目は「施設の利用イメージの検討」、第3回目は「家具配置の検討」を目的に行っていた。

表 1 - 2 企画立ち上げから「ハッピースクウェア」開所までの経緯

日時	活動内容	詳細
平成19年 8月	運営法人の決定	NPO法人ロード ・引きこもり青少年及びその家族などに対する居場所の運営と相談事業 ・引きこもり青少年に対する就労支援事業 ・引きこもり問題への普及啓発事業
8月4日 8月18日	若者リバイバルフォーラム 天王町子どもフェスティバル	ガリバーマップの書き込み・展示
9月28日	開所式・スタッフ会議	
10月1日 23日 27日	青少年の利用団体・個人の募集 第1回全体運営会議 スタッフ会議	横浜市子ども青少年局ホームページ内での告知及びチラシの配布
	『地域活動拠点』の使い方を考えるワークショップ	■ワークショップの目的 ・地域活動拠点の使い方、プログラムの検討 ・家具配置、しつらえの検討 ■ワークショップ参加団体 ・横浜市子ども青少年局 ・NPO法人ロード ・ヤングジョブスクエア ・NPO法人スペースあとむ
11月10日 17日 24日	第1回ワークショップ 第2回ワークショップ 第3回ワークショップ	『青少年像・利用イメージについて意見交換』 『平面図を用いた利用イメージの検討』 『家具配置の検討』
	アンケートの作成	■アンケート調査の目的 ・中高生の居場所の意識、居場所のニーズの把握 ・地域活動拠点の紹介 ■アンケートの概要 ・部活動への所属状況、活動頻度 ・塾、習い事の利用状況、利用頻度 ・自宅の中での好きな場所 ・地域の中での好きな場所 ・地域活動について ・『地域活動拠点』の紹介
12月22日	地域ユースプラザ地モノ野菜市	神奈川県でとれる野菜の販売
平成20年		
1月16日 1月17日 1月24日 1月下旬	地域ユースプラザ地モノ野菜市 第2回全体運営会議 保土ヶ谷区校長会への参加 各中学校へアンケート配布	神奈川県でとれる野菜の販売 居場所づくりの概要・アンケート調査の説明
2月上旬	各中学校アンケート回収	
2月16日	地域ユースプラザ地モノ野菜市 アンケートの集計・分析	神奈川県でとれる野菜の販売
3月4日 3月6日	第3回全体運営会議 若者リバイバルセミナー	愛称の決定『Happy Square』
3月9日 3月16日	壁塗りワークショップ	アーティストと小中学生が一緒になって居場所の壁塗りを行う
3月22日	地域活動拠点お披露目会	

第1回ワークショップでは参加者に自身の中高生時代について語ってもらうことで中高生のイメージを共有化し、その後居場所の使い方についてアイデアを出し合った。第2回ワークショップでは参加者を3つのグループに分け、平面図に利用イメージを書き込み、居場所の使い方を検討した。その後グループ毎に発表し、それぞれの検討案について意見交換を行った。その結果、共通している項目が多くあり、全体として居場所の使い方に関して似たようなイメージを持っていることが分かった（図1-2）。



写真1-1 第2回ワークショップ

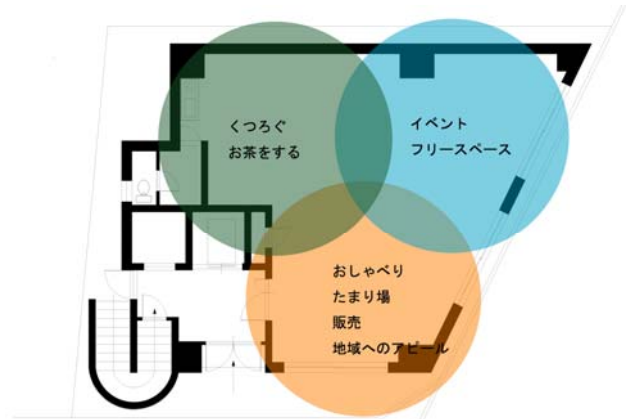


図1-2 居場所の利用イメージ

第3回ワークショップでは、この共通イメージを基に模型を用いてカフェ機能とフリースペース機能の2つの機能を軸に家具配置を検討した。ここで出来上がった2つの検討案を1つのまとめるような形で今後の施設の整備が進めていくことになった。

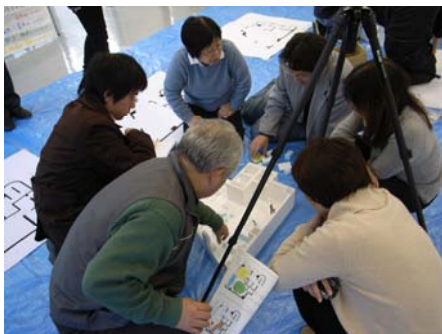


写真1-2 第3回ワークショップ

### (3) 大人と中高生のニーズの比較検討

まず、大人側のニーズについて分析する。第3回ワークショップにおける家具配置検討の経緯について、後日参加者に対して詳細にヒアリングを行った。ヒアリングの際には環境心理調査の1つである箱庭手法を参考としており、ヒアリングの内容から評価項目の関連図を作った(図1-3)。カフェ機能の検討を行ったグループから『入りやすい』、イベント・フリースペースの検討を行ったグループから『落ち着く』という最上評価項目を得た。このことから、大人たちが居場所づくりに取り組むに当たって最も考慮していたのは『入りやすさ』『落ち着いた雰囲気』であったことが分かる。この調査手法は本来、建築空間のユーザーに対して行うものであるため、箱庭作成者の好みが強くと反映されてしまう傾向にある。つまり、言い換えれば大人にとって居場所とは『入りやすい』『落ち着く』場所である、もしくはそうあって欲しいと考えていることが言える。

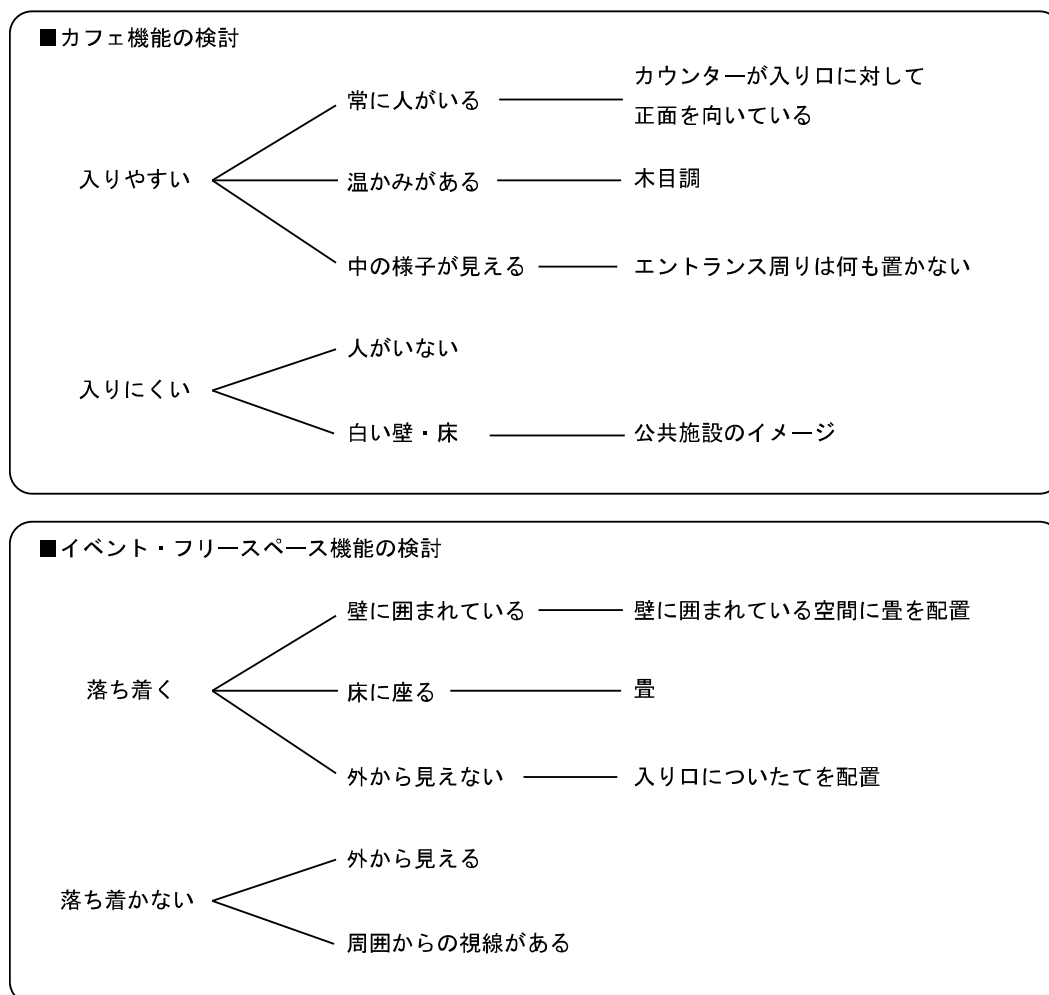


図1-3 評価項目の関連図

次に中高生側のニーズを分析していくが、本研究では「ハッピースクウェア」を中心に置いているため、今後利用者となるであろう近隣の中学生を対象としている。アンケート結果より、「自宅の中で1番好きな場所はどこか」という問いで最も多かったのは『自分の部屋』であった。次いで『居間』『和室』という結果となっている(図1-4)。また、「地域の中で1番好きな場所はどこか」という問いに対して、最も多かったのは『自宅』であり、『友達の家』『通っている中学校』と続く結果となった(図1-5)。男女で大きな差はなく、また中学校毎でも順位の差はあるにしろ、大きな差は見られなかった。また、中学生の好きな場所での過ごし方、好きな理由に対する質問にも回答してもらった(表1-3)。

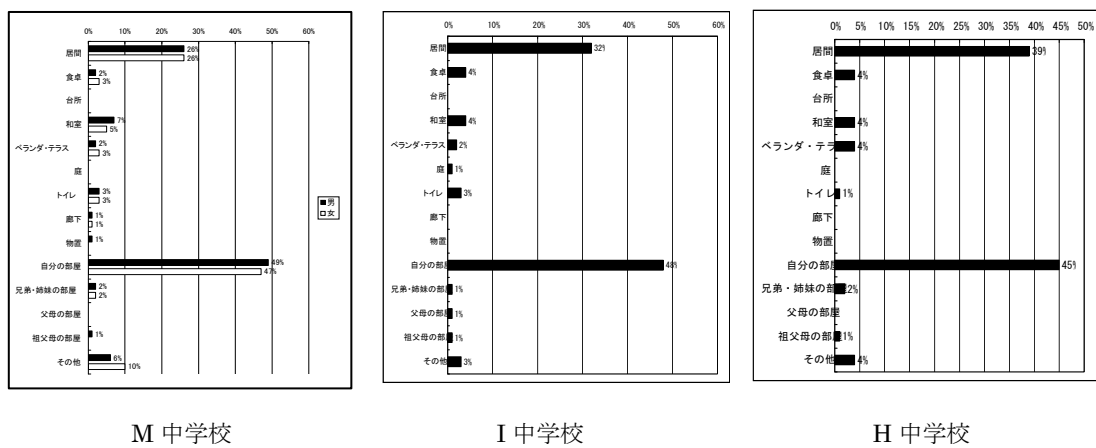


図1-4 自宅内で1番好きな場所

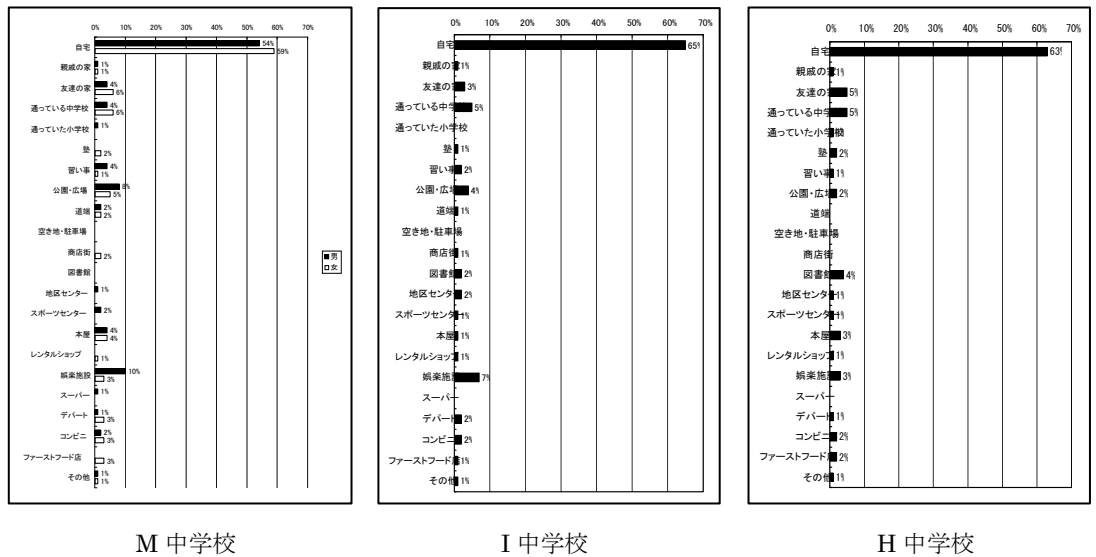


図1-5 地域の中で1番好きな場所

表 1-3 中学生の好きな場所と過ごし方

好きな場所	過ごす相手	何をして過ごすか	好きな理由
自宅	1人または家族	勉強 くつろぐ おしゃべり	落ち着くから くつろげるから 家族と会話ができるから
友達の家	友達	おしゃべり テレビゲーム	楽しいから 遊べるから
通っている中学校	友達	おしゃべり	楽しいから なんとなく
娯楽施設	友達	カラオケ ゲーム ボーリング 映画を観る	楽しいから 遊べるから
本屋	1人	立ち読み	本が読めるから 落ち着くから
コンビニ	1人または友達	買い物 飲食	買い物ができる なんとなく

以上の結果より中学生の好きな場所を考察すると、自宅の中では『1人で過ごすことができ、落ち着き・くつろぎの得られる場所』『家族で過ごすことができ、団らん・会話のできる場所』、地域の中では『友達と過ごすことができ、遊べる・楽しい場所』と位置づけられる。つまり、中学生の居場所に対するニーズは『落ち着き・くつろぎ』『団らん・会話』『遊べる・楽しい』であると指摘できる。

最後に大人側と中高生側のニーズの比較検討を行っていく。

以上のそれぞれのニーズを比較すると、『落ち着く・くつろぐ』というニーズは共通していることが分かる。中学生から挙げられた『団らん・会話』というニーズも居場所づくりのワークショップを見ると共通していると言える。しかし、中学生が地域活動拠点でどのような活動をしたかという質問への回答(図1-6)に挙げられた「自習・宿題」というニーズや『遊べる・楽しい』というニーズは今回の調査では大人側から明確に指摘されることはなかった。大人側の環境心理調査で出てきた『入りやすさ』というニーズに関しては、カフェという機能を設定していたこととも関係すると考えられる。

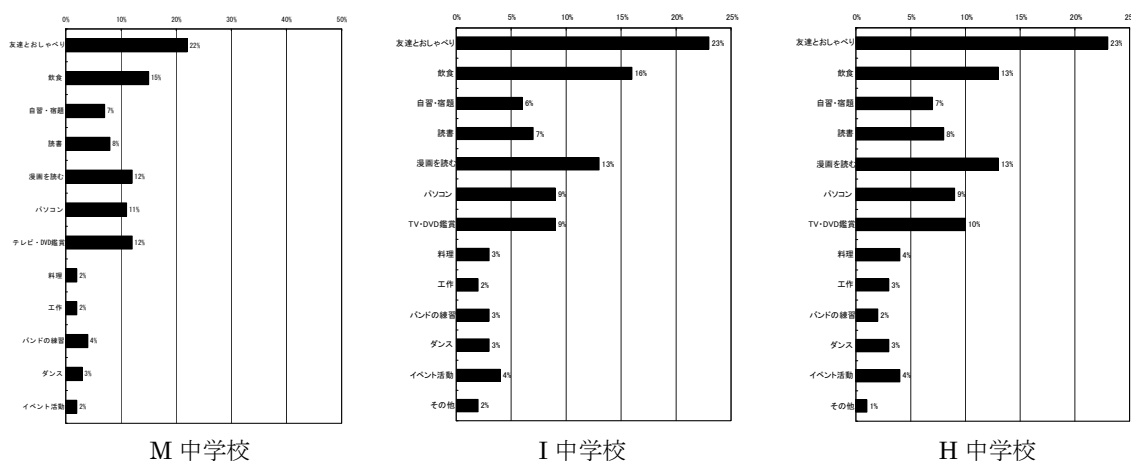


図 1-6 居場所でやりたい活動



#### (4) まとめ

本研究では大人側からの働きかけによる中高生のための地域活動拠点づくりの可能性と施設周辺の中学生のニーズについて調査・分析を行ってきたが、居場所づくりの方向性において多少の差異はあるものの大人と中高生は概ね同じ方向を見ていることが分かった。しかし課題点として、大人の主観が入ってしまうことや中高生特有のニーズに関しては拾いきれていないことが明らかになった。

これらの課題点に大人はよく理解した上で中高生のための地域活動拠点づくりの計画に大人が積極的に参画していくことは中高生・大人双方にとって十分に意義があると考えられる。“関わりと参画”のもとに相互理解を深め、協力し合って居場所づくりを進めていくことが望ましい。

## 1-2 「大人」の存在の意義

### (1) 背景と目的

2009年に行ったアンケート調査では、横浜市西部に新しくできた中高生のための地域活動拠点「ハッピースクウェア」の認知度、利用度についても回答してもらっている。そこで利用したことのある中学生に対して、どのような点で満足しているかという質問項目を設けた。その結果、回答率の高かった項目は『くつろげる』『飲食ができる』『気軽に立ち寄れる』『長時間居られる』『マスターの人柄』であった。

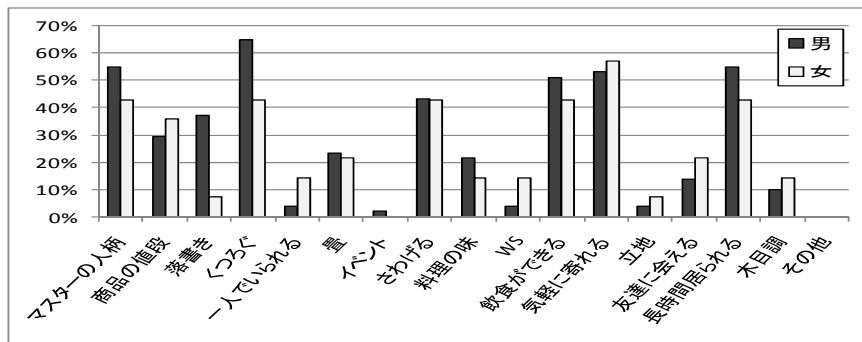


図1-7 ハッピースクウェア利用者の満足点

最初の4項目に対しては「ハッピースクウェア」の設立にあたって行われた3回のワークショップ（1-1参照）で参加者である大人達が考えたコンセプト通りであり、そのコンセプトが正しかったことを証明する結果となっている。しかし、ここで注目すべき点は残りの『マスターの人柄』という項目である。これは設立当初のワークショップではだれもが意識していたわけではなく、設立後に利用してもらう中で自然発生的に出てきたものだと考えられる。実際に「ハッピースクウェア」にいるマスターは小学生や中学生に「マスター！」や「マッス！」と愛称で呼ばれており、その存在は「ハッピースクウェア」に大きな影響を与えていることが窺えられる。

そこで本項では、「大人」の存在意義について分析していく。「大人」がいることでその場所がどのように認知されるのか、またどのような影響を与えるのか、さらにどのような「大人」がいれば、そのような影響を与えることができるのか、について分析・考察していく。

### (2) 「大人」と「場所」との関係

まず、「大人」がいることでその場所がどのように認知されるのか、について分析していきます。それを分析していくにあたり、「大人」と「場所」との関係について見ていかなければならない。そこで、アンケート調査によって地域にある自分の好きな場所を回答してもらっているのので、それを見ていくことで「大人」と「場所」との関係性について考察していく。

アンケート結果より、最も回答率が高かったのは82%の『自宅』であった。続いて、高かったのは40%の『娯楽施設』であり、『本屋』『友達の家』『親せきの家』『通っている中学校』と続き、そこまでが2割以上の回答率であった。ここで『本屋』と『娯楽施設』については判断できないが、残りの4項目については「大人」との関係性がありそうである。『自宅』では両親や兄弟がいる。『友達の家』では友達の両親、『親せきの家』では祖父母やおじ・おば、『通っている中学校』では学校の先生がいる。つまり、好きな場所として選ばれた場所は、そこに「大人」がいることで好きになったのではないだろうか。

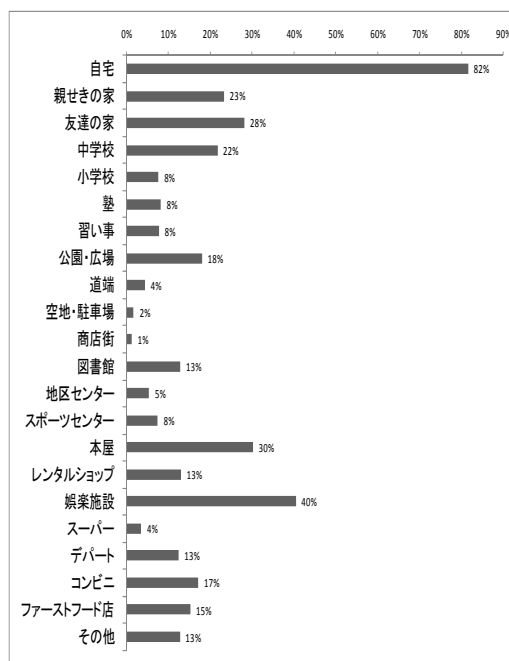


図1-8 好きな場所

好きな場所がなぜ好きかという質問に対して、多くの回答者が『落ち着くから』『安全・安心だから』と答えている。これは、「大人」がいることで意識しているにしろ、無意識にしろ、安心感や落ち着くなど心理的影響を与えていると考えられる。

そこで「大人」と「場所」の関係性をより明確化していくために、好きな場所のアンケート結果で回答率の高かった『自宅』『親せきの家』『友達の家』『通っている中学校』『本屋』『娯楽施設』の6項目で自分が信頼のおける「大人」は誰であるかを分析していった。

まず、『自宅』を好きな場所として選んだ生徒を分析していく。どの中学校でも『両親』という項目が総合のときより高くなっていることがわかる。他の項目ではほぼ総合のときの割合と変わっていない。つまり、『自宅』を好きな場所として選んでいるのは『両親』がいるからと考えられる。

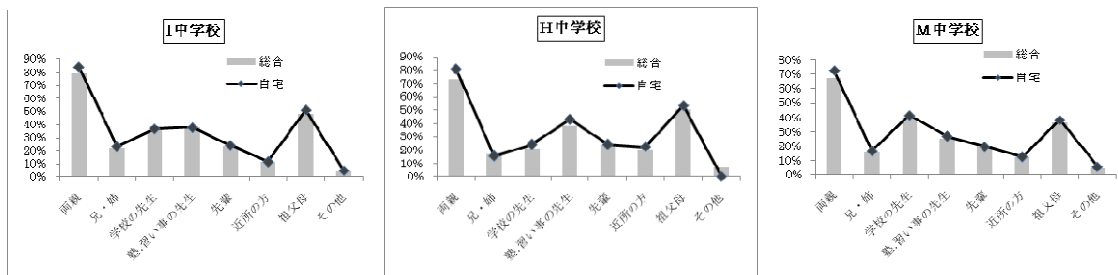


図1-9 『自宅』を選んだ生徒の信頼のおける身近な「大人」

続いて、『親せきの家』を好きな場所として選んでいる生徒では、特に I 中学校が顕著に表れているが H 中学校、M 中学校でも同様の傾向が表れている。総合のときよりも『祖父母』を選んでいる割合が高くなっている。これは、『親せきの家』には『祖父母』がいるケースが多いということだと考えられる。つまり『祖父母』が好きであるから『親せきの家』が好きという因果関係があるのではないだろうか。

また、『両親』の割合も総合よりも高いことが分かる。これは、『親せきの家』というのが『両親』の育った場所ということから関心を持つと考えられる。

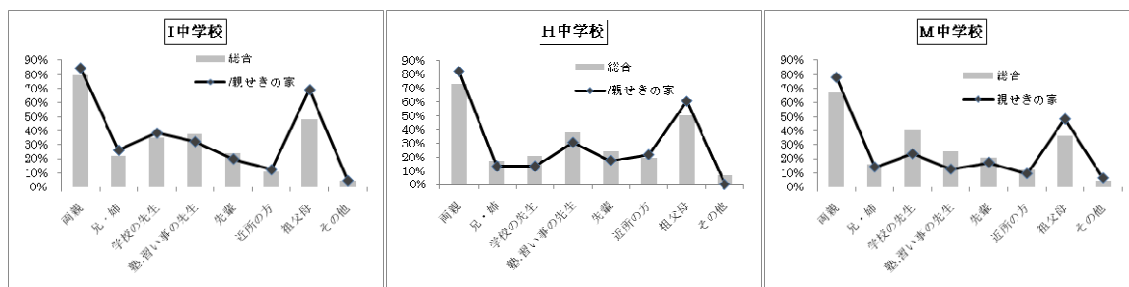


図 1-10 『親せきの家』を選んだ生徒の信頼のおける身近な「大人」

『友達の家』と回答している生徒は、I 中学校では、ほとんど総合のときの割合と変わらない。『両親』と『学校の先生』が若干低くなっている。

H 中学校では『両親』『先輩』『近所の方』が総合より高くなっている。この場合、友達とは直接『先輩』であったり、もしくは友達の兄弟が『先輩』であるケースであり、『近所の方』とは友達の親である可能性が高い。その他の項目で『友達の親』を回答しているケースもあるので、そのように考えることができる。

M 中学校では『兄・姉』と『先輩』の項目が総合よりも高かった。『先輩』に関しては H 中学校と同じ理由と考えられる。他の項目は総合とほとんど変わらない。

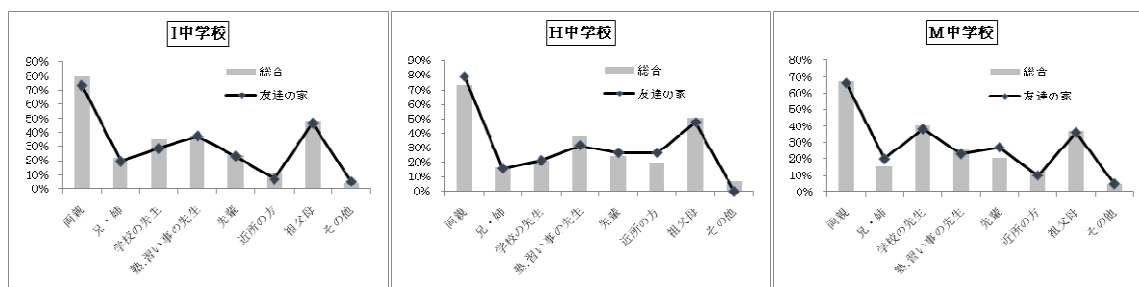


図 1-11 『友達の家』を選んだ生徒の信頼のおける身近な「大人」

『通っている中学校』と回答している生徒では、すべての中学校で『学校の先生』の割合が総合よりも高くなっていることが分かる。やはり、『通っている中学校』を好きになるのは『学校の先生』を信頼しているからではないだろうか。

I 中学校では『両親』と『塾、習い事の先生』の割合も総合よりも高い。

H 中学校では『兄、姉』の割合が非常に高くなっている。また I 中学校同様『塾、習い事の先生』の割合は高いが、逆に『両親』の割合は1割以上低くなっている。

M 中学校では I 中学校、H 中学校ほど『塾、習い事の先生』の割合は高くなっていない。

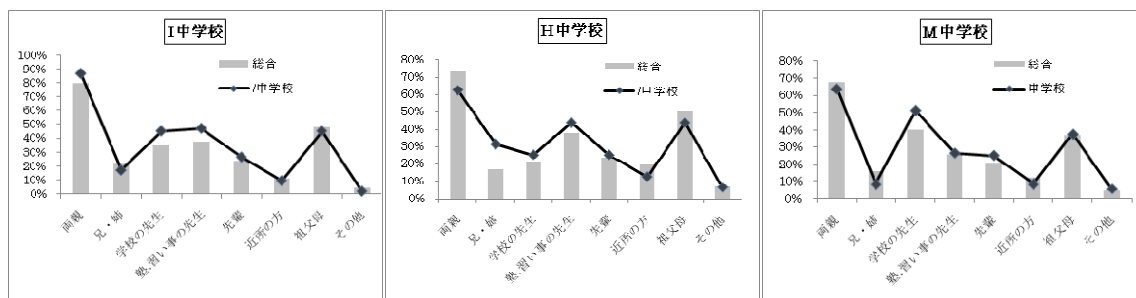


図 1-12 『通っている中学校』を選んだ生徒の信頼のおける身近な「大人」

『本屋』を選んでいる場合は、I 中学校では総合の割合とほとんど同じである。『両親』の割合が若干高く、『学校の先生』『先輩』が若干低くなっている。

H 中学校では『両親』と『兄・姉』と『祖父母』の割合が1割程低くなっている。『学校の先生』と『近所の方』の割合は総合より高い。

M 中学校ではほぼ総合と変わらないが、『先輩』の項目が1割以上低くなっている。

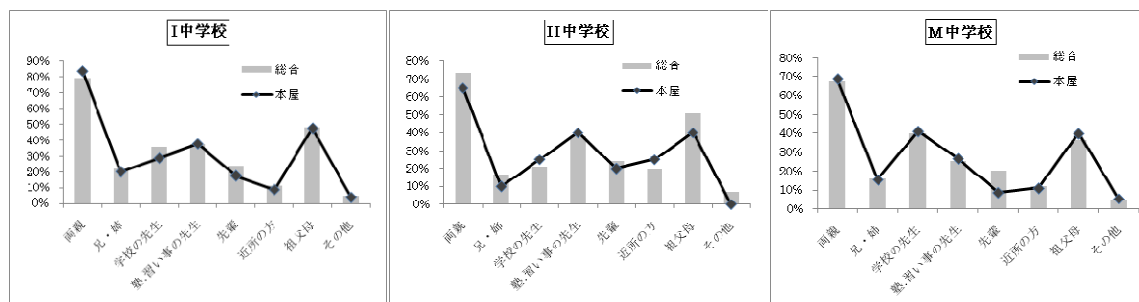


図 1-13 『本屋』を選んだ生徒の信頼のおける身近な「大人」

最後に『娯楽施設』を好きな場所と回答している生徒を分析していく。

I 中学校と M 中学校では総合と変わらない結果となった。

H 中学校では「両親」「学校の先生」「祖父母」の割合が総合よりも1割以上割合が低くなっている。「娯楽施設」が好きということは周囲の大人から解放されたいがために行くと考えられる。そのために低くなっていると考えられる。

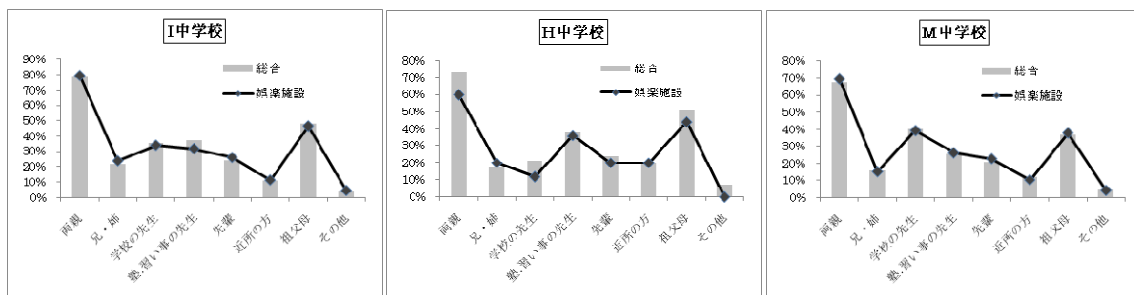


図 1-14 『娯楽施設』を選んだ生徒の信頼のおける身近な「大人」

以上の分析から、好きな場所に選ばれたところはそのにいると思われる「大人」の存在と関係がありそうということが分かる。『自宅』では『両親』、『親せきの家』では『祖父母』、『友達の家』では『先輩』『近所の方』、『通っている中学校』では『学校の先生』がそれぞれ影響を与えていると考えられる。しかし、逆に『本屋』と『娯楽施設』では回答率が下がることはあっても上がることはなかった。このような施設では「大人」という影響力はなく、どちらかという「大人」から距離を置くような場所なのかもしれない。

つまり、中学生が場所を好きになるためには「大人」がいることで「場所」に安心感を持ち、落ち着くことができる場所だと認知した時に初めてその場所を好きな場所と捉えることができる。また、そのような「大人」の目から開放されたいという欲求もあり、「大人」の視線から外れる楽しい場所も求めていると考えられる。

相反するような2つの方法であるが、どちらの場合も「大人」の存在が前提としていなければならない。

### (3) 「大人」の属性

いままで、「大人」と「場所」の関係性について分析してきた。しかし、ここで言う「大人」とはどのような人を指すのであろうか。例えば、成人式を迎えた人のように年齢に依存した人を指すのか、自分が信頼を寄せることができれば年齢は関係なく、先輩の様な身近な人でもよいのか、などこの「大人」という言葉は非常に抽象的である。この場合の「大人」は信頼を寄せることのできる人、つまり自分の話をしっかりと聞いてくれる人やほめてくれる人、認めてくれる人のことではないかと考えられる。

そこで、アンケート調査によって中学生が信頼を寄せることのできる「大人」とはどのような人のことなのかを聞き出し、それを分析した。

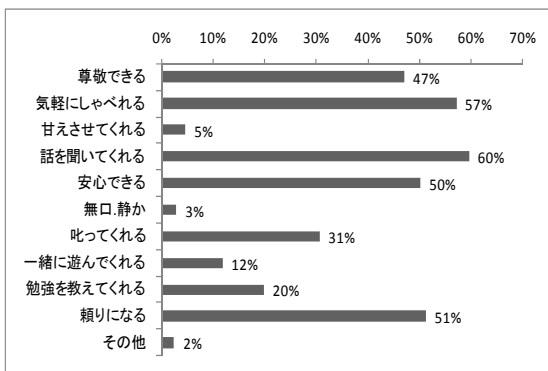
I 中学校で最も回答数が多かったのは『話を聞いてくれる』であった。以下『気軽にしゃべれる』『頼りになる』『安心できる』『尊敬できる』が5割の回答率を得ている。次に多かったのが『叱ってくれる』という項目で全体の3分の1程度である。これは、昨今の青少年が悪い行為をしていても、大人が見て見ぬふりをすることに對して、悪い

ことは悪いときちゃんと正してほしいということだと思われる。『一緒に遊んでくれる』や『甘えさせてくれる』『勉強を教えてくれる』という項目は思いのほか低かった。

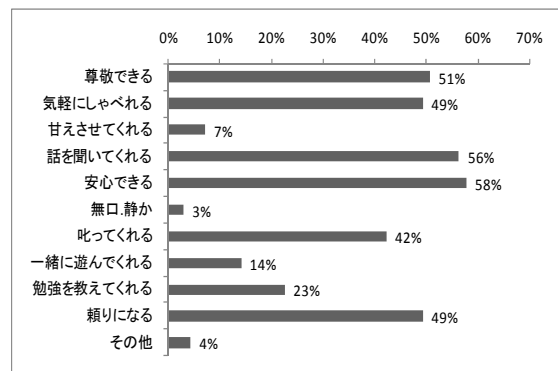
H 中学校では、ほとんど I 中学校の傾向と変わらない。回答率が高かったのは『尊敬できる』『気軽にしゃべれる』『話を聞いてくれる』『安心できる』『頼りになる』でほぼ 5 割の生徒が回答している。最も多かったのは「安心できる」である。

M 中学校も他の 2 つの中学校と大きく変わらない。最も回答が多かったのが『気軽にしゃべれる』である。しかし、他の中学校よりも『尊敬できる』『頼りになる』という項目の割合が低いことがわかる。これは「大人」を友達に近い存在として位置付けているのではないかと考えられる。

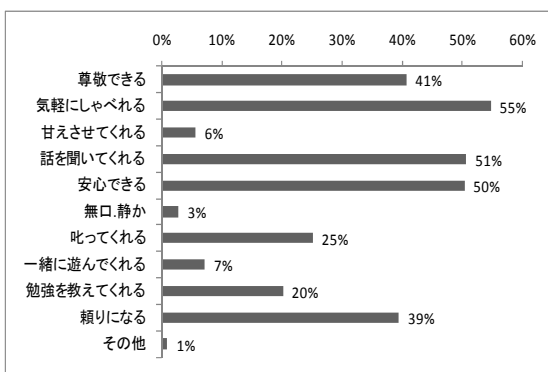
つまり、各中学校のアンケート結果より信頼を寄せることのできる「大人」とは『気軽にしゃべれる』『話を聞いてくれる』『安心できる』『尊敬できる』『頼りになる』様な人のことである。さらに付け加えるのであれば、『叱ってくれる』人を求めていることがわかった。



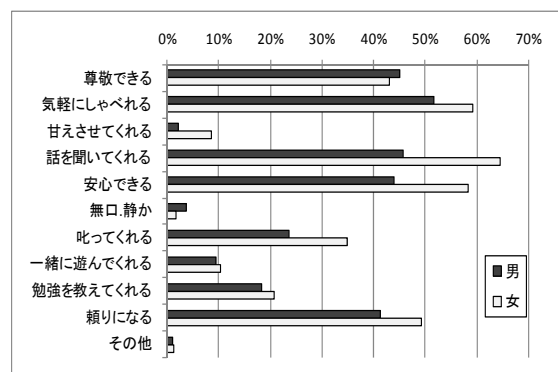
I 中学校



H 中学校



M 中学校



男女別

図 1 - 1 5 信頼における「大人」の属性

#### (4) まとめ

本項は「大人」の存在意義について「大人」と「場所」との関係性から分析してきた。さらに、ここで言う「大人」についてどのような人のことを指すのかについても分析してきたので、ここでまとめていく。

「大人」とは「場所」に影響を与える存在である。その影響とは、

- ① 「場所」に見えない安心感や落ち着くといった雰囲気を与える
- ② 「場所」のもつ安全な雰囲気から離れたい気分させる

というものである。「場所」に物理的な影響よりも心理的な影響を強く与える。①は(2)の考察そのものであるが、②については『本屋』や『娯楽施設』を選択していた理由からの考察である。このような「場所」にすることで、好きな場所と認知されるのではないだろうか。

続いて、「大人」とはどのような存在か、についてである。「大人」とはどのような「大人」でも良いわけではなく、信頼の寄せることのできる人であるべきである。具体的には

- ① 気軽にしゃべれる
- ② 話を聞いてくれる
- ③ 安心できる
- ④ 尊敬できる
- ⑤ 頼りになる
- ⑥ 叱ってくれる

様な「大人」のことである。①～⑤に関しては予想通りであったが、⑥に関しては予想外であった。しかし、「大人」は『甘えさせてくれる』人よりも『叱ってくれる』人の方が信頼を持てることが分かった。

ここでの話題はアンケートを取った中学生が中心である。そのため、中学生においては、信頼を寄せることのできる「大人」の存在が「場所」に影響を与えているだろうということがわかった。しかし、まだデータ量が少ないので一概に結論付けるまでには至っていない。今後、同様の調査によって、「大人」の存在することの影響をさらに明確化していくことが求められるだろう。



### 1-3 中学生の居場所—横浜市、他地域—

#### 1-3-1 横浜市

##### (1) 2008年度

横浜市で中高生のための地域活動拠点ができるのにあたり、施設周辺の中学生の居場所への意識や、居場所に対するニーズを知るためにI中学校、H中学校、M中学校の3つの中学校1、2年生を対象にアンケート調査を行った。

各中学校における学年別、男女別の回答者数は以下のとおりである。

I、Mの2つの中学校では男女ほぼ均等に回答を得られたが、H中学校では男子よりも女子からの回答が多く得られた。

表1-4 アンケート調査概要

調査対象	M中学校	I中学校	H中学校	合計
配布数	267	567	652	1486
回収数	239	414	278	931
回収率	89.5%	73.0%	42.6%	62.6%

表1-5 アンケート回答者の属性

	1年生	2年生	男子	女子
I中学校	152	259	200	209
H中学校	130	145	105	170
M中学校	131	108	119	120
合計	413	512	424	499

まず、アンケート回答者に基本属性を聞いた。

通学時間とその手段について聞いたところ、M中学校に関して見てみると、通学時間は、10分～15分程度の割合が最も多く、次いで15分～20分、5分～10分という結果であった。通学時間が最も短いもので1分、最も長いもので40分という回答があった。総合すると、M中学校に通っている生徒の多くは徒歩で5分～20分で通える範囲に在住しているということがわかる。学区が大きいI中学校とH中学校では、M中学校と比べて25分～30分の割合が大きいことがわかる。

通学手段に関してはすべての中学校において、自宅から学校までほぼ全員が徒歩で通学しているという結果であった。

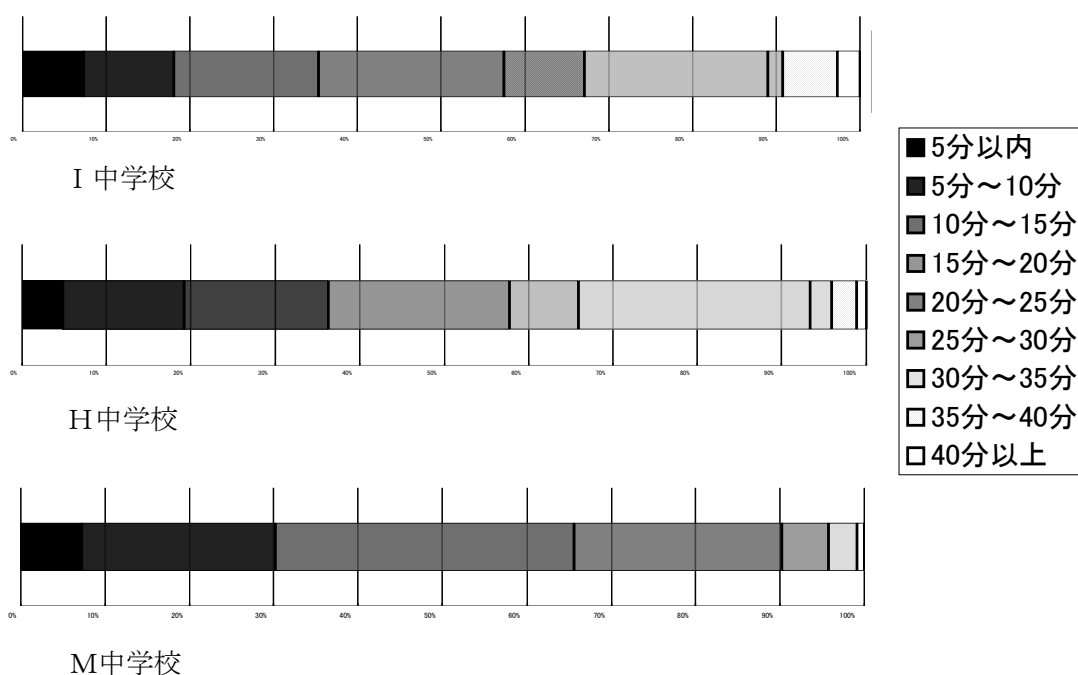


図 1 - 1 6 通学時間の割合

続いて、「好きな場所」についての項目である。

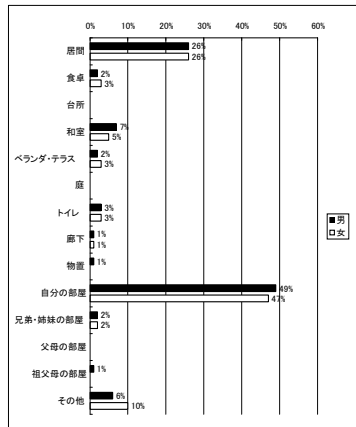
まず、自分の家の中で好きな場所について1番目から3番目まで選んでもらった。

M中学校では、1番目に好きな場所としての回答が「自分の部屋」「居間」の2つに二極化していることがわかる。2番目に好きな場所では、1番目に好きな場所と比べると「和室」「食卓」という回答が多く見られた。3番目に好きな場所は上位2つに比べて、結果がやや分散化したように思われる。1番目、2番目に比べて、個人の嗜好が表れた結果となったと考えられる。これまでにはあまり回答の見られなかった「ベランダ・テラス」「庭」「トイレ」「兄弟・姉妹の部屋」といった回答が挙げられている。男女間の比較ではあまり相違は見られず、男女間では好きな場所の意識にそこまで違いはないものと考えられる。

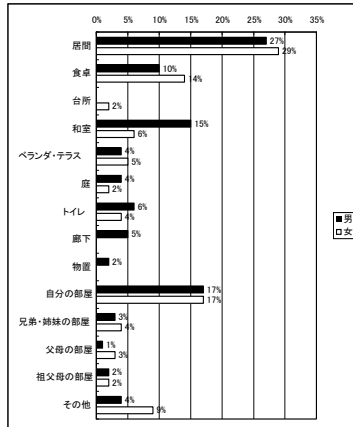
回答数の多かった順に見てみると、「自分の部屋」「居間」「和室」「食卓」という結果であった。

I中学校では、M中学校とほぼ同様の傾向が見られ、「自分の部屋」、「居間」、「和室」、「食卓」という回答が多かった。また、3番目に好きな場所を見てみると「台所」という回答がM中学校と比較すると多く挙げられていることがわかる。

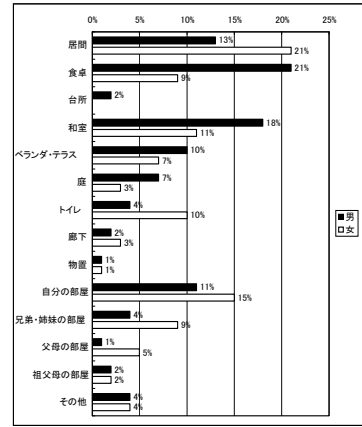
H中学校では、こちらもM中学校とほぼ同様の傾向が見られ、「自分の部屋」、「居間」、「和室」、「食卓」という回答が多く挙げられた。また、I中学校と同様に「台所」という回答がM中学校と比較すると多く挙げられた。



1 番目に好きな場所

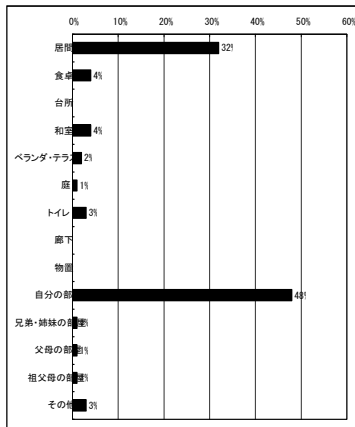


2 番目に好きな場所

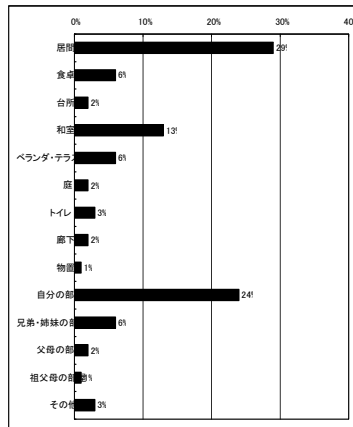


3 番目に好きな場所

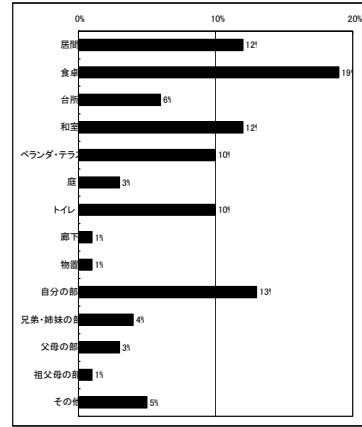
M中学校



1 番目に好きな場所

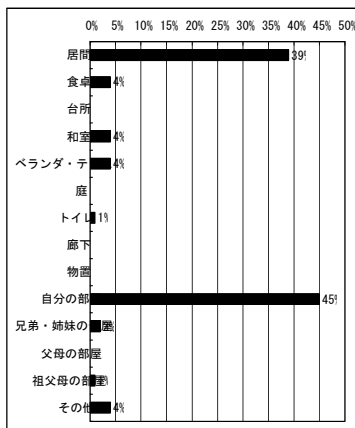


2 番目に好きな場所

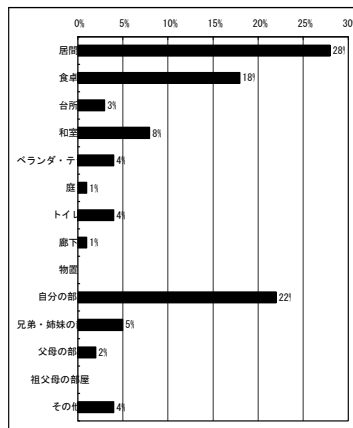


3 番目に好きな場所

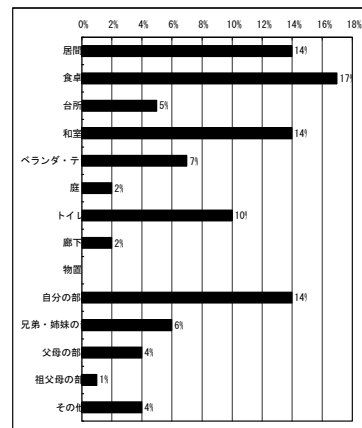
I 中学校



1 番目に好きな場所



2 番目に好きな場所



3 番目に好きな場所

H中学校

図 1 - 1 7 自分の家の中で好きな場所

次に、好きな場所で誰と、何をして過ごすのかについて聞いた。

その結果、すべての中学校でほぼ同様の結果が得られた。「1人」という回答が最も多く、「兄弟・姉妹」「父母」「祖父母」などの家族という回答が次いで多く挙げられた。

M中学校に関して、場所別に過ごす相手の割合を見てみると、好きな場所で上位に挙げられていた「自分の部屋」では「1人」という回答が8割以上を占め、「居間」では家族と過ごすとした生徒が多かった。「和室」では「1人」と家族という回答がほぼ同じ割合で挙げられた。

他の2つの中学校でも好きな場所で「自分の部屋」「居間」「和室」「食卓」が多く挙げられていたことからこのような回答になったと思われる。

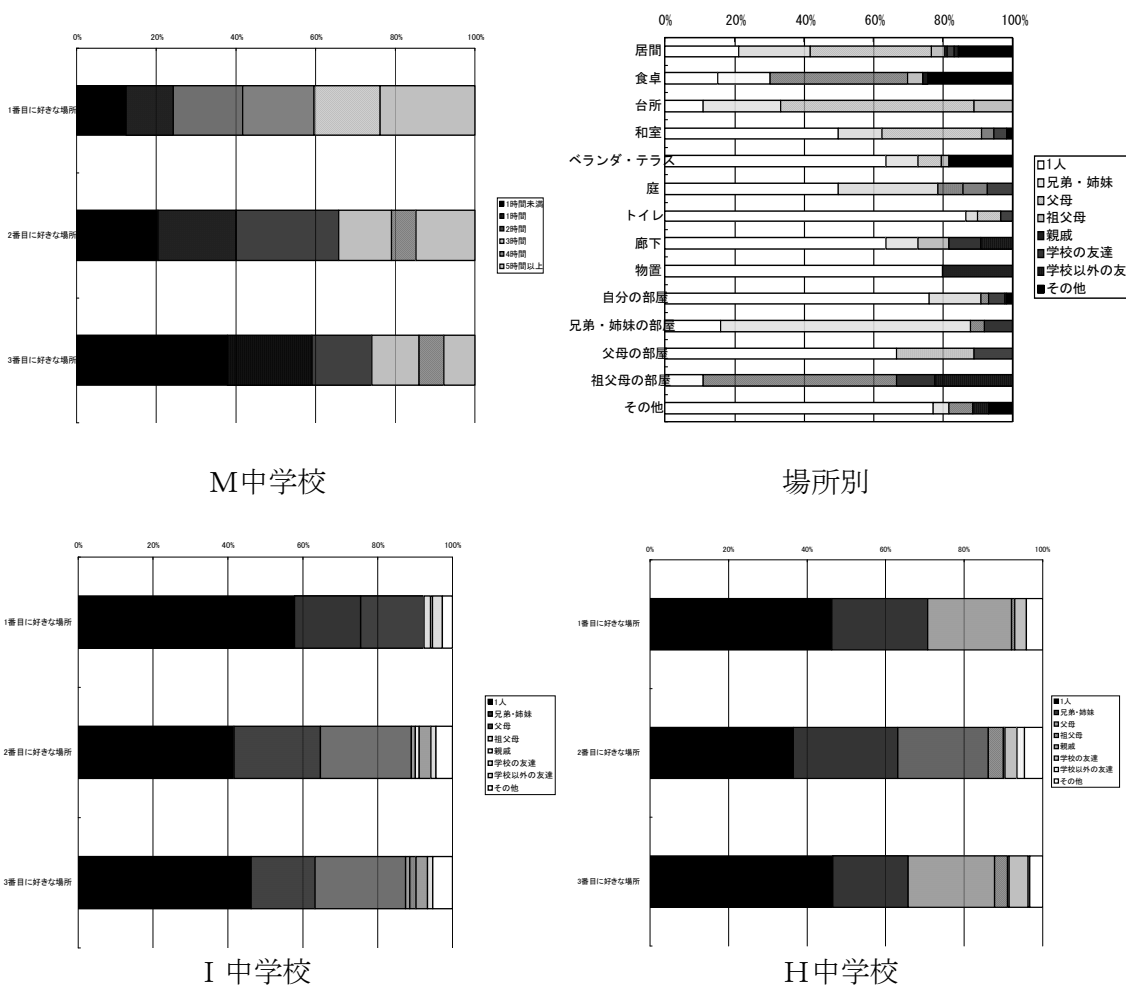


図 1 - 1 8 自宅の中で好きな場所で一緒に過ごす相手

自宅の中で好きな場所でどのようなことをして過ごすことが多いかという質問に対して、3つの中学校で似たような結果が得られた。

回答の多かったものを見てみると、「音楽を聴く」「TV・DVDを観る」「パソコン」「テレビゲーム」「ごろごろする・寝る」「ぼーっとする」などが多く挙げられ、好きな場所ではリラックスして過ごしていることが多いと考えられる。

M中学校での結果を総合した結果、自宅の中での好きな場所では「おしゃべり」「飲食」といった家族ですることよりも、「宿題」「自習」などの勉強や「読書」「音楽を聴く」「TV・DVDを観る」「パソコン」「テレビゲーム」「ごろごろする・寝る」「ぼーっとする」といったように1人でできるようなことをして過ごしていることが多いのがわかる。

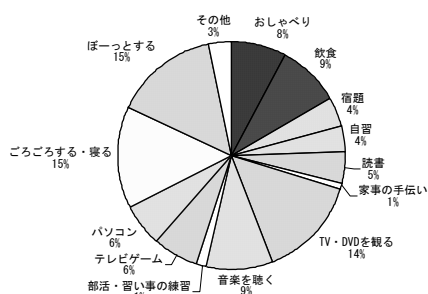


図1-19 何をして過ごすか

続いては、好きな場所でどのくらいの時間過ごすのか、という質問をした。この結果に関しても、各中学校で大きな相違は見られなかった。

自宅の中で過ごしている時間をあまり意識していないためか、回答にばらつきが見られたが、グラフを比較してみると好きな順番に伴って過ごしている時間も長くなっていることがわかる。

大まかに見ると、好きな場所で過ごす時間は1時間～4時間程度の生徒が多いようである。

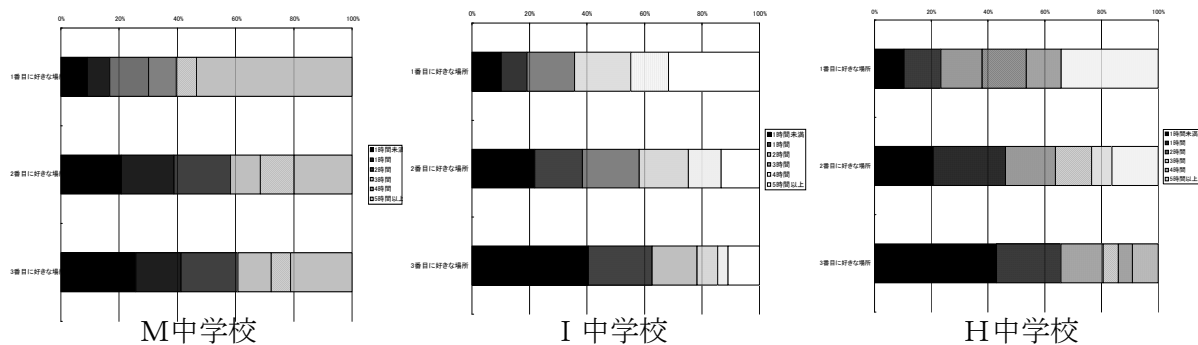


図1-20 自宅の中で好きな場所で過ごす時間

これまでの結果と好きな理由として挙げられた回答から、中学生の自宅の中での好きな場所を考察していく。

好きな場所として挙げられていた「自分の部屋」「居間」「和室」「食卓」について、誰と過ごすか、何をしているかという質問の回答を重ね合わせて考察すると、「自分の部屋」では「1人」で過ごし、「宿題」「自習」などの勉強をしたり、「音楽」を聴いたり「パソコン」や「テレビゲーム」をしたりして遊び、「ごろごろする・寝る」「ぼーっとする」ことでくつろいでいる生徒が多いようである。「自分の部屋」が好きな理由は「くつろげるから」「落ち着くから」「なんとなく」といった回答が多く挙げられていた。

「居間」「食卓」では、「兄弟・姉妹」「父母」「祖父母」などの家族と「飲食」したり「おしゃべり」をしたり、「TV・DVD」を観たりしてくつろいでいることが多いようである。好きな理由は「家族と会話ができるから」「くつろげるから」などが挙げられていた。

「和室」では「1人」または家族と過ごし、「ごろごろする・寝る」「ぼーっとする」ことでくつろいでいることが多いようである。好きな理由は「落ち着くから」「くつろげるから」といったものが挙げられていた。

このことより、中学生の自宅の中で好きな場所は以下のように位置付けることができるのではないかと考える。

#### <自宅の中で好きな場所>

『1人で過ごすことができ、落ち着き・くつろぎの得られる場所』

『家族で過ごすことができ、団らん・会話のできる場所』

表1-6 自宅の中で好きな場所

好きな場所	過ごす相手	何をして過ごすか	好きな理由
自分の部屋	1人	勉強 読書 音楽を聴く ごろごろする・寝る ぼーっとする	落ち着くから くつろげるから なんとなく
居間・食卓	家族	食事 おしゃべり TV・DVDを観る	家族と会話ができるから くつろげるから なんとなく
和室	1人または家族	ごろごろする・寝る ぼーっとする	落ち着くから くつろげるから

次は「地域の中で好きな場所」について、アンケートに回答してもらった。

M中学校では、1番目に好きな場所は、男女共に6割程度の生徒が「自宅」を地域の中で好きな場所に挙げている。その他には1割程度の男子がカラオケボックスやゲームセンター、ボーリング場などの「娯楽施設」を挙げている。

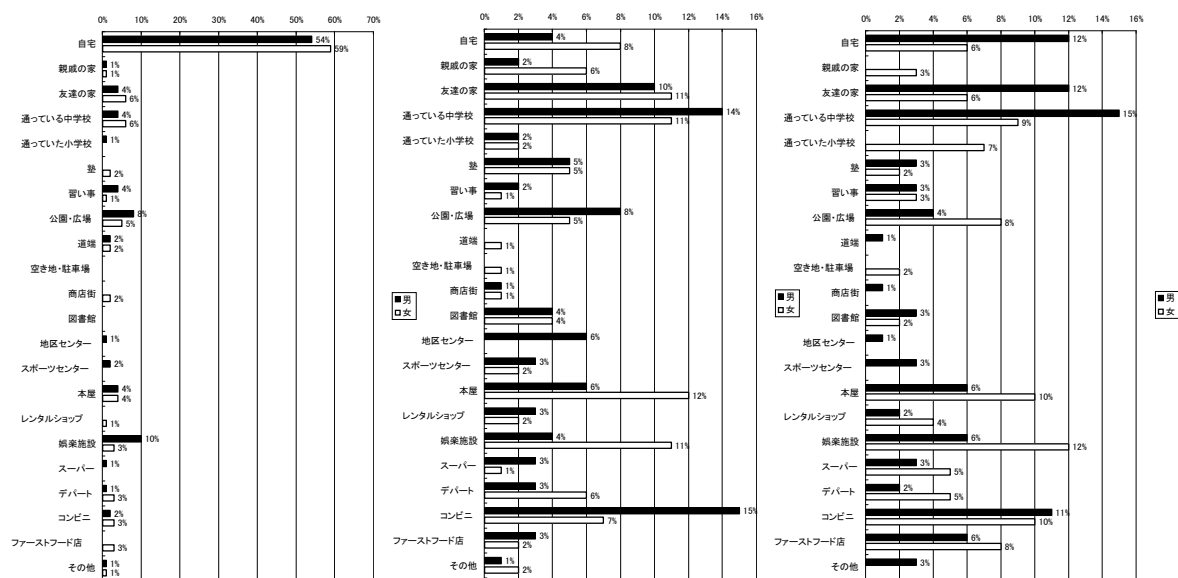
次に2番目に好きな場所を見てみると、1番目に好きな場所で多くの回答が挙げられた「自宅」という回答は1割未満という結果となった。1番目に好きな場所ではあまり挙げられていなかった「友達の家」「通っている中学校」「本屋」「コンビニ」といった回答がそれぞれ1割程度挙げられているのがわかる。

3番目に好きな場所ではこれまでにあまり回答の見られなかった「ファーストフード店」という回答が約1割程度挙げられている。

それぞれの比較から、男女共に「自宅」を地域の中で最も好きな場所と感じている生徒が多いことがわかる。男女間の比較では「本屋」「娯楽施設」「コンビニ」といった回答で結果に男女間の相違が見られた。

回答数の多かったものから、「自宅」「友達の家」「通っている中学校」「娯楽施設」「本屋」「コンビニ」という結果となった。

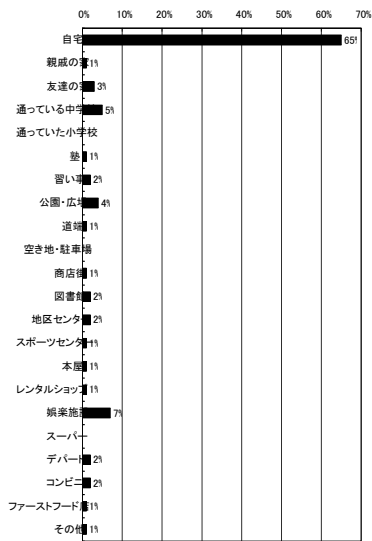
I中学校とH中学校の調査結果からわかるように概ねM中学校と同様の回答が得られた。



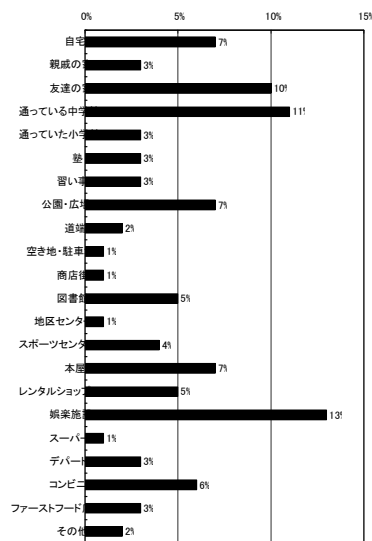
1番目に好きな場所

2番目に好きな場所  
M中学校

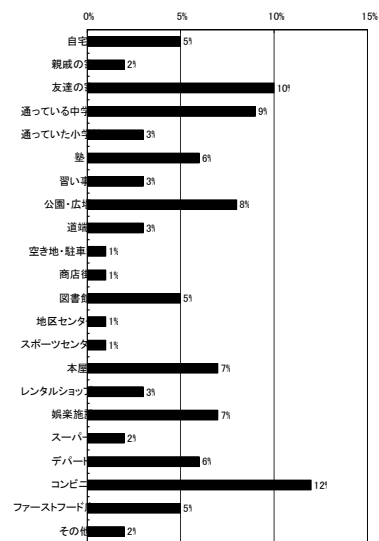
3番目に好きな場所



1 番目に好きな場所

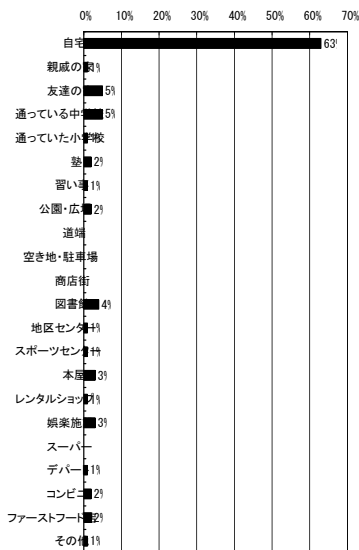


2 番目に好きな場所

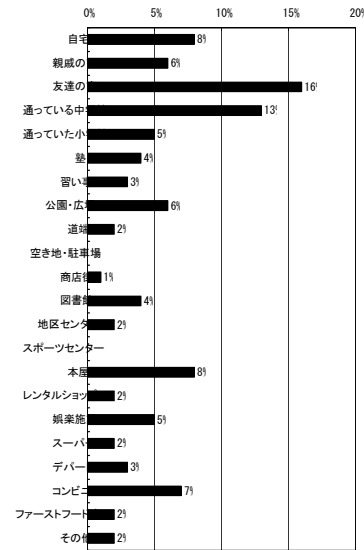


3 番目に好きな場所

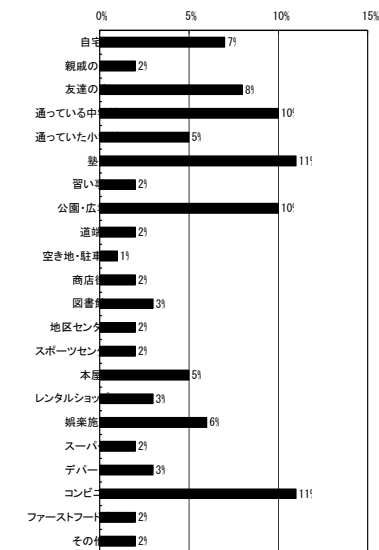
I 中学校



1 番目に好きな場所



2 番目に好きな場所



3 番目に好きな場所

H 中学校

図 1 - 2 1 地域の中で好きな場所



次に、地域の好きな場所で誰と過ごすのかを聞いた。その結果はこれまでと同様に各中学校とも概ね似たようなものであった。

自宅の中の好きな場所と比較すると、地域の場合では「友達」という回答が多く目立つ。アンケート結果より、地域の中の好きな場所では「友達」と過ごすか「1人」で過ごすとした生徒が多いことがわかる。

M中学校の回答を場所別に見ると、好きな場所で上位に挙げられていた「自宅」「友達の家」「通っている中学校」「娯楽施設」「本屋」「コンビニ」について見てみると、「自宅」では「1人」または「兄弟・姉妹」「父母」などの家族、「友達の家」「通っている中学校」「娯楽施設」では圧倒的に「友達」と過ごすとした生徒が多い。「本屋」では「1人」、「コンビニ」では「1人」または「友達」と過ごすという結果となった。

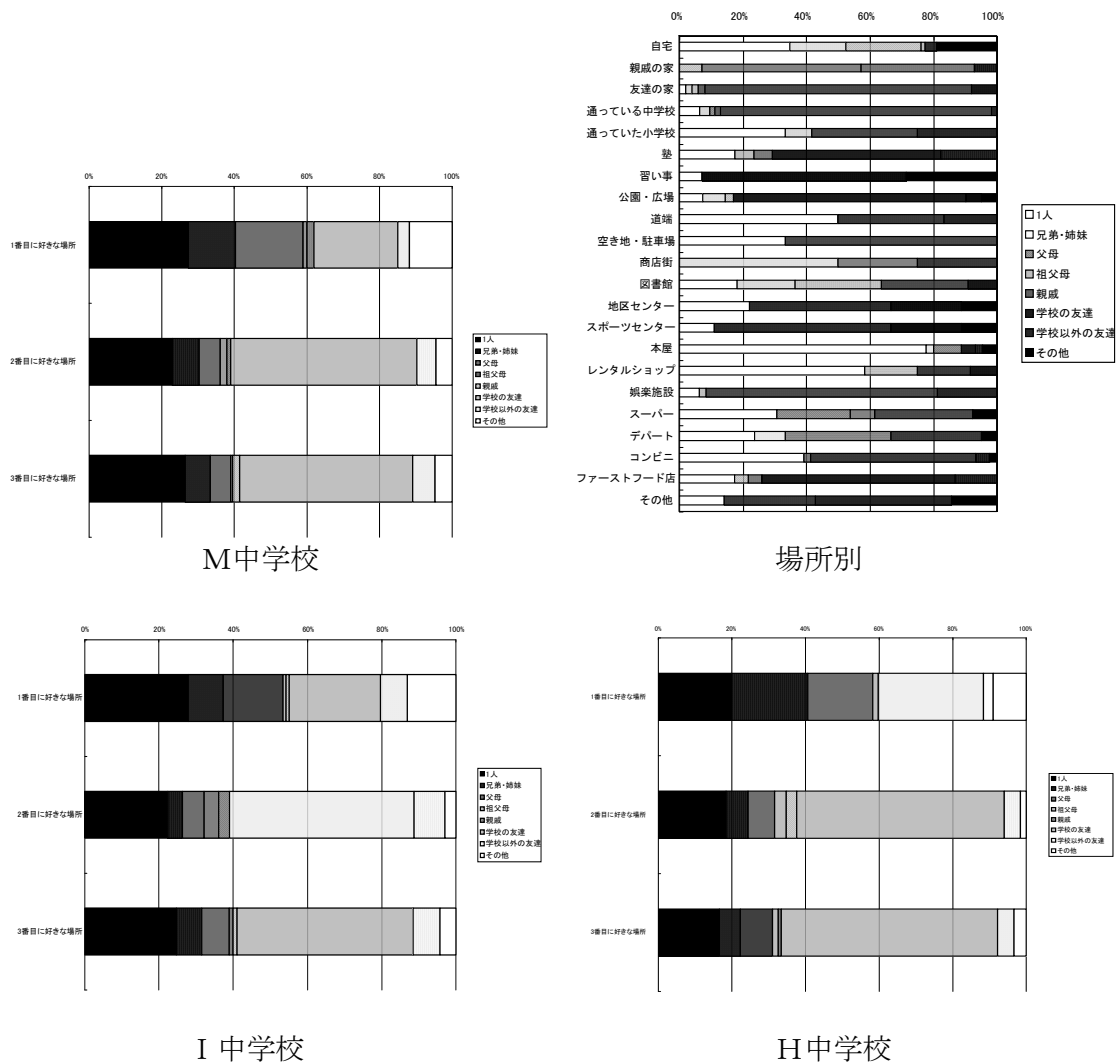


図 1 - 2 2 地域の中で好きな場所で一緒に過ごす相手

地域の中の好きな場所でどのようなことをして過ごすかという質問に対して、自宅の中の場合と同様に3つの中学校とも、結果に大きな相違は見られなかった。このことより、中学生の余暇時間の過ごし方に関して多少の差はあるものの、今回の調査では地域差は見られなかったことがわかる。

大まかに見ると、「おしゃべり」や「買い物」、「ゲーム」をしたり「友達」と遊んで過ごすという回答と、「飲食」や「宿題」をしたり「読書」や「TV・DVDを観る」といったように「1人」で好きな事をしたり、くつろいだりして過ごすといった回答に分けられる。

回答数の多かったものから「おしゃべり」「ぶらぶらする」「買い物」という結果となった。

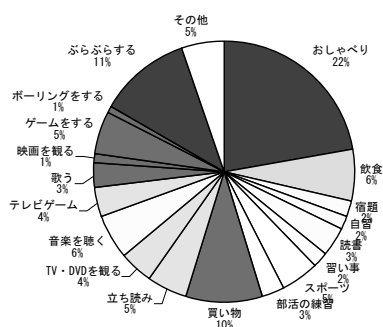


図1-23 地域の中で好きな場所で何をして過ごすか

好きな場所でどのくらいの時間過ごすのかという質問に対して、中学校間の相違は見られなかった。自宅の中の場合と同様に好きな順が上位になるにつれて、過ごす時間が長くなっていることがわかる。自宅の中の場合よりも全体的に滞在時間が長く、地域の中の好きな場所には2時間～5時間程度過ごしている生徒が多いようである。

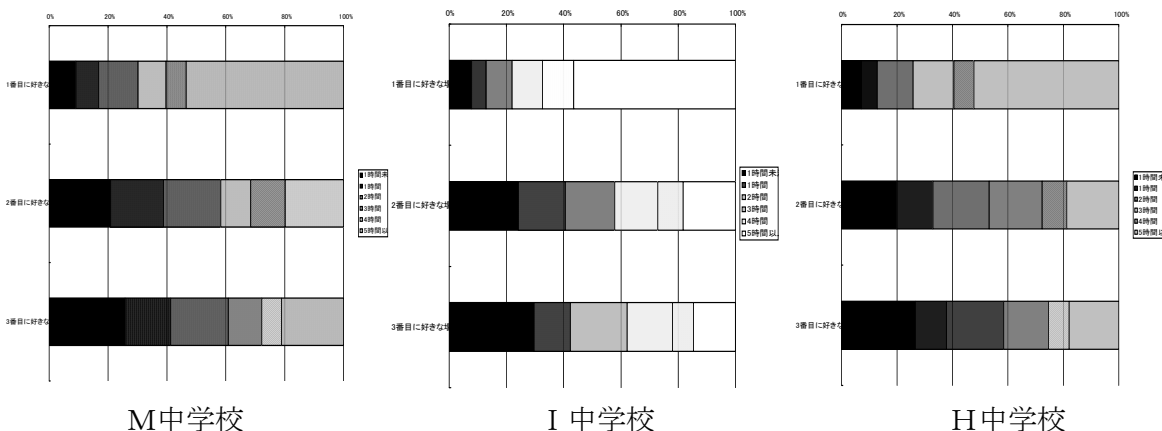


図1-24 地域の中で好きな場所で過ごす時間

これまでの結果と好きな理由として挙げられた回答から、中学生の地域の中での好きな場所を考察する。

好きな場所として最も多くの回答が挙げられていた「自宅」については自宅の中の好きな場所の場合と同様のニーズがあると考えられる。

地域の中にあり、好きな場所として挙げられていた「友達の家」「通っている中学校」「娯楽施設」「本屋」「コンビニ」について、誰と過ごすか、何をしているかという質問の回答を重ね合わせて考察すると、「友達の家」「通っている中学校」「娯楽施設」では「友達」と「おしゃべり」をしたり「テレビゲーム」や「カラオケ」「ゲーム」をして遊んで過ごす生徒が多いようである。これらの場所が好きな理由は「楽しいから」「遊べるから」という回答が多く挙げられていた。

「本屋」「コンビニ」に関しては、「1人」で立ち読みをしたり、「1人または友達」で「買い物」「飲食」をして過ごすことが多いようである。好きな理由は「本が読めるから」「買い物ができるから」「落ち着くから」「なんとなく」という回答が挙げられた。

このことより、中学生の地域の中で好きな場所は以下のように位置付けることができるのではないかと考える。

<地域の中で好きな場所>

『友達と過ごすことができ、遊べる・楽しい場所』

表1-7 地域の中で好きな場所

好きな場所	過ごす相手	何をして過ごすか	好きな理由
自宅	1人または家族	勉強 くつろぐ おしゃべり	落ち着くから くつろげるから 家族と会話ができるから
友達の家	友達	おしゃべり テレビゲーム	楽しいから 遊べるから
通っている中学校	友達	おしゃべり	楽しいから なんとなく
娯楽施設	友達	カラオケ ゲーム ボーリング 映画を観る	楽しいから 遊べるから
本屋	1人	立ち読み	本が読めるから 落ち着くから
コンビニ	1人または友達	買い物 飲食	買い物ができる なんとなく

続いて、地域活動についての項目である。

地域活動への参加度を聞いたところ、回答者のうち、地域で行われるイベントや体験学習へ参加したことがある生徒が約6～7割、参加したことがない生徒が約3～4割という結果になった。

地域でイベントや体験学習の行われる頻度に差はあるものの、概ね半数以上の生徒が地域活動へ参加したことがあるという結果であった。

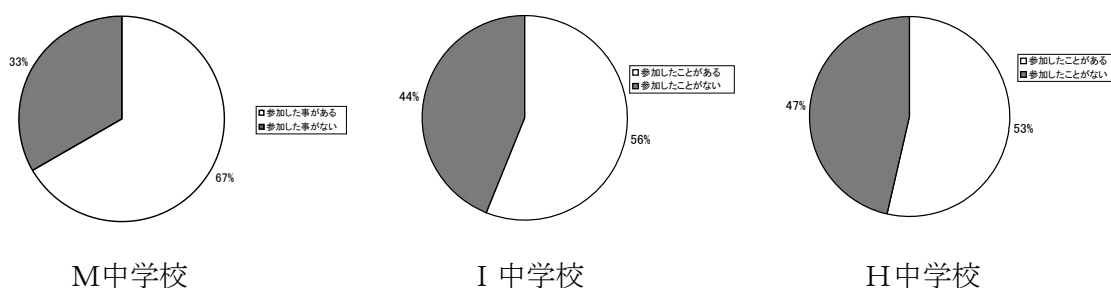


図 1 - 2 5 地域活動への参加度

横浜市にできた中高生のための地域活動拠点「ハッピースクウェア」が開所されて3カ月時点において行われた認知度調査である。その間にホームページやチラシの配布、各学校への呼びかけなどで施設の認知を図ってきた。

しかし、イベントや活動の展開が本格的に進められていなかったためかM中学校の生徒に対しても約2割未満の認知しか得られていなかった。I、Hの2つの中学校にいたっては1割未満という結果となった。

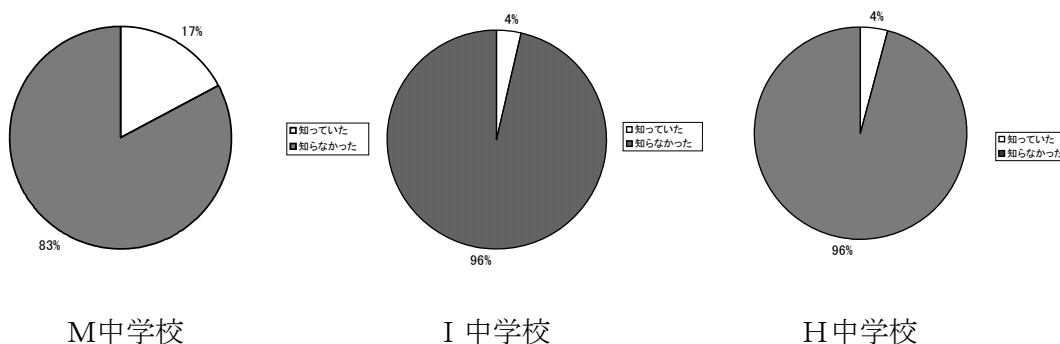


図 1 - 2 6 地域活動拠点の認知度

横浜市で新しくできた中高生のための活動拠点「ハッピースクウェア」（その当時名称未定）でどのような活動がしてみたいかという質問に対する質問を聞いた。

M中学校では居場所のイメージがあまり持てなかったためか、控えめな回答が目立った。I、Hの2つの中学校ではM中学校と比べて多くの回答を得ることができた。

前項での自宅の中の好きな場所や、地域の中の好きな場所でどのようなことをして過ごしているかという質問で多く回答が挙げられた「おしゃべり」や「飲食」「自習」「読書」「パソコン」「TV・DVD鑑賞」をしてみたいと回答した生徒が多かった。

このことから、好きな場所でどのようなことをして過ごしているかが今後の施設のプログラムを検討していく上で重要なポイントとなっていくことが指摘できる。

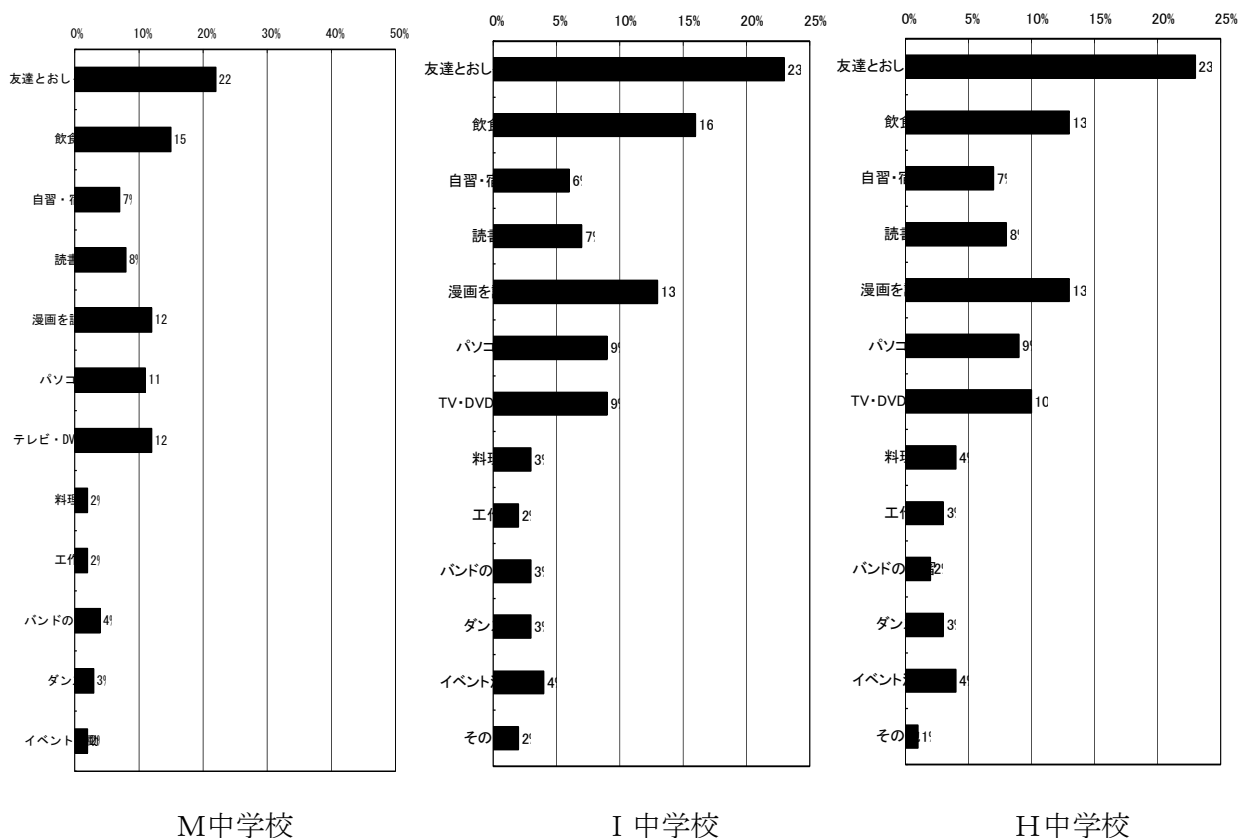


図 1 - 2 7 居場所で行いたい活動

「ハッピースクウェア」のような居場所空間をつくることに関心があるのかを聞いたところ、各中学校で3～4割の生徒が関心を示していることが分かる。逆に、全く関心を持っていない生徒も各中学校で2割前後いた。しかし、その中学校も最も多かったのは「どちらとも言えない」と回答した生徒であり、中学生にこのようなものがあることをあまり認知されていないのではないだろうか。

今後は、施設の認知度をどうやって上げていくか、「どちらともいえない」と回答した層や「興味がない」と回答した層をどのように活動の中に取り込んでいくかといったことに焦点を集めるべきであろう。

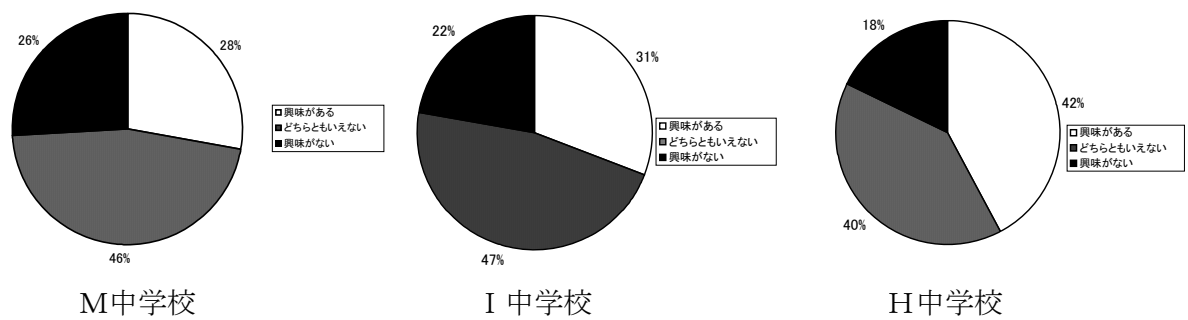


図1-28 居場所づくりへの関心度

(2) 2009年

横浜市では「ハッピースクウェア」に近接する I 中学校、H 中学校、M 中学校の 3 つの中学校に調査を行った。

各中学校における学年別の回答者数を以下のとおりである。

学年に関しては各中学校で回答していただいたクラスの数が異なっているためこのようばらつきが生まれた。I 中学校は各学年 3 クラスのサンプル調査、H 中学校は 1、2 年生各 1 クラスのサンプル調査、M 中学校は全校生徒による調査を実施した。

性別に関してはクラス単位でアンケートを実施しているため、各中学校で男女ほぼ均等である。

表 1-8 アンケート調査概要

学校名	I 中学校	H 中学校	M 中学校
配布数	400部	90部	480部
回答数	287部	71部	322部
回収率	71.80%	78.90%	67.10%
アンケート配布日	2009年1月8日	2009年1月13日	2009年1月16日
アンケート回収日	2009年1月15日	2009年1月21日	2009年1月23日

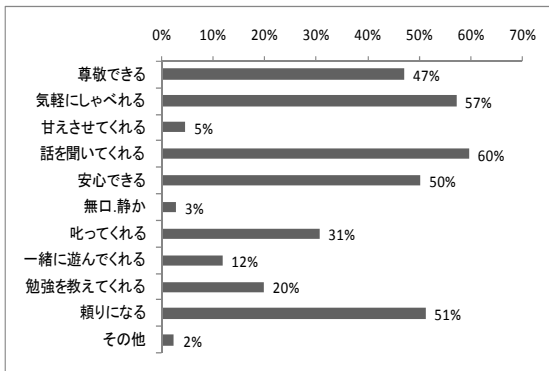
表 1-9 アンケート回答者の属性

学校名	I 中学校	H 中学校	M 中学校	合計
1年生	96人	36人	120人	252人
2年生	87人	35人	114人	236人
3年生	104人	0人	88人	192人
男子	147人	34人	167人	348人
女子	138人	37人	154人	329人

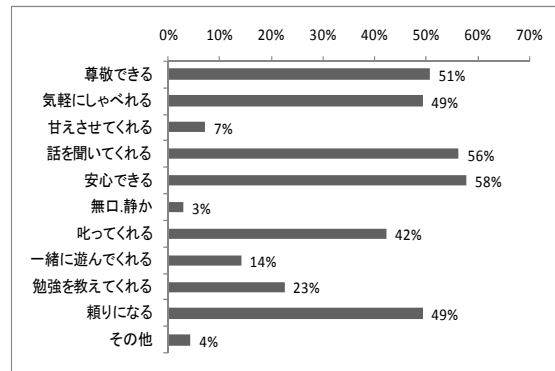
次は「信頼のおける大人」についてである。

各中学校における「信頼のおける大人」のイメージの割合のグラフを示す(図 1-1)。ここで言う「信頼のおける大人」とは「自分のことを褒めてくれる、認めてくれる、見てくれる大人」のことを指す。

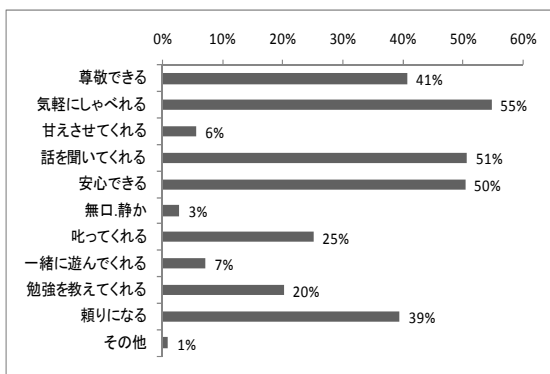
I 中学校では「話を聞いてくれる」が最も高く、順に「気軽にしゃべれる」「頼りになる」「安心できる」「尊敬できる」と続く。H 中学校では「安心できる」が最も高く、「話を聞いてくれる」「尊敬できる」「気軽にしゃべれる」「頼りになる」と岩崎中学校と上位の選択肢は変わらない。M 中学校では「気軽にしゃべれる」が最も高い。やはり他の 2 中学校と上位は変わらないが、「頼りになる」だけは他の中学校ほど高くはない。またどの中学校でも「叱ってくれる」という項目も比較的に回答率が高いことも分かる。男女別で見ると回答率の高い項目は学校別で見えてきたときと変わらないが、男子よりも女子の方が大人に対してイメージを強く持っていることが読み取れる。



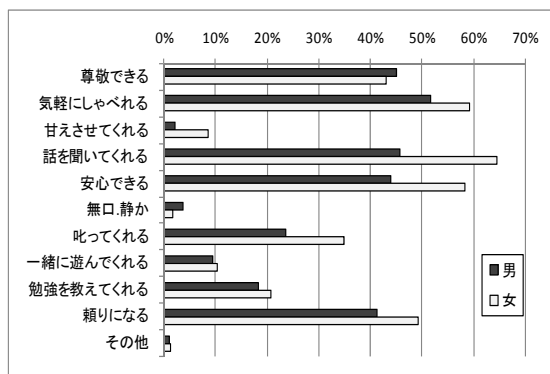
I 中学校



H 中学校



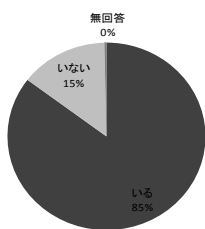
M 中学校



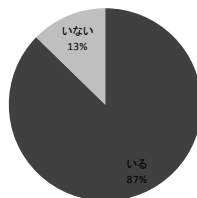
男女別

図 1-29 信頼のおける大人のイメージ

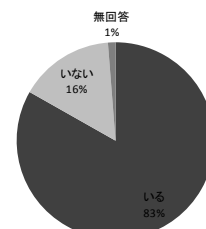
続いて、信頼のおける身近な大人がいるかどうかの項目に対して、各中学校はおよそ 85%の生徒が「いる」と答えた。



I 中学校



H 中学校



M 中学校

図 1-30 信頼のおける身近な大人の有無



次に信頼のおける身近な大人とは具体的に誰かを聞いたところ、各中学校で最も高いのは「両親」であった。次に高いのはI、Hの2つの中学校では「祖父母」であったが、M中学校は「学校の先生」という結果となった。その他では「塾、習い事の先生」も比較的高い結果となった。また、女子が「両親」「祖父母」で男子より高いが性別では大きく変わらないようである。

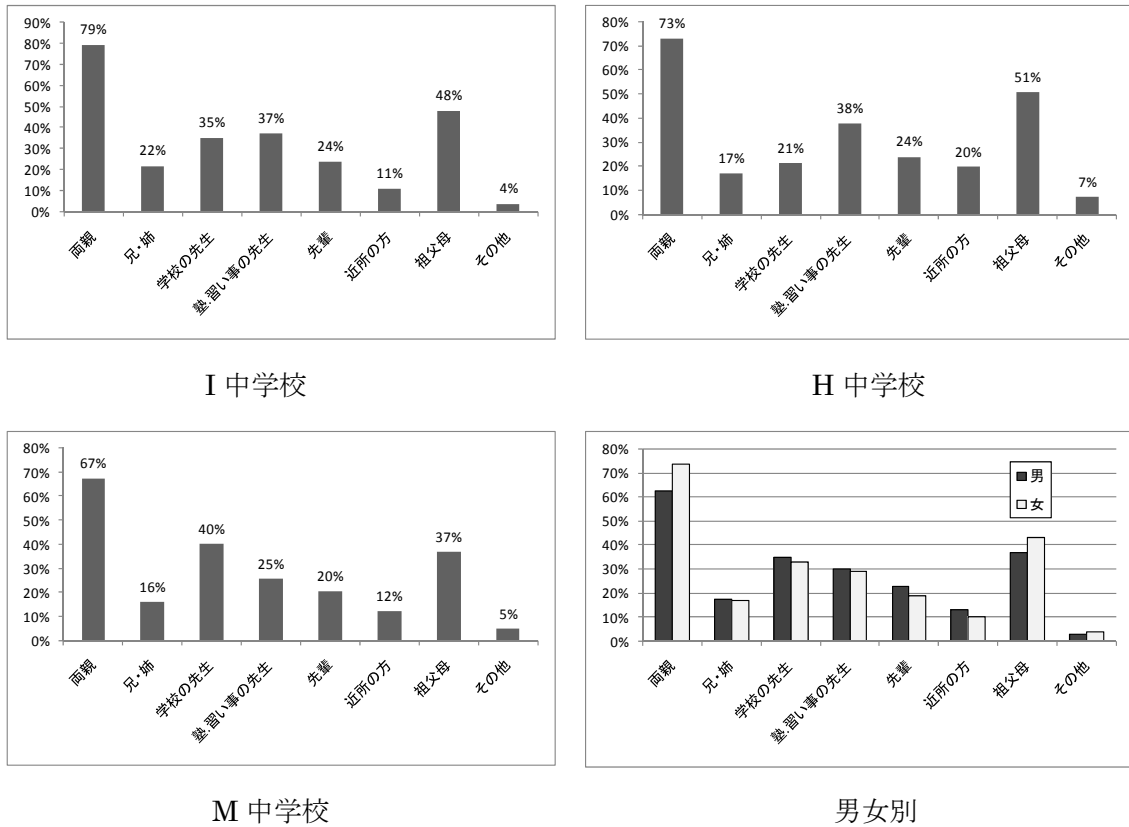


図 1 - 3 1 具体的な信頼のおける身近な大人

次にハッピースクウェアに関する項目である。

まず、「ハッピースクウェア」を知っているかどうかを確認したところ、I、Hの2つの中学校ではほとんどの方が知らないという結果となった。これはハピスクの立地が関係している。ハピスクのある位置がM中学校の学区であり、他の2つの中学校からだと遠いからだと考えられる。M中学校に関してはおよそ4割の方が知っているという結果となった。

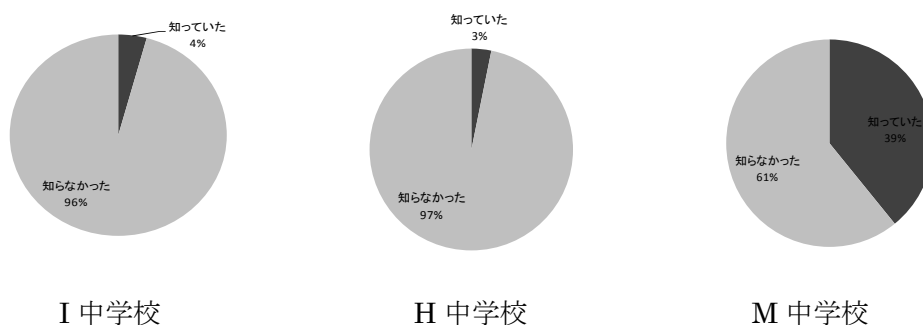


図1-32 ハッピースクウェアの認知度

さらに「知っている」と答えた方にどのようにハピスクを知ったのかを答えてもらった。大部分の方が「友達から聞いた」という回答をした。また、同様に高かったのが「立ち寄って」の項目である。ハピスクの前を通過して興味本意で入ったという形だと考えられる。また、アンケートの回答で「友達から聞いた」「立ち寄った」の2項目を選択した方がいた。これは「友達から聞いた」ことでハピスクを知って偶然目の前を通った時に「立ち寄った」ということであると考えられるので「友達」の項目とした。「その他」の項目としては「学校で紹介された」や「昨年度のアンケート」による宣伝を覚えていたということである。

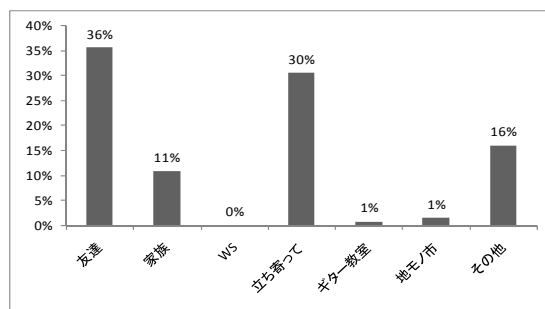


図1-33 ハッピースクウェアの認知方法

I、Hの2中学校では知っていると言った方の中で行ったことがあると言った方はいなかった。M中学校では「知っていた」と言えうちのおよそ4割の方が一度はハピスクを訪れているという結果となった。

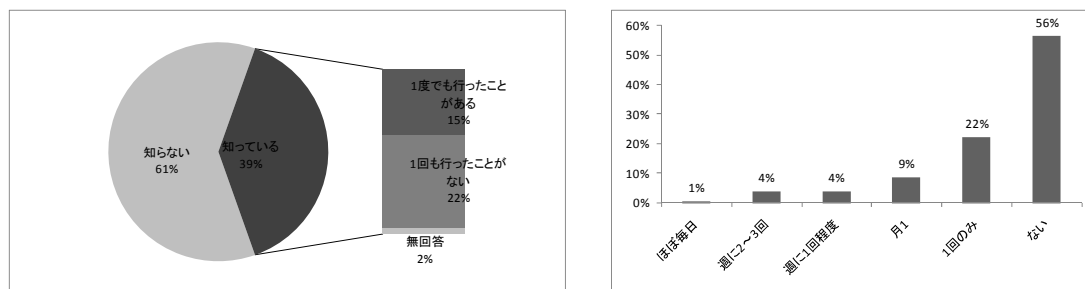


図1-34 ハッピースクウェアの利用経験と頻度 (M 中学校)

利用したことがあった M 中学校の生徒がハッピースクウェアに満足している点を回答してもらったところ、回答率が高かった項目としては「くつろぐ」「マスターの人柄」「長時間居られる」「気軽に立ち寄れる」「飲食ができる」「さわげる」であった。「くつろぐ」「長時間居られる」「気軽に立ち寄れる」「飲食ができる」「さわげる」の項目は設立当初に狙った内容と合致している。

注目すべきなのは「マスターの人柄」という項目である。ここにマスターがいるように、「居場所」にいる大人の方が重要であるということが言えると考えられる。

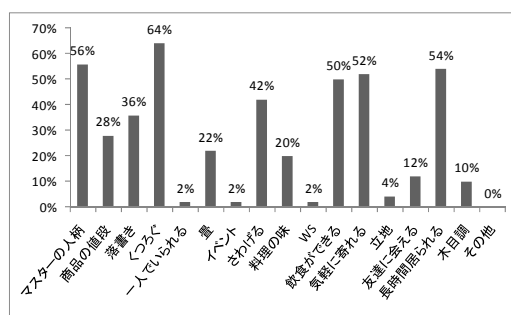


図1-35 利用者の満足点

最後にハッピースクウェアの不満足点を自由に書いてもらったところ、I 中学校からは立地が悪いという指摘を受けた。また、M 中学校からは「小学生が多く、入りづらい」という意見と「飲み物の値段が高い」という意見を受けた。中学生にとって値段の問題は大きい問題だと言えそうである。

今度はハッピースクウェアのことを「知らなかった」と答えた方に対して「ハッピースクウェア」に行ってみようかどうかについて聞いて見た。その際にハピスクの情報を載せた「はびすくの友 vol. 1」（参考資料参照）を見てもらった。

I 中学校ではおよそ半分の生徒が「行ってみたい」「どちらかという行ってみたい」と答えた。H 中学校ではおよそ7割近くの生徒が「行ってみたい」と答えている。M 中学校では3つの中学校の中で最も低い4割の生徒が「行ってみたい」と答えている。これはハッピースクウェアに興味がある生徒がすでに足を運んでいるからだと考えられる。

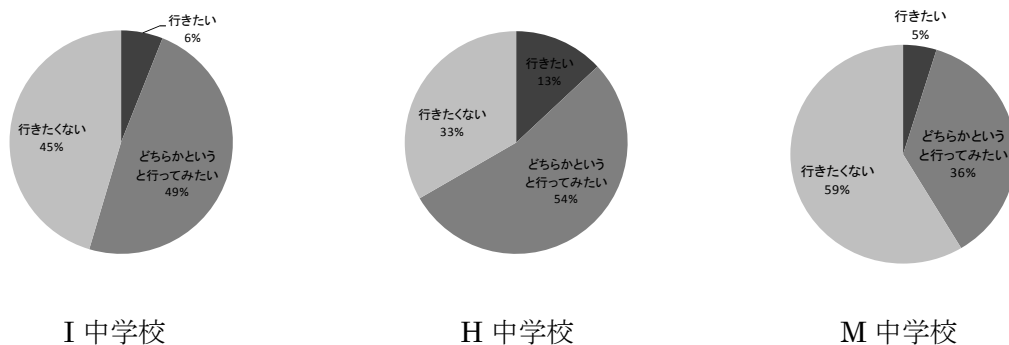
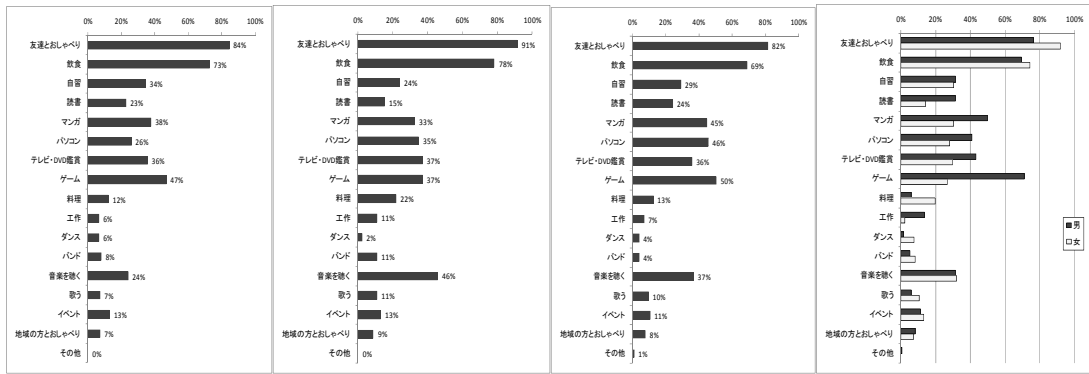


図 1 - 3 6 情報誌による影響

次にハッピースクウェアのような場所に友人 2～3 人で来たときを想定してもらい、どのようなことをしてみたいかを聞いた。

すべての中学校で圧倒的な回答率を誇ったのが「友達とおしゃべり」であった。続いて「飲食」という結果となった。また、各中学校で順位は異なるが高い回答率だったのは「自習」「マンガ」「パソコン」「テレビ・DVD鑑賞」「ゲーム」「音楽を聴く」であった。

男女別で見るとこのような居場所で「友達とおしゃべり」をしたいと考えているのは女子の方が多く、友達と一緒に「遊びたい」と考えているのは男子の方が多いことが分かった。



I 中学校

H 中学校

M 中学校

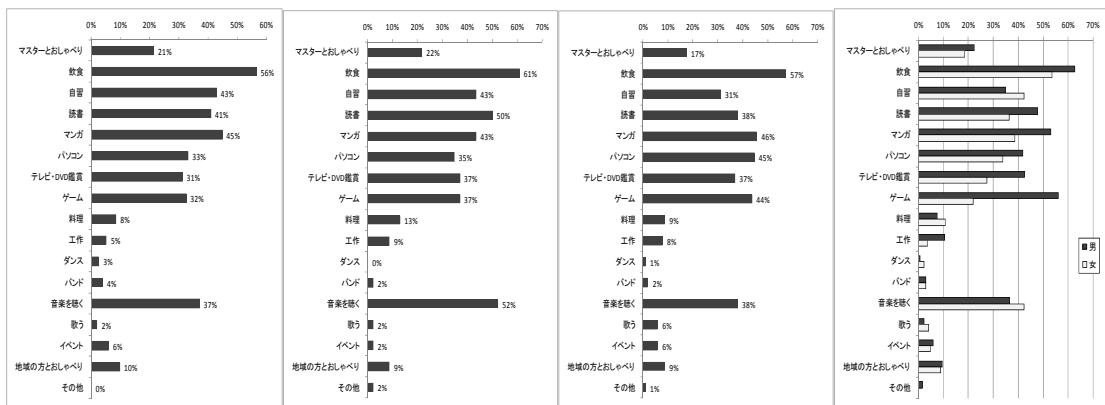
男女別

図1-37 ハッピースクウェアで友人と一緒にに行った時にしたい活動

さらに1人で来たときを想定してもらい、どのようなことをしてみたいかについて聞いた。

すべての中学校で最も高い項目は「飲食」であった。その他で回答率が高かったものは「マンガ」「パソコン」「テレビ・DVD鑑賞」「ゲーム」といった娯楽的要素と、「読書」「自習」「音楽を聴く」といった一人でできるものである。

さらに「マスターとおしゃべり」という項目が、すべての中学校でも2割前後の生徒が回答している。男女別で見ると多い項目はほとんど変わらないがどの項目を見ても男子側の回答が多いことが分かる。女子は1人ではあまり行きたがらないということが考えられる。アンケートの中にもそのように回答している生徒もいた。



I 中学校

H 中学校

M 中学校

男女別

図1-38 ハッピースクウェアに一人で行った時にしたい活動

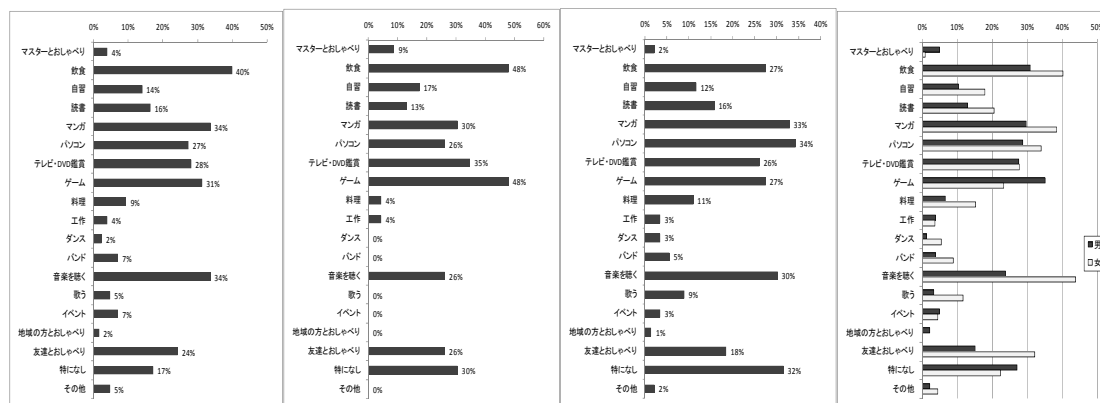
逆にハッピースクウェアに「行きたくない」と答えた方にハッピースクウェアに限定せずと同様の施設、つまり「居場所」にどのような活動があった方がいいかについて聞いた。

I 中学校では「飲食」が4割と最も高い回答を得ている。「マンガ」「音楽を聴く」「ゲーム」「テレビ・DVD鑑賞」「パソコン」「友達とおしゃべり」と2割以上の項目が続いている。

H 中学校では「飲食」と「ゲーム」が48%と最も高い回答を得ている。その他で高い回答率を得ている項目はI 中学校と変わらない。また、「特になし」という項目が3割と高い割合を示している。

M 中学校では他の2つの中学校とは異なり、最も高い回答を得ているのが「パソコン」であった。ほとんどの項目で他の2つの中学校と同様の傾向を示しているが「飲食」と「友達とおしゃべり」が若干低いと言える。また、「特になし」の項目が3番目に高くなっている。すべての中学校で「飲食」と「友達とおしゃべり」、そして「パソコン」や「ゲーム」といった娯楽要素が高い傾向を示している。さらに注目すべき点は「特になし」と答えた生徒が多かったことである。これは「居場所」を必要としていない、もしくは現状に満足しているということと考えられる。

男女で見ると、ほとんどの項目で女子の方が男子よりも多い回答を得ていることが分かる。つまり、女子の方がこのような「居場所」を求めていると考えられる。「特になし」を選んだ生徒が男子の方が多いためにもそのように言えそうである。



I 中学校

H 中学校

M 中学校

男女別

図1-39 「居場所」にあったらいいと思う活動

最後の「好きな場所」に関する項目である。

まず、居場所について「自分の居場所がない」と感じたことがあるのかに回答してもらった。I、H の2つの中学校のどちらとも約4割近くの生徒が「ない」と感じた経験があると答えた。



図1-40 「居場所がない」と感じた経験があるか

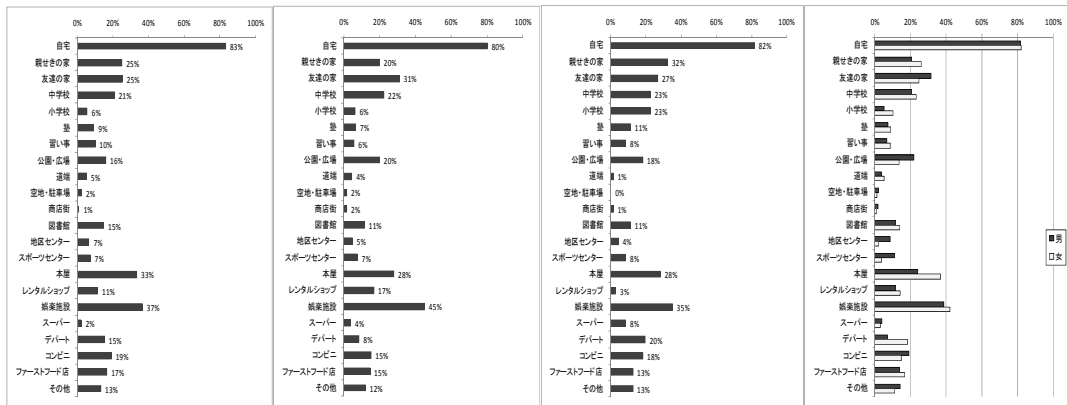
次に「好きな場所」について聞いた。すべての中学校で最も好きな場所を選んでいたのは「自宅」であった。2番目も「娯楽施設」と一緒であった。3番目以降は中学校ごとに異なるが選ばれている項目は「親せきの家」「友達の家」「通っている中学校」「本屋」「公園・空地」とほとんど変わらない。

男女別で見えていくと、「自宅」に対しては変わらないようである。2番目に高い「娯楽施設」に対しても若干女子が高いがほとんど変わらない結果となった。大きく異なったのは「友達の家」「公園・空地」「本屋」「デパート」の項目である。「友達の家」と「公園・空地」の項目は女子よりも男子の方が高い。「本屋」と「デパート」の項目では逆に男子よりも女子の方が高い。

最も好きな場所がどうして好きなのかを自由記述で答えてもらった。

自由記述だったため、回答の種類が多義にわたってしまったがある程度の方向性が見られた。特に多かったのは「落ち着く」「楽しい」「好きなことができる」というものであった。その他にも「くつろげる」「ゆったりできる」「安心・安全」「気楽」「友達がいる」「自由」といった項目も合計すると20人以上の生徒が理由に挙げている。

男子では好きな場所に「楽しい」ことを求めているようである。女子では男子とは異なり、「落ち着く」を重視していることが分かる。



I 中学校

H 中学校

M 中学校

男女別

図 1-4 1 好きな場所

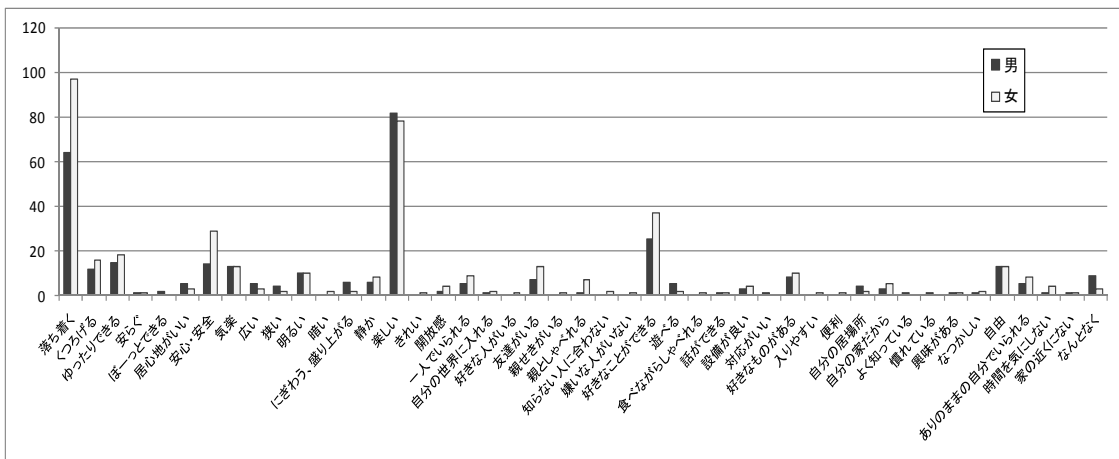


図 1-4 2 最も好きな場所の理由



最後にハッピースクウェアのような「中高生の居場所」に関心はあるかという質問に回答してもらった。

I 中学校では4割の生徒が「中高生の居場所」に関心があると答えた。H 中学校では6割以上の生徒に関心を示した。M 中学校では3つの中学校のうちでもっとも低い35%の生徒に関心を持っているという結果となった。ハッピースクウェアのような「居場所」が最も近くにあるM 中学校で関心度が低いという結果は予想外であり、興味深いものである。

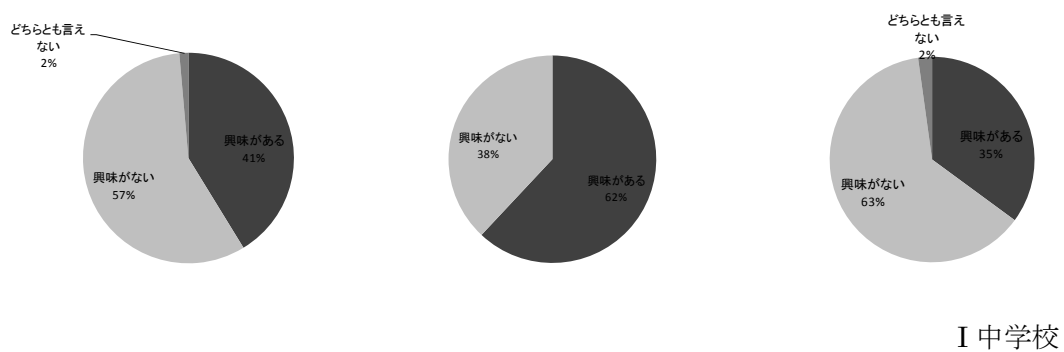


図1-43 居場所に関心があるか

### 1-3-2 その他の地域

「中高生の居場所」のいくつかの事例を紹介することで、このような施設が身近になり中高生はどのように考えるのかを調査したものである。主な質問項目は大人に関する項目と居場所に関する項目である。

#### (1) 東京都

東京都内の私立K中学校に協力していただいた。

回答者は2年生、3年生の男女計140人である。

表1-10 アンケート回答者属性

	男子	女子	合計
2年生	40	40	80
3年生	30	30	60
合計	70	70	140

まず、大人の項目についてである。

「家族以外であなたの話をちゃんと聞いてくれる大人がいるか」という質問に対しての回答では、2年生では66%、3年生では75%がいるということであった。しかし、逆に話を聞いてくれる大人がいないと回答した生徒がどちらも4分の1以上いた。

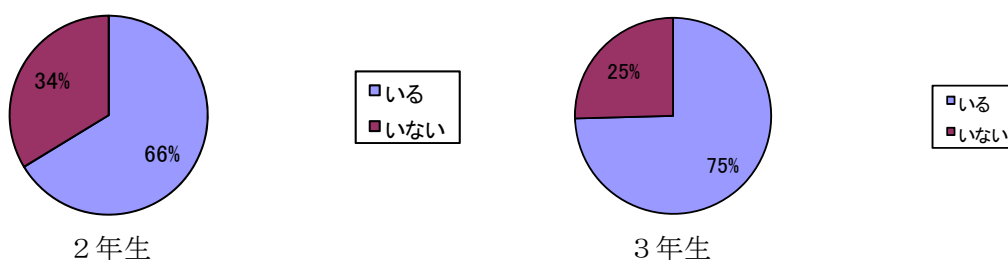


図1-44 家族以外で話を聞いてくれる人がいるか

次に、あなたにとって自分をほめてくれる、認めてくれる（見てくれている）大人とはどのような人かを聞いたところ、2年生では圧倒的に「話を聞いてくれる」と回答していた。次いで「気軽の話せる」「頼りになる」「安心できる」「尊敬できる」となっている。3年生では2年生ほど圧倒的支持を得た項目はないが、回答率が高かった項目は2年生と同じであった。しかし、3年生で最も多かったのが「気軽の話せる」であった。

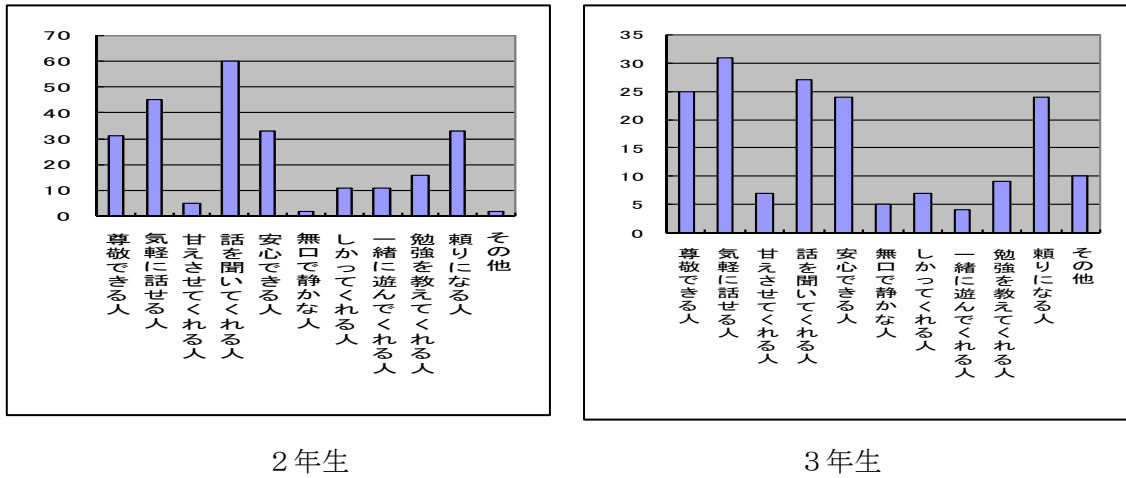


図1-45 あなたにとって信頼のおける人とはどのような人か

次に居場所に関する項目である。

まず、事例のような「居場所」が身近にあったらどうするかという質問に対して、2、3年生どちらも「友達に誘われれば行く」という回答が最も多く、4割以上を占めていた。しかし、「居場所の企画・運営に関わりたい」という回答した生徒は1人もいなかった。「居場所」の様な空間には少なからず興味を持っている生徒は多いが、積極的に関わろうという意識は感じられなかった。また、「あっても行かない」という回答した生徒も2年生で2割、3年生でも1割以上いた。

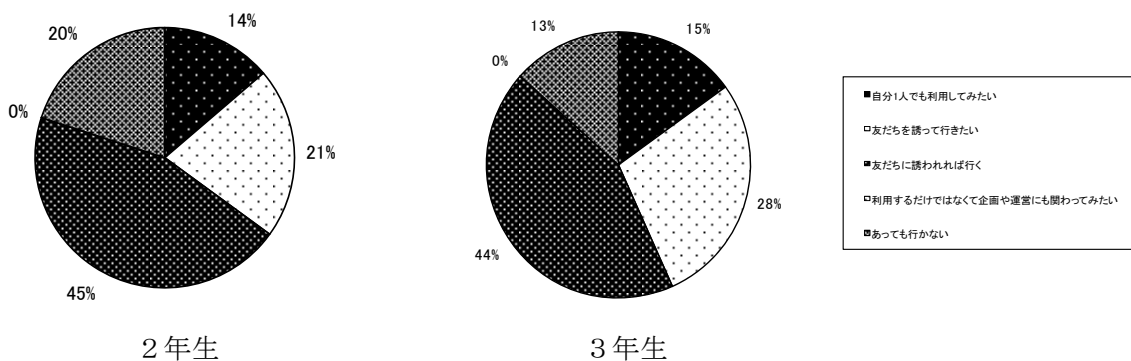


図1-46 身近に「居場所」があったらどうするか

続いての質問は、どのような形にしろ「利用してみたい」と回答した生徒に聞いた。

「もし、友人2～3人で一緒に事例の様な場所に来たときに、どのようなことがしたいか」と聞いたところ、2年生、3年生ともに「友だちと話す」と最も多く、2番目に多かったのが「ゲーム」であった。3番目以降は順位は異なるが、回答率が高かった項目は「飲食」「自習・宿題」「漫画を読む」「テレビ・DVD鑑賞」「音楽を聴く」「歌を歌う(カラオケ)」とほとんど変わらなかった。しかし、3年生は2年生に比べ、「自習・宿題」の回答率が高くなっていて、これから高校に入ること考えるとこのように学習のできる空間を求め始めているからなのかもしれない。

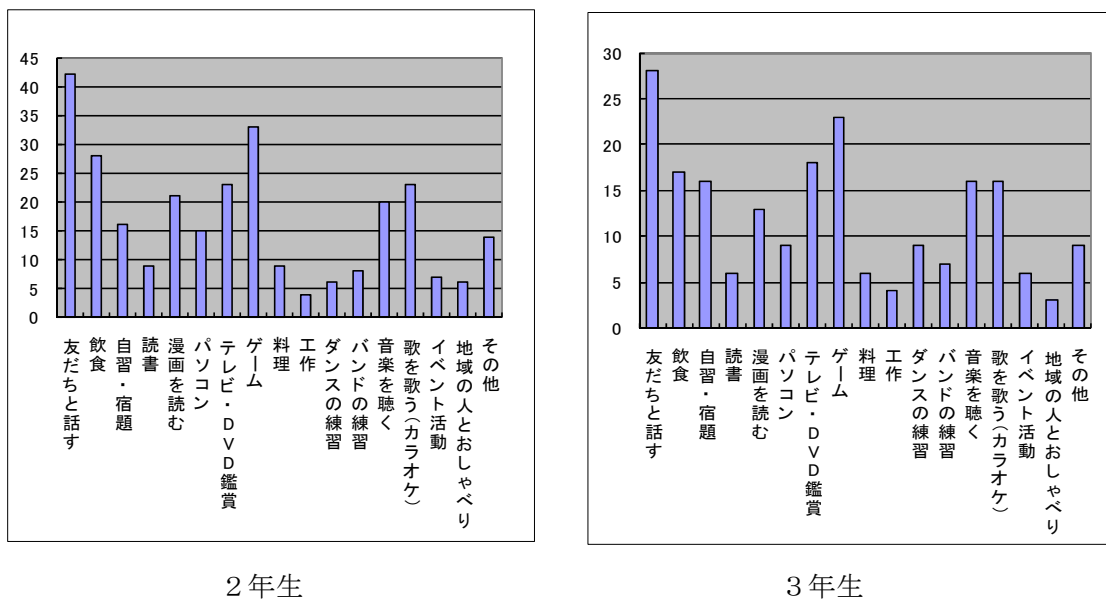


図1-47 「居場所」で友人と一緒に行った時にしたい活動

続いて、「利用したい」と回答した生徒のみに聞いたものである。今度は1人で事例の様な場所に行った時にしてみたいことを聞いた。2年生で最も多かったのは「自習・宿題」という項目で、「読書」「音楽を聴く」「漫画を読む」と続く。他にも「飲食」「パソコン」「テレビ・DVD鑑賞」「ゲーム」が高い回答率であった。3年生でもある程度似たような傾向を持っているが、2年生との大きな違いは「自習・宿題」の回答率が群を向いており、その他の項目はやや下がる。このことから、3年生は学習のできる空間を求めていることが分かる。

また、2年生、3年生ともに場所にいるスタッフなどと話したいと考える生徒は少ないようである。1人で言った時には1人でできることで、かつ自分が楽しめることをし

たいと考えており、見知らぬ人との交流や周りの人を巻き込んでいくようなことはしたいとは考えていない結果となった。

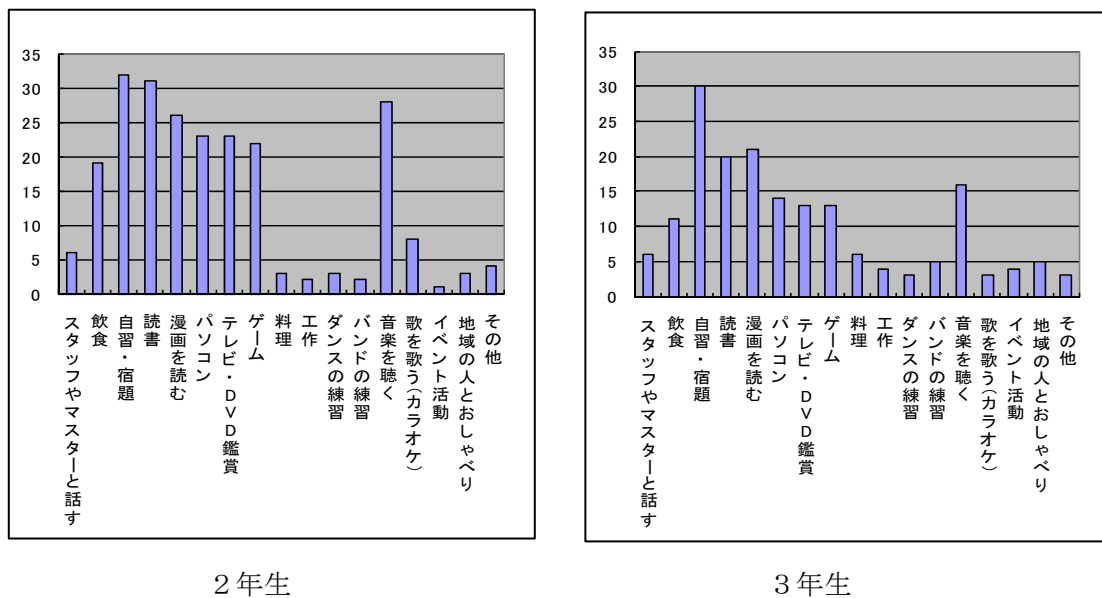


図1-48 「居場所」に一人で行った時にしたい活動

さらに、この質問も「利用したい」と回答した生徒のみに聞いている。「事例の様な場所はどのような場所にあると良いか」という質問に対して回答率が高かったのは「自分の家の近く」「学校の近く」「通学路の近く」「駅の近く」であった。2年生では「自分の家の近く」が最も回答率が高く、「通学路の近く」「駅の近く」「自分の家の近く」と続く。それに対して3年生は「自分の家の近く」が最も高く、「学校の近く」「駅の近く」「通学路の近く」と続いた。また、3年生は回答がばらついていたが、2年生ではある程度、いくつか回答が絞られていた。

この結果から、2年生にとって事例の様な場所は学校に行かない日でも利用したいのではないだろうか。そのため、学校よりも自宅近くにあることを望んでいると考えられる。それに対して、3年生は前問、前々問で見てきたとおり、学習する場所を求めており、事例の様な場所でもそれを望んでいると考えられる。

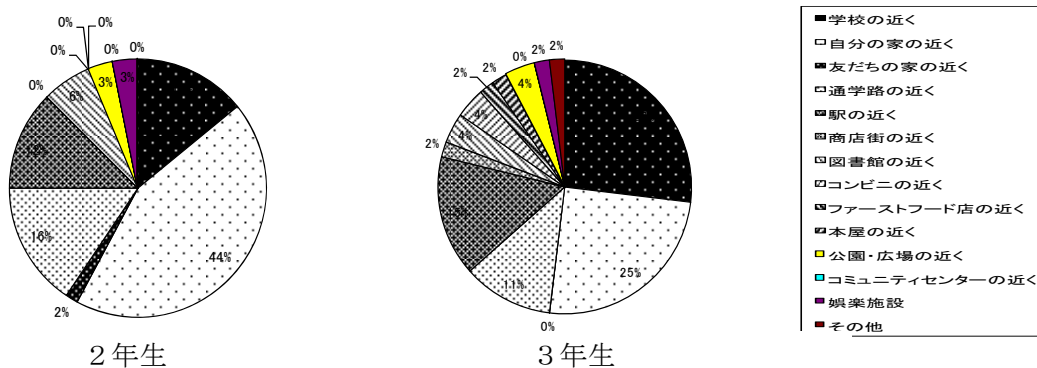
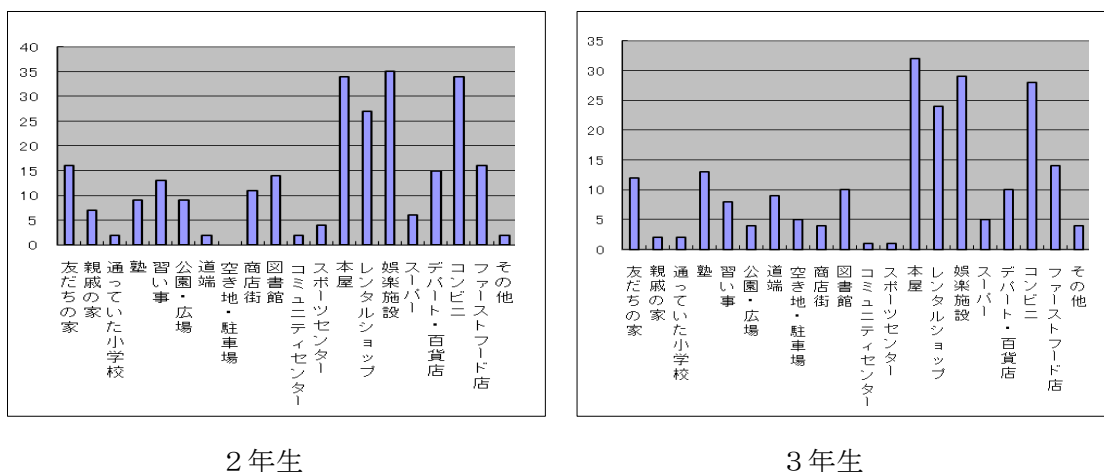


図1-49 「居場所」はどこにあったら良いか

次は、普段よく行く場所を4つ答えてもらった。その結果、回答率が高かった項目は「本屋」「レンタルショップ」「娯楽施設」「コンビニ」である。2年生、3年生関わらず、この4項目を回答した生徒は20人を超えている。興味深いのは2年生では「道端」「空地・駐車場」と回答した生徒はほとんどいなかったのに対して、3年生では意外と多く、「道端」に関しては2年生で比較的多く回答されている「習い事」よりもよく行く生徒が多い結果となった。

普段よく行く場所は学年によらず「本屋」「レンタルショップ」「娯楽施設」「コンビニ」と商業施設がトップを占めているが、2年生と3年生で一部の回答率に違いが出ていた。これは、サンプル調査の誤差かもしれないが、学年によって趣向に違いが出たのではないかと考えられる。



2年生

3年生

図1-50 普段よく行く場所

最後に回答者全員に対して「居心地の良い場所や空間がない」と感じたことがあるかを質問したところ、2年生では28%の生徒が、3年生では36%の生徒が「ない」と感じた経験があると答えた。

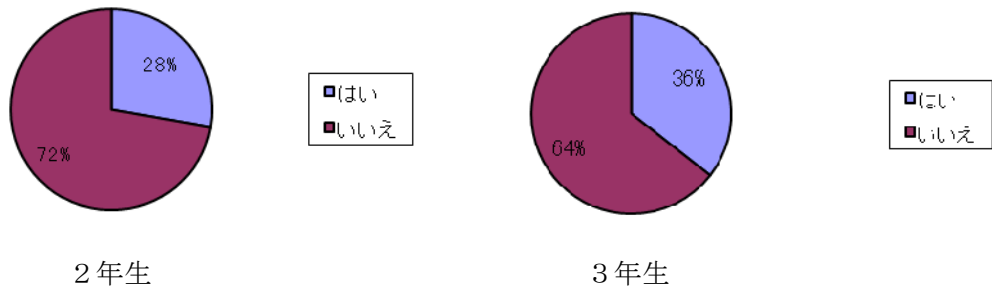


図1-51 「居場所がない」と感じた経験があるか

(2) 埼玉県

埼玉県内にある市立の中学校に協力していただいた。

回答者は市立〇中学校3年生、計60人である。

表1-11 アンケート回答者属性

	男子	女子	合計
3年生	24	36	60

まず、大人に関する項目について聞いた。

「家族以外で話をちゃんと聞いてくれる大人はいるか」という質問に対して、59%の生徒がいると答えた。これは、横浜市、東京都に比べると若干少ない結果となっている。

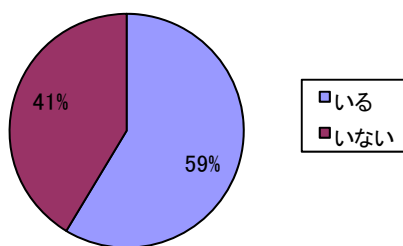


図1-52 家族以外で話をちゃんと聞いてくれる大人はいるのか

次は、自分をほめてくれる、認めてくれる（見てくれている）大人とはどのような人が問う質問に対して、〇中学校では最も多かった回答が「気軽に話せる」であった。その後「話を聞いてくれる」「頼りになる」「安心できる」「尊敬できる」と続いている。

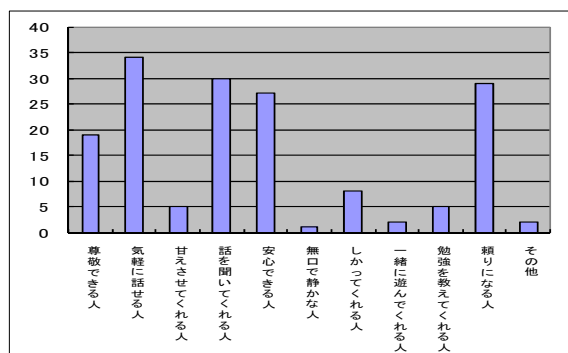


図1-53 信頼のおける大人の属性



次は、居場所に関する項目について聞いた。

「居場所」と呼ばれる施設をいくつか紹介して、事例の様な場所が身近にあった場合にどうするか、という質問に対して「友達を誘っていきたい」と答えた生徒が最も多く、37%いた。続いて多かったのが「友達に誘われたら行く」と「あっても行かない」でそれぞれ約4分の1の生徒が回答している。「利用するだけではなく、自ら企画や運営に関わりたい」と回答した生徒が少しではあるがいた。

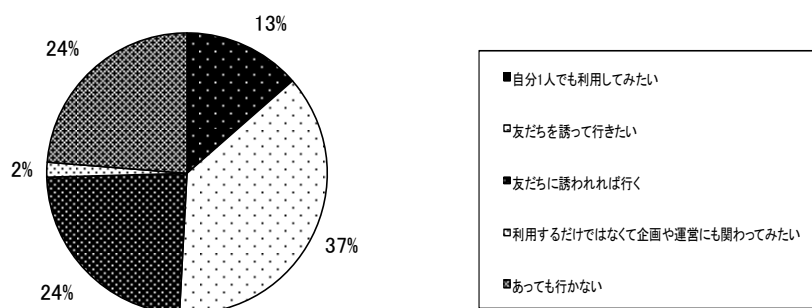


図1-54 身近に「居場所」があったらどうするか

のような形でも「利用したい」と回答した生徒に対して、解答してもらった質問である。まず、友人2～3人で事例の様な場所に行ったと想定してもらい、どのようなことをしてみたいかを聞いた。最も多かった回答は「友達と話す」であり、9割弱の生徒が回答している。そのほかに回答率が高かったのは「歌を歌う（カラオケ）」「飲食」「テレビ・DVD鑑賞」「ゲーム」「料理」「音楽を聴く」である。

横浜市、東京都と似たような回答結果が出た。しかし、他の地域に比べると「パソコン」「漫画を読む」という項目が低く、「料理」が高い結果となった。

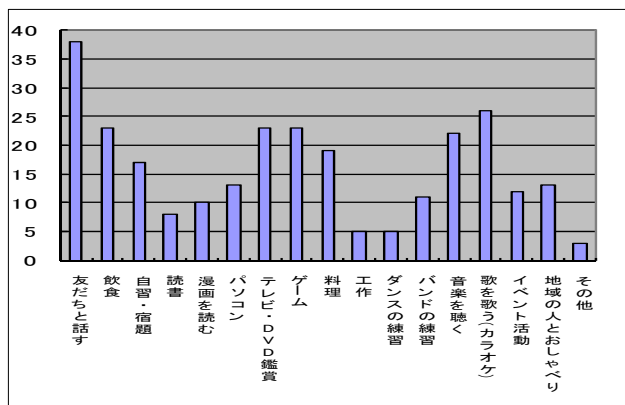


図1-55 「居場所」で友人と一緒にいった時にしたい活動

次に1人で行ったと想定してもらい、その場合は何をしたいかを聞いた。その結果、最も多かった回答は「自習・宿題」であり、次いで「音楽を聴く」であった。その他に高かった項目は「漫画を読む」「パソコン」「テレビ・DVD鑑賞」と1人ででき、楽しむことのできる項目であった。「自習・宿題」が高かったのは3年生にアンケートした結果だと考えられる。

ここで最も注目すべきことは「地域の人とおしゃべり」という項目が比較的多く、10人以上が回答していることである。他の、横浜市、東京都の事例ではいるにはいるが少数意見であったが、O中学校においては少数意見ではなく、「ゲーム」などよりも多い項目であったことは、興味深い。

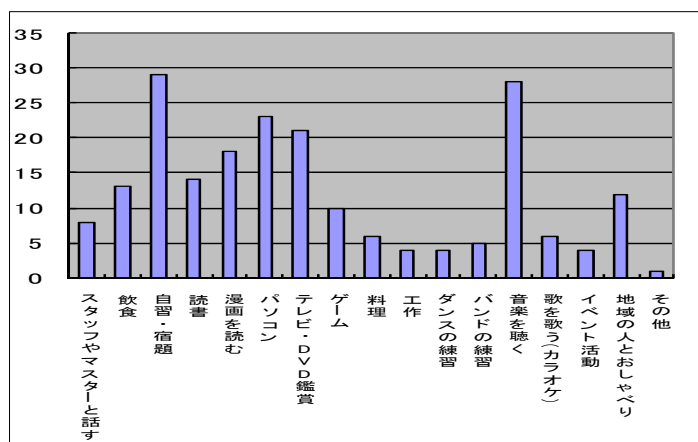


図1-56 「居場所」に一人で行った時にしたい活動

また、事例の様な場所が身近にあった場合、どのような場所にあった方が良いかという質問に対して、O中学校では「自分の家の近く」が22%と最も多かった。その他は比較的幅広く分かれており、2番目に多かったのが「通学路の近く」で、「学校の近く」「駅の近く」「コンビニの近く」「娯楽施設の近く」が3番目に多い。

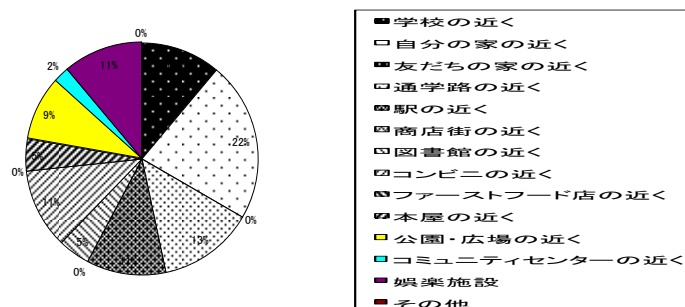


図1-57 「居場所」はどこにあったら良いか

次は、普段よく行く場所は4つ答えてもらった。

その結果、最も多かったのは「コンビニ」であり、5割以上の生徒が回答している。また、同様に「塾」も5割以上回答している。その他、回答率が高かった項目は「本屋」「レンタルショップ」「娯楽施設」「デパート・百貨店」である。それらに対して、全く回答されなかった項目が「親せきの家」「通っていた小学校」「空き地・駐車場」「コミュニティセンター」と4つもあった。

「塾」がこれだけ回答率を上げているのは、解答者が中学3年生であったことが大きな要因であると考えられる。また「コンビニ」も他の地域に比べると高くなっているが、便利であることもそうであるが、おそらく受験生であるため「塾」に行く際に買い物をしていくからではないかと考えられる。その他の高い項目は他の地域とさほど変わらない結果であるので、中学1年生や2年生ではこのような結果とはならないのではないだろうか。

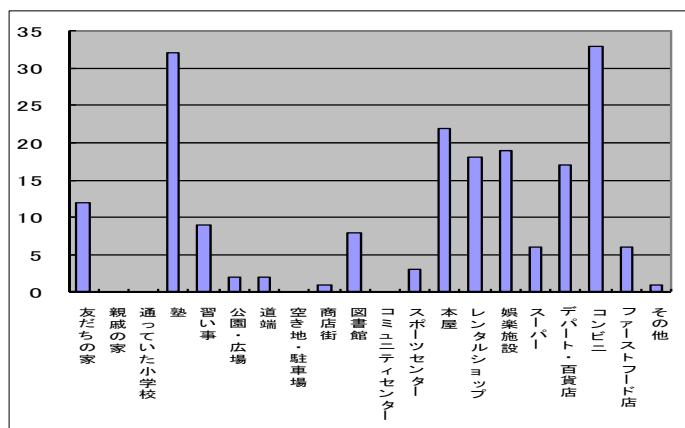


図1-58 普段よく行く場所

最後に「居心地の良い場所や空間がない」と感じたことがあるかという質問に対して、〇中学校の生徒は4割の生徒が今までにそのように感じたことがあると回答している。

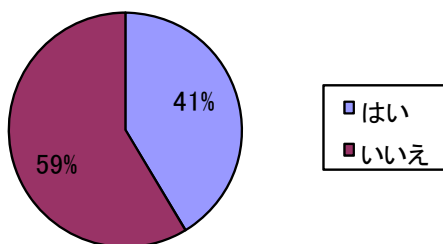


図1-59 「居場所がない」と感じた経験があるか

### 1-3-3 まとめ

#### (1) 時間的考察

横浜市内にある3つの中学校において、2008年、2009年と協力していただき、アンケート調査を実施した。1年しか変わらないため、アンケート結果に大きな違いはなかった。結果に違いが出たのは、「中高生の居場所に関心があるのか」という項目で、2008年の調査では約3割が関心を示していたが、2009年では約4割と関心度が高くなっていた。その理由としては、2008～2009年に行ったイベントやワークショップによって「ハッピースクウェア」の認知度が高まり、このような施設に関心を持つようになったのではないかと考えられる。

#### (2) 地域的考察

2009年の調査では横浜市内の中学校だけではなく、他に東京都、埼玉県の中学校にもアンケートに協力をしてもらった。その結果、「居場所」があれば行きたいと回答しているのは東京が最も高く、横浜が最も低かった。しかし、東京では「行きたい」と回答していても利用者以上に関わろうとする生徒はいなかった。埼玉では「関りたい」と回答している生徒も少数ではあるがいた。

以上から、地域によって「居場所」の捉え方が変わった結果となったように見えるが、実際には東京の中学校が私立で、埼玉の中学校が公立であることも要因の一つと考えられる。なぜなら、私立の中学校では多くの生徒が遠距離通学のために、地元で「居場所」と呼べる空間がなく、そのような施設を求めているが、公立の中学校は近隣通学で地元であることが多いのですでに自分だけの「居場所」を見つけており、そのような施設を求めていないと考えられるからである。

施設への活動への参加についても似たようなことが言える。それは、地域に密着しているためにそのような活動へ参加しやすいと考えられる。しかし、私立中学の様に自分の地元だとしても、地元感がなく、あまり積極的に参加しにくいからではないだろうか。

#### (3) まとめ

今回の調査によって、「居場所」に対する認識は1年でもある程度は変化するが、大きな変化は起きるものではなく、今後も長い目で見て行かなければならない。

地域差の調査においては、都市と地方で「居場所」へのニーズが変わるのではないだろうかということが分かったが、今回の調査では必ずしも都市と地方という構図ではなく、私立と公立という構図であった可能性がある。

今後、このようないくつかのパラメータが出てくると思われるので、それを整理することで調査する上で十分注意を払っていく必要があると考えられる。

## 第2章 地域活動における中学生の役割 —和田町スタディー—



## 第2章 地域活動における中学生の役割 —和田町スタディー—

### 2-1 子どもの成長にともなう地域との親和性の視点

#### 2-1-1 小学校低学年から高学年にかけての地域の評価構造の変化

地域参画方法について具体的に検討するために、まず子どもたちにとって地域がどのように見えているか、つまり子ども視点からの地域の評価構造（およびその変化）の把握が必要であろう。

児童期の子どもにとっての生活環境としては住まいと学校、遊び場などが挙げられる。子どもの生活は学区域を中心に展開するため、その子ども自身が住む地域環境の影響を強く受けることが一般に知られている。子どもにとって、地域は生活の場であると同時に成長の場でもあり、子どもの人格形成において、大変重要なステージと言える。

地域のあり方を考える上で、子どもの地域に対する意識や視点を理解しておくことが重要である。今の子どもを取り巻く地域環境の実情を、「子どもの視点」からありのままに抽出することによってより実態に即した環境整備につながるものと考えられる。そのためにはまず、子どもが地域の空間や環境をどう評価しているのかを把握することが必要となる。

さらに、子どもが成長するに従い、子どもを取り巻く地域環境が広がり、この評価構造自体が変化・成熟していくという視点が重要である。つまり、地域との親和的關係構築のために学齢に応じたどのような工夫が必要なのかについて検討を行う必要があると言える。

そこでまず、横浜市保土ヶ谷区をフィールドとして、研究メンバーにより過去に実施された子どもの地域に対する評価のメカニズム研究をこの視点から再整理し、地域との親和的關係構築のための知見を得る。

調査対象地域は横浜市保土ヶ谷区和田町エリアであり、都市部近郊でありながらも、自然が残る丘陵地区で、相鉄線和田町駅と隣接する商店街をまちの拠点に持つ、典型的な既成市街地である。南部に帷子川と線路、中央部に国道16号がはしる。

表2-1 参加者属性

	2年	3年	4年	5年	6年	計
男子	2	2	5	0	0	9
女子	0	1	5	2	2	10
計	2	3	10	2	2	19

2005年11月に、当該地域に住む小学生（総数19名。表2-1参照。）と保護者ら（総数13名）を対象に「キャプション評価法」を用いたまちあるきワークショップが行われた。

調査においては、撮影の判断基準として「まちの見どころ、好き・嫌いなところ、気になるところ」を指示した。ただし、子どもが一人で写真撮影や記述をしながら歩くことは困難と考え、子どもを友達同士で少人数の9グループに、保護者らを2グループに分け、子どもの各グループに対しては1~2名の調査員が付き添った。また、まちあるきに関しては、事前に想定した「和田町の見どころ」5ポイントのうち2ポイントを通ることを指示し、それ以外は子どもの主体に任せてまちを歩いてもらった（図2-1）。

まちあるきで撮影された写真と自由記述をキャプションカードとして回収した（図2-2）。得られたカード数は大人55枚、子ども136枚である。

自由記述のデータは図2-3の評価モデルにより項目分けを行い、これらのカードをもとに記述データについてはモデルのカテゴリである「要素」「特徴」「印象」「判断」に分け、さらにその中に大分類17、小分類71のキーワードにKJ法的な分類を行った。

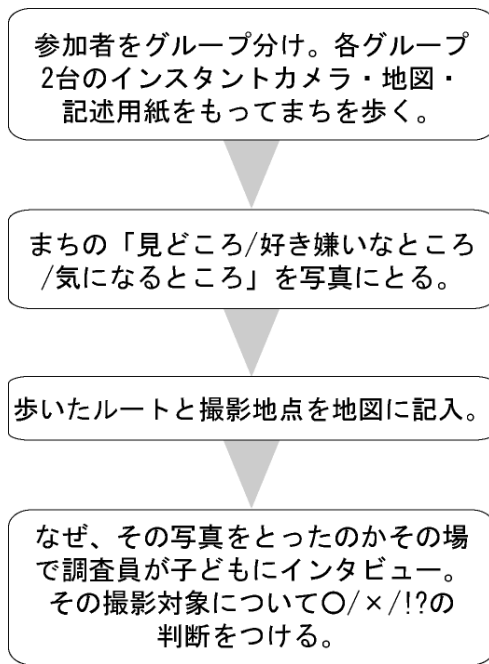


図2-1 キャプション評価法の流れ

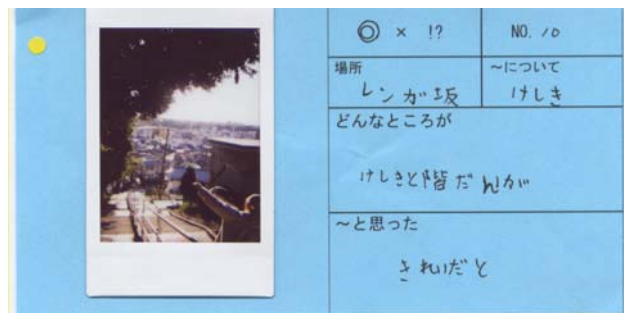


図2-2 キャプションカードの例

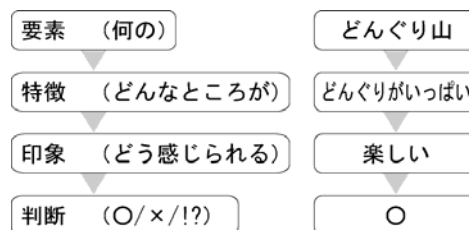


図2-3 評価フロー・カテゴリモデル



### (1) 大人と子ども比較—「要素」「特徴」からの分析

一つの要素から始まる「特徴」、「印象」、「判断」へとつながるパスを小分類のキーワードで結び、評価構造図を作成した。大人、子どもとも写真の撮影の割合が高かった「建築物・構造物」（大人 33.3%・子ども 23.1%）と、低かった「場所・空間」（大人 8.83%・子ども 13.9%）についての評価構造を図 2-4、2-5 に示す。

「建築物・構造物」について大人は、「変化」「品質」やなどソフト的な面に着目し「利便性」へとつながるフローが多く見受けられ、また撮影対象はもっぱら「公共施設」と「店舗」である。一方、子どもは主に「形態」「サイズ」「装飾」などその場で視覚に入るものに着目して評価している。そのためか、撮影対象の「建築物・構造物」の種類は多岐にわたる。

「場所・空間」の撮影枚数は大人・子どもとも、それほど多いわけではなかったが、大人の着目点はその要素ごとにある程度固定されているのに対し、子どもは様々な角度から着目していることが分かる。また、大人には見られなかった「場所・空間」として「閉じた外部空間」が挙げられる。これは、壁や塀などで囲まれている狭い場所、神社の床下、茂みの中などの狭い場所を「秘密基地っぽい」「秘密なところ」「部屋っぽい場所」などと評価しており、子どもの独特の視点である。

### (2) 大人と子ども比較—キーワードの集計による評価の傾向（図 2-7）

判断の特徴としては、子どもは全体に「!？」と評価したものが大人と比べて圧倒的に多い。「!？」と評価したものの「印象」をみると、「不思議」「なんで」「びっくり」などの疑問や驚きの気持ちが含まれる印象は 20.8%程度で、41.7%は「きれい」「すごい」「おもしろい」などで表現される肯定的な印象であった。一方大人は「これはなんだ」「こんなところに」など疑問や驚きを表す印象の記述とともに「!？」という判断をしている。

要素・特徴とも大人と比較して幅広い項目にわたっているが、印象の記述は特定の語彙に集約されることから子どもは判断が未熟であるものの全体として感受性豊かに幅広く対象を見ていることが分かる。

子どもに特徴的な記述として特定のキーワードが出現するということが挙げられる。主なものとしては、特徴の記述では「～みたい（に見える）、～に似ている」「いつも～している/してた、よく～している/してた」など、自分自身の体験、経験に基づく主体的な記述と「でっかい、大きい」「～がいっぱいある」など量や大きさなど目に見えて分かりやすいものに対する記述が多く、全体の 40.1%を占めた。印象では記述の 89.5%が「不思議」「面白い」「かっこいい」「すごい」「キレイ、かわいい」である。

### (3) 子どもの評価構造の特徴分析—低学年と高学年の評価の違い（図 2-8）

高学年になるとともに要素の対象の範囲、着目の範囲が広がる。特徴では「～みたい（に見える）、～に似ている」「いつも～している/していた、よく～している/していた」で表される「見え方」「頻度」の項目、印象では「懐かしい」で表される「回顧・思い出」の項目など主体的な記述の出現度が下がる。判断も「!？」とするものが少なくなり、これは自分自身の印象を表現する能力とともに、判断能力の発達によるものと考えられる。評価の語彙も「不思議」「面白い」「かっこいい」「すごい」「キレイ、かわいい」のみだけでなく、「～して欲しい」などの要望や「気になる」「何で～」などの疑問の記述も見られるようになる。子ども視点から地域への働きかけが始まる時期だとも言える。

ところで、図2-7の大人と比較してみると、大人は要素、特徴ともに偏りが見られるのに対し、高学年の子どもは、印象についての表現は偏りがあるにせよ、全体的に要素・特徴ともまんべんなく多様な見方をしていることが分かる。認知・判断能力が発達途上にある低学年期の子どもや、感受性豊かに地域を多様な視点で捉えている高学年期の子ども視点に立った地域環境整備の重要性を示唆しているといえるだろう。

#### (4) 子どもの評価構造の特徴分析—男子と女子の評価構造の違い（図2-6）

もっとも大きな違いは判断において、男子のほうが×や!？とする割合が女子に比べ少なく、気になる場所や対象がはっきり決まっているようである。その対象は特に特徴では「頻度」と「過去の習慣」、印象では「回顧・思い出」の項目が女子に比べて大きな割合を占め、男子の見方は自分の普段愛着などがあるものに偏っている。女子は幅広く色々なものを見ているが、要素は「モノ」、特徴はサイズ、色、形態などで、身の回りの細々したものの形状に興味がある様子が分かる。

#### (5) 子どもの評価構造の特徴分析—グループごとの撮影対象の変化

図2-9は、撮影の順序を横軸に、撮影対象である要素を縦軸にとり、グループごとに撮影者をプロットしたものである。どのグループも撮影対象の種類が限定されている。例えばB2グループは「場所・空間」と「建築物・構造物」に属する写真しかとっていない。子どもは自分が気になる場所の分類にかたよって写真を撮影する傾向がある。例えば樹木や動物など自然に関する要素を中心に撮影する子ども、建築物・構造物とモノに関する写真を中心に撮影する子どもなど。○×の判断による集計結果と合わせると、子ども全体としては多様な視点で地域を見ているものの、個人としては自分のこだわりのあるものを中心に地域を見ているといえる。

しかしグループ全体の撮影の流れから見てみると、子どもはこだわりのあるものを中心に写真を撮影しているものの、同グループのメンバーの撮影した写真に影響されている面も見られる。例えば、今まで建築・構造物の写真を中心に撮影していた子どもが、グループメンバがモノを撮影しだすとその子どももモノを撮影するようになるという具合である。

子どもの地域や環境に対する評価は、子ども自身が属するグループの中での流れや雰囲気によって決定される面もあることが分かる。

まちあるきのルートと撮影地点を大人と子どもで比較する（図2-10）。子どもが歩いたルート、撮影場所は大人と比べ狭い範囲となった。どのグループも共通して商店街から和田稲荷へと続く道をとっており、この道がまちの背骨であることがわかる。また、寺・神社での撮影枚数が多く、まちのポイントになっていると考えられる（図2-11）。



図2-4 大人の評価構造図

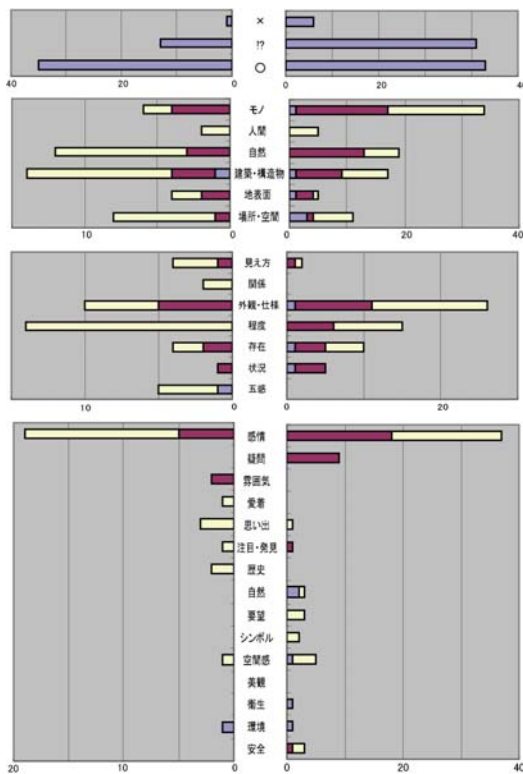


図2-6 男子(左)と女子(右)の集計

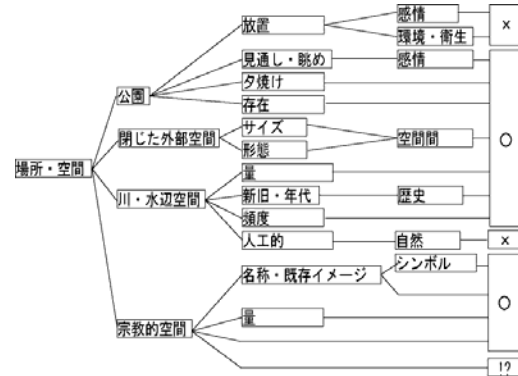


図2-5 こどもの評価構造図

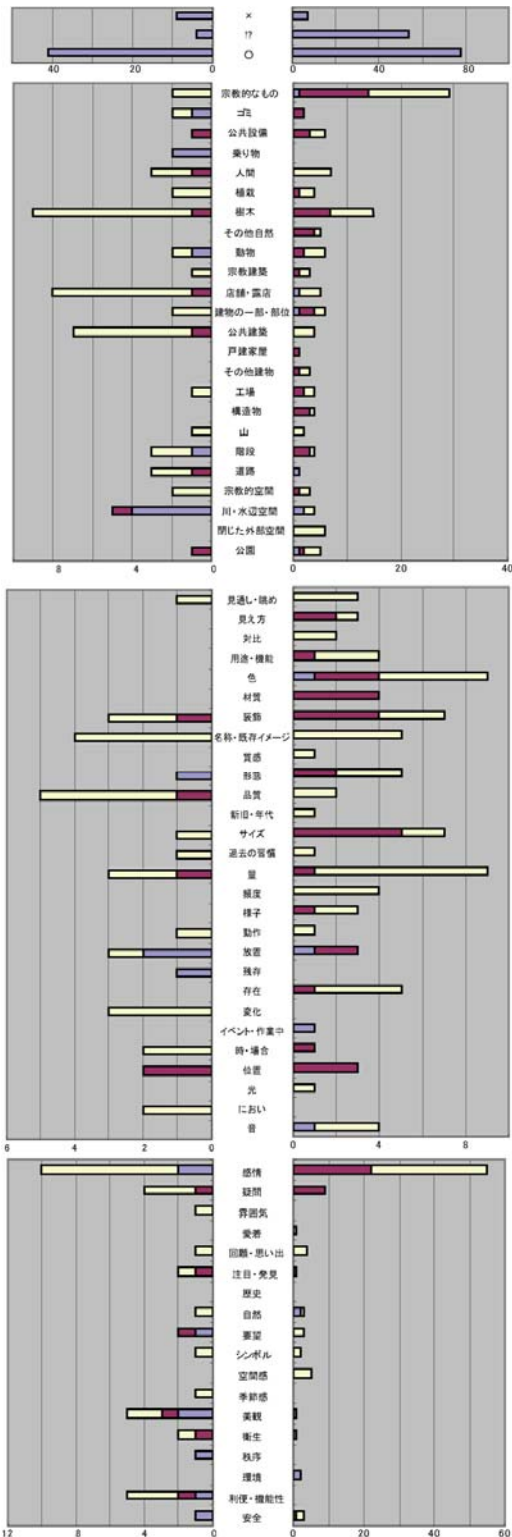


図2-7 大人(左)と子ども(右)の集計

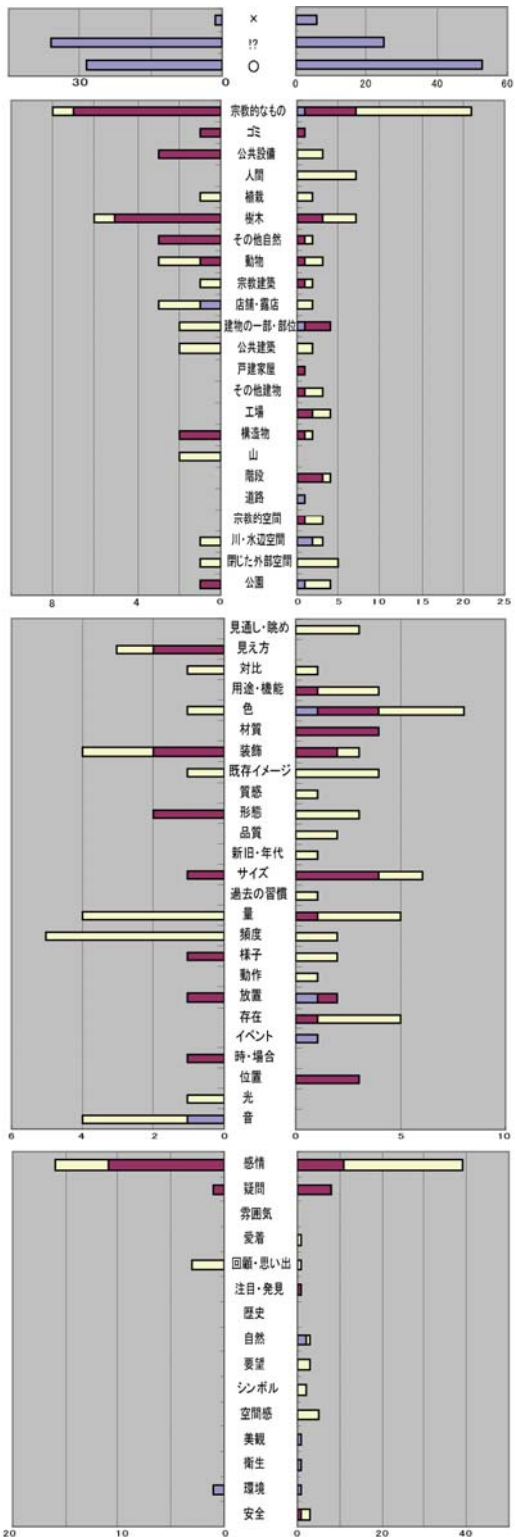


図2-8 低学年(左)と高学年(右)の集計

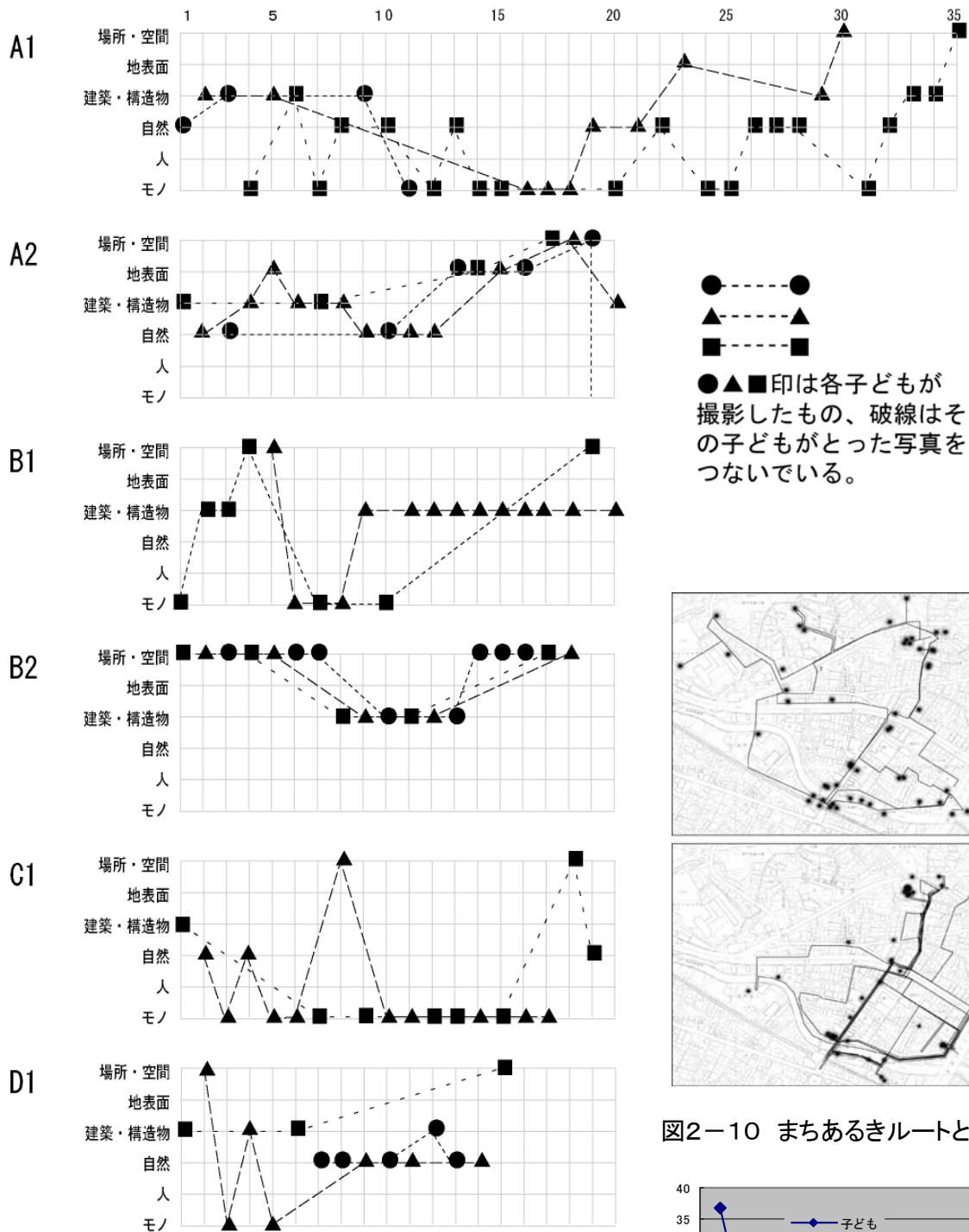


図2-9 グループごとの撮影の流れ

図2-10 まちあるきルートと撮影場所

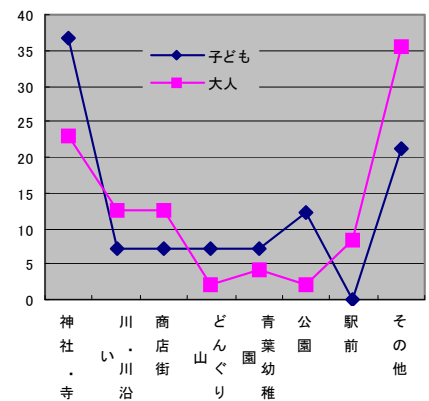


図2-11 撮影場所の集計

## (6) まとめ

調査結果から子ども視点による地域の評価構造の特徴が明らかとなった。

まず、子どもは判断が未熟であるものの全体的には様々な角度から幅広く対象を見ており、低学年ほど特定のキーワードが頻出し、主体的なものの見方、目につきやすいものに対して対象が集中する傾向が指摘できた。成長に従い地域に対する要望や疑問が発生し、地域に対する働きかけや投げかけを表すような表現も見られ、より感受性豊かに地域を多様な視点で捉えている傾向が見られた。

また、子どもの地域や環境に対する評価は、子ども自身が属するグループの中での流れや雰囲気によって決定される面もあることが指摘できた。

以上のように、子ども視点に立った地域に対する評価構造の特徴や大人と子どもの評価構造の違いなどが明らかになった。

中学生への成長の観点からすると、小学校低学年から高学年にかけて見られた変化、つまり目につきやすいものへの着目から、より主体的に感受性豊かにとらえる傾向の高まりが考えられる。一方で、学校区の広がりや生活行動範囲の広がりから、地域そのものの捉え方が変化する可能性が考えられる。

### (参考文献)

岸卓矢・江部愛美・藤岡泰寛・三輪律江・大原一興・岡西靖・中森裕史・伊藤篤史、子ども視点からみた地域の評価構造に関する研究 キャプション評価法を用いた参加型調査からの考察、日本建築学会大会学術講演梗概集、E-2 分冊、pp. 405-406、2006 年

江部愛美、子ども視点からみた地域の評価構造に関する研究—キャプション評価法を用いた参加型調査からの考察—、横浜国立大学修士論文、2006 年 3 月

## 2-1-2 地域活動への中学生参加の工夫

先の調査結果から、小学低学年から高学年に学齢が上がるにつれて、地域をより多様な視点でとらえ、自身の内面の感受性に訴えかけながら地域を把握しようとする傾向が指摘できた。大人は要素、特徴ともに偏りが見られ、これは社会通念上の価値観に左右される（樹木→良い、公共施設→便利、などの固定化された価値観）傾向が強いことを表していると思われ、こどもと大人との間の地域の評価構造の違いが指摘できた。

中学生は、小学高学年から一歩大人に近づいた学齢であり、小学高学年に見られた感受性豊かに地域をとらえる特徴を有しながらも、一方で社会通念上の価値観にも理解を示し始める時期であることが想像される。また、学区の広域化による「地域」の枠組みの広域化の傾向も指摘できるだろう。

そのような、こどもと大人の中間的な存在でもある中学生が地域活動に参加するために、どのような工夫が有効であるか、具体的な取り組み例を通じて考察してみたい。

### (1) 和田べっぴんマーケットにおけるこども就労体験への中学生参加

和田町地域では駅前から国道16号にのびる約180メートルの商店街が立地している。戦後に個人商店が集積しはじめ、現在でも最寄り品を中心に扱う店舗の多い典型的な近隣型商店街である。

この商店街では、年に3回程度、道路を歩行者天国としフリーマーケットや商店街店舗の出店等による賑わい創出を図るイベント（べっぴんマーケット）が実施されている。毎回、近隣の小学校や中学校に「こども販売員」の募集を行い、べっぴんマーケット当日のお手伝いを兼ねた就労体験も受け入れている。

図2-12、2-13は第14回（平成20年3月8日実施）から第20回（平成21年12月12日実施）までの計7回の就労体験に参加した児童の居住地をプロットしたものである。

図2-12は小学4年～6年までの居住地を示しており、募集チラシを配布している和田町駅周辺の3小学校（T小学校、H小学校、B小学校）の学区内からの参加が見て取れる。地図上では同一にプロットされているため把握できないが、同じマンションやアパートの友だちと共に参加する傾向があることも指摘できる。

図2-13は中学生の居住地を示しており、上記の3小学校区外のエリアからの参加も見られる。全体数は少ないが、小学児童と比較して、同じマンションやアパートの友だちとの参加は1例もないことが特徴であり、その背景には仕事内容への主体的興味・関心の高まりが想像できる。

実際に小学児童は店主から与えられた仕事を（与えられたとおりに）一つ一つ丁寧に取り組む様子が多く見られた（写真2-1～2-4）が、中学生はそうした姿勢に加えて、

例えば売れ残った弁当を売り歩いたり、売上金を整理・管理したり、お餅販売だけでなくつき手として加わったり、自ら仕事を創り出そうとする姿勢も垣間見られた（写真2-5～2-6）。

その背景には、「売れ残ったら困るだろう」「小銭が整理されていないとおつりを渡すとき大変だろう」「つき手が足りないから手伝った方が良いだろう」といった、大人への理解が備わりつつあることが想像される。



図2-12 こども販売員・小学生(4年～6年)の居住地 ©googlemap



図2-13 こども販売員・中学生の居住地 ©googlemap





写真2-1 小学生(書店で本にビニールカバーをつけているようす)



写真2-2 小学生(薬局で棚陳列整理をしているようす)



写真2-3 小学生(コンビニエンスストアで商品整理をしているようす)



写真2-4 小学生(パン屋の店先で販売をしているようす)



写真2-5 中学生(もち販売所脇のもちつきを手伝っているようす)



写真2-6 中学生(弁当販売所で売り上げ金とおつりを整理しているようす)

## (2) まとめ

このように、地域における中学生参加の機会や場づくりの工夫として、和田町商店街で取り組まれているこども就労体験は事例として参考になる取り組みであると言える。

その要因として、まず、地域の顔としての商店街の存在が挙げられる。

過去に和田町駅周辺の3小学校児童を対象として筆者らが行った活動環境調査においても、商店街は学区を超えた活動を許容する場になりうる可能性を有していた。つまり、小学生から中学生まで多様な学齢のこどもたちの活動を許容し共有する具体的な場として商店街空間が有効に機能していることが考えられる。

また、就労というプログラム自体もこどもたちの多様性を受容するものと言える。和田町商店街では、これまでの受け入れ実績から、各店舗でこどもたちのスキルに応じた就労内容が工夫され蓄積されており、結果的に小学生から中学生までの多様なこどもの活動を受け入れることに成功している。受け入れ商店側の負担は大きいですが、就労希望者の申込受付、受け入れ店舗とのマッチング、労働時間管理のためのタイムカード作成、就労内容の選定と割り振り等々の作業が分担されシステム化されており、決して全てお店まかせとなっていない点も重要であろう。

ただし、現状では中学生の参加は実数としては少なく、今後の参加拡大が期待されるが、その際に、中学生ならではの関わり方として、中学生自身が仕事を創りあげていく余地や自由度をどの程度設定できるかが課題であろう。

この点では、店主だけでなく、地域住民や大学生などの外部サポーターの役割も大きい。商店街を舞台として、こうした人つながりのベースが整いつつある和田町において、今後の展開が期待される。

### (参考文献)

三輪律江、藤岡泰寛、田村明弘、活動相手別にみた平日および土曜日の子どもの活動空間に関する研究—横浜市保土ヶ谷区の既成市街地における子どもの活動環境調査より—、日本都市計画学会論文集、No. 38-3、pp. 127-132、平成 15 年 10 月

## 2-2 中学生の役割

小学高学年から中学生になるに従い、地域に対する興味・関心の深まり、大人への理解、主体的な参加、等々の変化が指摘できた。もちろん同じ中学生とは言え、人によって程度の差は見られるものの、こうした変化を受容できる地域でありたい。

和田町地域において継続実施されている「こどもまち探検」は平成15年から毎年夏に実施されているこども向けの地域学習ワークショップであり、学校ではなく地域が主体となることで、こどもと一緒に地域の人々が地域について考える場として定着している。

継続参加する児童もいることから、当初小学児童だった参加者は現在中学生となっている。地域への理解と関心の高まりを期待し、平成20年のまち探検ワークショップではこれらの中学生にスタッフとして参加してもらう試みを行った。

運営スタッフ側として参加することで、大学生や地域の大人達とどのような関わりをつくらることができるか、また、まち探検中に小学児童に対してどのような役割を果たすことができるか、ワークショップを通じて得られた知見を整理したい。

### (1) 第6回まち探検ワークショップ企画趣旨の確認

このまち探検企画は、学校の先生ではなく地域住民が主体的に参画することによって、オリジナルの探検プログラムづくりと実践をめざして続けられている取り組みである。

探検→発見→マップづくりを1セットとしてグループ毎に行い、地域の課題発見や愛着形成に寄与することがねらいであり、ワークショップの方法としても定着している。

プログラムづくりに際しては探検＝体験を通じて伝承されるべきものが何かポイントをおく必要があるため、毎回、地域の中で時間をかけた意見交換が行われ、ワークショップの成果もその場限りではなく、広く地域にお披露目する機会を設ける取り組みを続けている。

これまで取り組んだテーマと概要は以下の通りである。

#### 2003年 テーマ「歴史」

- ・地域の歴史資産、語り部による解説
- ・和田稲荷、杉山神社、和田地藏尊、和田町商店街、仏向・水道道などを探検

#### 2004年 テーマ「環境」

- ・分ければ資源という意識啓発、区役所の方による解説
- ・まち探検しながらゴミを集め、家庭ゴミ（もやすゴミ）、もえないゴミ、プラ、スプレ一缶、缶、ビン、ペットボトル、古紙、古布、小さな金属、乾電池などに分別

#### 2005年 テーマ「安全・安心」

- ・防災・防犯の意識啓発、地域の見守り、ネットワーク
- ・子ども110番の家、街頭消火器、井戸・湧水、公園（避難）などを探検

2006年 テーマ「福祉」

- ・地域のやさしさ発見、ダンボとの交流
- ・第1ダンボ、商店街（お店）、平和橋（坂）、和田橋（水やり）、和田町駅などを探検

2007年 テーマ「歴史」

- ・ポイントを多少変更、基本的には2003年のプログラムと同じ
- ・地蔵、商店街、レンガ坂、杉山神社、和田稲荷、相鉄（和田町駅）、帷子川などを探検

### (2) 第6回まち探検ワークショッププログラムの計画

地元意向を受け、第6回のテーマは「環境」とすることが決められた。具体的には自然環境（水や緑）をテーマとし、ポジティブにまちを評価する目を養うことや、まちなかで自然環境が豊かになるための工夫を考えることなどがポイントとされた。

### (3) ミーティング概要と中学生参加

表2-2に示す日程で企画検討を行った。このうち中学生は地元ミーティングに最大で3回出席してもらった上で、準備作業と当日運営に加わってもらった。

表2-2

日程	ミーティング内容	参加		
		大学	地元	中学生
8/4(月)	第1回学内mt	○		
8/13(水)	第2回地元mt	○	○	○
8月下旬	第2回学内mt(作業mt)	○		(○)
8/29(金)	ワークショップチラシ配布			
9/3(金)	班長会(地元)		○	
9月中旬	第3回地元mt(最終mt)	○	○	○
9/26(日)	部長会(地元)		○	
9/27晴 or 28曇	まち探検 2008 実施			
9/29(水)	役員会(地元)		○	
10/4雨 or 5曇	まち探検 2008(予備日)			

#### (4) ルールとプログラム・中学生の役割

実施日は2008年9月27日であり、こどもにもわかりやすいタイトルとして「わだまち自然探検隊出動！」というコピーが決められた。ワークショップ実施に際してのルールとプログラム・役割分担は以下の通りとされた。

##### ①ルール

###### 1. メインポイント4箇所を順に巡る

○ポイントマンの話を聞くなどプログラムを行い、探検マップにハンコをもらう

○各ポイントでは、チームに一つ指令書とキューブを受け取る

○各グループは決められたポイントで「水を汲む指令」を受け取る

###### 2. 指令を受けて汲んだ水は、町内会館まで持ち帰る（植樹の際に木へ）

###### 3. ボーナスポイントとして、花や実、気持ちのいい場所などを自由に探す

○探検マップの見つけたところにシールを貼り付ける

##### <メインポイント>

ポイント	ポイントマン	Pマンサポーター	プログラム
A. 真福寺	Aさん	教員 T	木の生長に関する話を聞く
B. 常盤公園	学生 I・K	—	ワークを行う（*）
C. レンガ坂	Aさん	Oさん	開発に関する話を聞く
D. 和田橋	Tさん	Aさん	欄干の花に関する話を聞く

##### （\*）ワークの概要（10分間）

○木の太さを測る

・チーム内で二人一組になって紐を用いて太い木を探す

○木の高さを測る

・風船と糸を使い、木の枝の下までの高さを測る

※ 各チームどちらか一方のワークを行う

##### <指令書>

各チームは、各ポイントでポイントマンサポーターから指令書を受け取る

（チームごとにルートが異なるため間違わないように渡すこと）

指令書には、次のポイントと次のポイントで行うことが書かれている

<水を汲むポイント>

ポイント	水を汲むチーム	「水を汲む指令」受けるメインポイント
真福寺墓地裏の湧き水	赤	A. 真福寺
Kさん宅の井戸	青	C. レンガ坂
帷子川の水（平和橋）	黄	町内会館（出発前）
Sさん宅の井戸	緑	C. レンガ坂

<キューブ>

各ポイントでプログラム終了後にチームに一つキューブを渡す

4つ集めて並べると、各ポイントの写真、「W」「A」「D」「A」の内のどれか一文字、ハナモモ（植樹する木）の写真の一部になる

各チームの発表後に16個集めて並べ、「WADA」を完成させ、大きなハナモモの写真をつくる

<ボーナスポイント>

移動中は「きれいな花」「実のなる植物」「緑がいっぱい」「気持ちいい」「虫がいる」といった場所を自由に探しながら歩き、探検マップの見つけたところにシールを貼り付ける。

最後に、町内会館での発表の際の材料にする。

※ 探検マップにシールを貼る際、チームスタッフが地図の位置などをサポート

<ルート>

○赤チーム

町内会館 → A. 真福寺 → (湧き水) → B. 常盤公園 → C. レンガ坂 → D. 和田橋 → 町内会館

○青チーム

町内会館 → D. 和田橋 → A. 真福寺 → B. 常盤公園 → C. レンガ坂 → (Kさん宅の井戸) → 町内会館

○黄チーム

町内会館 → (帷子川の水) → D. 和田橋 → C. レンガ坂 → B. 常盤公園 → A. 真福寺 → 町内会館

○緑チーム

町内会館 → C. レンガ坂 → (Sさん宅の井戸) → B. 常盤公園 → A. 真福寺 → D. 和田橋 → 町内会館

## ②当日のプログラム・役割分担

12:00	スタッフ集合（和田西部町内会館）
12:00～13:30	スタッフミーティング・会場準備・昼食
13:30	受付開始
14:00～14:10	はじめの挨拶・ルール説明・チーム内挨拶
14:10～15:40	まち探検
15:40～16:10	発表準備
16:10～16:40	発表・終わりの挨拶
16:40～17:00	杉山神社の話・植樹

### <役割分担>

#### ○ポイントマン

A：Aさん B：学生I・K C：Aさん D：Tさん

#### ○ポイントマンサポーター

（話をする際にパネルを提示、各チームにそれぞれの指令書を渡す）

A：教員T B：学生M C：Oさん D：学生A

#### ○チームスタッフ

赤：学生I・Yさん（中学生）・学生I

青：学生S・Tさん（中学生）・SBさんの妹さんのだんなさん

黄：学生N・Sさん（中学生）・SBさんの妹さん

緑：学生S・SBさん・学生K

※先頭の4名がチームスタッフリーダー

#### ○受付

学生I

#### ○記録（写真等）

サブチームスタッフ、ポイントマンサポーター、教員M、教員F



写真2-7 探検マップ(表紙)



写真2-8 探検マップ



写真2-9 受付のようす(大学生)



写真2-10 グループワークのようす(左から2人目が中学生サポーター)



写真2-11 発表の様子(一番左が中学生)



写真2-12 ワークショップ後の記念植樹のようす



和田町タウンマネジメント協議会  
地域と子どもプロジェクトチーム

子どもまち探検企画  
第6回  
わだまちの自然を  
探索せよ！

まち探検ワークショップ

わだまちの自然を探索（きゆうさく）せよ！

わだまち自然探検隊出動！



①まずは今日の任務を確認して、いざ出発！



②最初のポイントマンはどこかな？



③真福寺では一番長く生きている樹についてお話を聞きました。



④和田様では罌子の花をみんなで育てて守っているお話を聞きました。

去る9月27日、和田町周辺に住む子ども達が和田町周辺に残る自然のこと、自然の偉大さ、大切さについて、地域のみなさんや横浜国大生と一緒に、まち探検ゲームをしながらわだまちのかくれた自然を自然探検隊として調べて回り、大きな「自然探索マップ」にまとめました。

和田町周辺には昔からの大きな木や食べられる植物、見て楽しい草花やわき水などの自然がたくさん残っていましたね。そして和田町が自然豊かでステキなまちになるように、みんなで杉山神社にも記念植樹もしました。

自分たちの住むまちが、小さな自然も大切にする緑豊かな気持ちいいまちになるように、皆さんで力を合わせて守っていきましょう。



⑥雄牛、帷子川や各所の井戸で、命の水を汲みました



⑤常盤公園では、糸を使って木の太さを比べたり、風船を使って高さを測ったりしました。



①シラカ坂ではまちの緑がなくなってしまったお話を聞きました。

自然探検隊隊員：和田町周辺に住んでいる小学1～6年生19名  
地域のポイントマンさん

青木和雄さん、青木さん、田口さん、金井さん、坂石さん

サポート隊員：横浜国立大学 学生11名・教員4名

保土ヶ谷中2年生3名

横浜市職員ボランティア3名

協力：常盤台小学校・星川小学校・仏向小学校・保土ヶ谷中学校

和田西部町内会、真福寺、横浜市こども青少年局、

保土ヶ谷土木事務所・保土ヶ谷80千本植樹行動



⑥探検中は「きれいな花」「実のなる植物」「緑がいっぱい」「気持ちいい」「虫がいる」ところを記録し、地図にまとめて発表しました。



⑦最後に、杉山神社に記念の木（シラカシハナモモ）を植え、帷子川や各所の井戸で取った命の水をあげました。



企画・実施：和田町タウンマネジメント協議会・地域と子どもプロジェクトチーム

図2-14 地域各所での説明用のパネル

## (5) まとめ

最終的に、中学生3名が、事前ミーティングから当日運営に至るまで参加した。このうち2名は第1回ワークショップから継続参加していた児童であり、2008年時点では中学2年生になっていた。1名はこの中学生の友だちであり、ワークショップの趣旨に賛同し協力を申し出てくれた児童である。事前準備、当日運営の2つの時間軸から、中学生参加の効果や、果たした役割等々について考察を加えてみたい。

事前準備では、地元ミーティングや準備作業の手伝いに参加してもらう機会を設けた。夜間の会合への参加が困難であったり、放課後に確保できる時間も限られており、全体としての参加時間数はそれほど多いものではなかったが、作業分担を通じて、大学生や地域住民との交流も生まれた。ワークショップの目的の理解や準備作業への参加は小学生にはハードルが高いが、中学生であれば一定の理解を示し、そのプロセスへの参加が可能であることが確認できた。ただし、今回はある程度企画が詰まった段階からの限定的な参加であったため、作業補助の意味合いが強かったが、参加機会の工夫次第では企画検討からの参加も可能であると思われる。

当日運営では、中学生3人にそれぞれ小学児童のグループにサポーターとしてついてもらい、グループワークの支援をお願いした。途中、小学生には危険だと思われる場所への立ち入りを「危ないよ」と制止したり、グループワークの内容でやや難解な箇所をわかりやすく解説したりする姿が見られた。自身もこれまでグループワークに参加した経験から、基本的には小学児童の自由な発想を理解し受け入れつつ、障害に行き当たったときに解決のための情報（解決策そのものではないことが重要）を提供するような気遣いをしているように見えた。

以上より、中学生ならではの関わりの可能性とその有効性が確認された。実際には、大学生も同じような役割を果たしていたが、小学児童には中学生の方がより身近な存在に見えていたはずである。いずれにしても地域を理解する上で媒介者・翻訳者としての役割の重要性が確認できたと言える。



写真2-13 スタッフ記念写真(最前列3名が中学生、後列は大学生・大学教員)

### 第3章 中高生の主体的参加 —都筑スタディー—



### 第3章 中高生の主体的参加—都筑スタディ—

#### 3-1 中高生を主役とした活躍の場

##### (1) 19歳以下のこどもだけのまち「ミニヨコハマシティ」

19歳以下のこどもが主体となって遊んでつくるまち「ミニヨコハマシティ（以下、ミニヨコ）」は、NPO法人 I Love つづきおよびNPO ミニシティプラス（前身はミニヨコハマ研究会）が主体となって2007年3月に横浜市都筑区にある住宅展示場で初めて開催され、その後、毎年1回開催されている（図3-1）。

このこどもが創り上げる架空のまちは、運営市民が後述するこども会議を通して創り上げ、開催期間中は一般市民として多くのこどもが参加できるものである。そこにはこども会議で決められたまちのルールが存在し、ミニヨンという通貨が流通し、様々な職種（あるいは起業）で働くことや遊ぶことができる仕組みである。こどものまちはドイツ・ミュンヘンですでに20年の歴史を持つ7歳から15歳までの子どもだけが運営する「小さな都市—ミニミュンヘン」を模したものである。日本においては2003年に千葉県佐倉市で行われた「ミニさくら」をきっかけに日本各地へ広がっている。

ミニヨコは2009年夏には横浜開港150周年記念の一環として横浜市こども青少年局との共催により「こどものまち EXPO in YOKOHAMA」として中区の大栈橋ホールで実施された。2009年のミニヨコハマシティ開催へ至る経緯を図3-2に示す。



# 遊んで創るこどものまち ミニヨコハマシティ

ミニヨコは こどもたちが自分たちの力で、自分たちのまちや仕事を決めて  
まちをオープンするイベントです。  
ミニヨコは19才以下が市民の、大人口出し禁止のまちです。

まちのリーダー  
は 高校生市長

1年間を通してまちのリーダーと  
なる市長選をミニヨコ開催期間  
中に選出します。任期は1年間で  
次のまちでの再選挙までです。



毎月開かれる  
こどもまち会議



こども会議のようす。真剣です。

こども市長がこども運営市民を  
召集し、月1回こどもまち会議を  
開きます。今後のミニヨコをどう  
したいか? ミニヨコをPRする作戦  
なども話し合われます。



大人は口出しはしません。アドバイザーです。  
当日の大人参加者は×マスクを着用。

大人口出し禁止

本物の仕事に  
触れる  
チャンスを大人が  
サポート



曲づくりの練習

いままで行ってきた講座  
・ゲームクリエイターによる  
「ゲームができるまで講座」  
・まちなみをつくる  
「ジオラマ作成講座」  
・阪急デパート  
「店員研修」  
・ミュージカル・振付師による  
「エンタテインメント講座」・ETC

## 2007-3-17/18 第1回ミニヨコハマシティ

主催 特定非営利活動法人 Loveつづき  
共催 横浜市子ども青少年局・ハウスクエア横浜  
協力 ミニヨコハマシティ研究会 子ども環境学会 中川駅前商業地区振興会  
横浜市漫画研究会 横浜まちづくり倶楽部 横浜市安全管理部消防防衛  
課タウンニュース社 ケーブルネットつづきの森 横浜市民環境活動支援センター  
横浜つづきワイズメン&ウイメンズクラブ 都筑区明るい選挙推進協議会  
㈱ベネッセコーポレーション NPOこどものまち 武蔵工業大学M-TEC横浜祭運営委員会  
㈱増田林業 商店街ハナノアナ 都筑中央公園聖山倶楽部 昭和建設㈱ ㈱日井組  
根本建設㈱ 保土ヶ谷工業㈱ 河本開発工業㈱ ㈱弘充建設 G30学生ネット  
ヨコハマ都筑ミュージカル委員会 ㈱花丸本舗 菓子工房スーリ

会場 ハウスクエア横浜(都筑区中川の住宅展示場)

参加者数...延べ約500人  
☆子どもスタッフ申込...58人(準備ワークショップから参加)  
☆当日こども市民登録...223人(うち2日間とも来た子ども約90人)  
☆大人見学...103人

参加者年齢...平均年齢9.2歳  
☆16~19歳...4人 ☆12~15歳...26人 ☆9~11歳...96人  
☆6~8歳...55人 ☆6歳以下...25人

### 当日の内容

**公共的事業**  
市役所(受付) 銀行 ミニヨコ学校 ハローワーク 選挙管理委員会 ステージ司会  
大工(みんなの広場作り 道路作り) ミニヨコ消防署 新聞社「ニュースミニヨコ」  
フラワーコーディネーター(まちに花を飾る) こども掲示板(いじめに関するアンケート調査)  
手作り工房 コミステーション 大人の悩み相談室  
**製造・販売(お店)**  
ソースせんべいや パナチヤコ わたあめ ポップコーン マシュマロサンド  
チャーハン ホットケーキ すいとん汁(すいとん汁は大人が用意、こどもはアルバイト)  
リサイクルショップ あはゆコミックス(漫画、絵、しおりを製造販売) 古本屋 おみやげや  
ニコニコミニ(手作り雑貨を販売) フラワーショップ アクセサリーショップ  
**サービス業**  
トランプ占い リヤカーバス わなげ ハヤメイク&ネイル 宅配便(台車を利用)

市長選挙 立候補8名 有権者190人 投票率98 投票率51.8%  
市長1名 副市長1名を選出。

## 2007-3-29/30/31 第2回ミニヨコハマシティ

主催 特定非営利活動法人 Loveつづき  
共催 ミニヨコハマシティ研究会・ハウスクエア横浜  
後援 子ども環境学会・都筑区役所  
協力 武蔵工業大学環境情報学部(現代GP)プロジェクト(上野研・中村研・土橋研)  
東京ガス(株)INAXエクステリア住宅設備 道と米のちの 都筑消防署 都筑区明るい選挙推進委員会  
横浜建設業青年会(昭和建設(株)、(株)日井組、保土ヶ谷工業(株))  
(株)増田林業 積水ハウス(株)ミサワホーム東京(株)(株)せらら工房 (株)V-T-SYSTEMS  
イケヤ(障害者地域作業所 Ensemble あんさんぶる)ペロタクシーヨコハマ  
(株)NDCグラフィックス 横浜まちづくり倶楽部 ケーブルネットつづきの森  
武蔵工業大学M-TEC横浜祭運営委員会(株)タウンニュース社 中川駅前商業地区振興会  
横浜つづきワイズメン&ウイメンズクラブ NPO S&Sネット

会場 ハウスクエア横浜(都筑区中川の住宅展示場)

参加者数...延べ約3000人  
☆子どもスタッフ申込...80人(準備ワークショップから参加)  
☆当日こども市民登録...29日 265人 30日 376人 31日 418人  
☆大人見学...約1500人

参加者年齢  
☆当日市民年齢分布 5才以下:9% 6~8才:33% 9~11才:45% 12~14才:9% その他:4%  
☆こども運営市民内訳 5才以下:1人 6~8才:12人 9~11才:31人 12~14才:30人 15才以上:6人

### 当日の内容

**公共的事業**  
市役所 学校 M-K(ミニヨコ放送局)銀行 ハローワーク ステージ運営 ミニヨコ新聞社  
警察 ミニヨコ消防署 タイムキーパー シャボンズ 大工 選挙管理委員会 モデルハウスツアー  
大人のレストハウス&大人の悩み相談室世界おしゃべりなゴミステーション 保育園  
ミニヨコキセキミライツアー メッセージボード そざい屋 エレベーターボーイ&ガールズ  
**食べ物系のお店**  
ストロベリーカフェ ブックカフェ パナチヤコ クローバー ブラックアンドホワイト ガスバッチョカフェ  
3日起業→たこせん ポップコーン  
**サービス業**  
ゲームセンター ペロタクシー 忍者アカデミー 交通博物館  
**雑貨・小物や**  
ハッピーキャンドル ハッピークローバー 絵工作やアモン コロパサル絵画 日ビクミン フリーマーケット  
当日起業→はんこ工房 カードや モバイルゲセンヤ  
市長選挙 立候補8名 有権者約1000人 投票率519  
2人に○をつける方式の中、1つしか○をつけていないものがあり、実際の投票率はとれていない。  
市長1名 副市長3名を選出。

図3-1 ミニヨコハマシティ(都筑区開催)の概要(出典:NPO法人ミニシティプラス「ミニヨコノキセキ」)

# ミニヨコノキセキ

2006. 10	ミニヨコハマシティ研究会発足 (横浜市職員有志、NPO I Loveつづき、子ども環境学会研修者等)		子ども会議のようす
2006. 12	NPO法人 I Loveつづきが子ども青少年局から事業受託 ミニヨコハマシティ3月開催が決定		ハローワークで仕事を選ぶ
2007. 1	ミニヨコハマシティ運営市民&市長応募開始。		ミニヨコハマシティのようす
2007. 3/4	はじめての子どもワークショップに50人以上参加		リヤカーバスがまちを走る
2007. 3/17・18	ミニヨコハマシティ☆オープンinハウスクエア横浜 初のミニヨコ市長、副市長決定。 (登録市民300人となる)		市長選挙候補者6人
2007. 4	I Loveつづきがミニヨコ事業で19年度 JTの助成金獲得		子ども環境学会で発表
2007. 4/8	NHK FMIにミニヨコ市長副市長が出演		子ども環境学会で発表
2007. 4/29	子ども環境学会でミニヨコ市民らが事例発表		ゲームクリエイターによる「ゲームができるまで講座」
2007. 5~	子どもまち会議毎月1回のペースで開催 (毎回約30人参加) ~ミニヨコの夏休み~		横浜市役所訪問・交流
2007. 8/6	都筑阪急・モザイクモール港北 での店員研修&デパート見学		阪急デパートで店員研修
2007. 8/9	ゲームができるまで講座 (大手ゲーム会社のゲームクリエイターによる)		お祭りのステージで歌とダンスを披露
2007. 8/21	阪急でミニミニヨコハマシティ☆オープン		だがしや楽校 (パシフィコ横浜)で写真館を出店
2007. 8/23	ミニヨコ市民☆市役所訪問 (子ども青少年局長などと意見交換会)		エンターテイメント講座
2007. 8/26	交流パーベキュー		国際交流カフェに出展 ドイツの子どもたちと交流
2007. 9/16	エンターテイメント講座		第2回ミニヨコハマシティ開催 参加者総数3000人に!
2007. 10/7	区民交流元気カーニバル出演		ミニヨコの大人シンポジウム 市長副市長のトーク
2007. 10/17	ミニヨコシンポジウム		毎月の子ども会議はいつもワイワイ
2007. 10/27・28	だがしや楽校に出店		赤レンガでU-19シンポジウム開催
2007. 11/18	国際交流カフェに出店		赤レンガでU-19シンポジウム開催
2007. 12/22	ミニヨコクリスマスパーティ		ドイツ訪問のようす
2008. 2~3月	子どもまち会議		ドイツ訪問のようす
2008. 3/29・30・31	ミニヨコハマシティ☆オープン inハウスクエア横浜		
2008. 6/1	まち・みらい・ゆめ~U-19シンポジウム in 赤レンガ倉庫 (横浜)		
2008. 8/5	ミニミュンヘンオープン in ミュンヘン		
2008. 8/13 14/15	世界子どものまち会議 in ベルリン		
2009. 8/7/8/9	まち・みらい・ゆめ~子どものまちEXPO ・ミニヨコハマシティ ・第2回世界子どものまち会議 in 横浜		

図3-2 ミニヨコハマシティの経緯(出典:NPO 法人ミニシティプラス「ミニヨコノキセキ」)

## (2) ミニヨコハマシティをつくりあげた「こども会議」

ミニヨコはこれまで横浜市都筑区で2回、中区で1回開催されており、その特徴は、まちの開催時に選ばれたこども市長（現在高校3年）が主導し、年間を通してのこども会議を行っていることである。その内容はミニヨコ開催に向けた企画会議だけでなく、時に本番のミニヨコで行う職業に向けた本物の職業体験であったり（例えば接客研修、デザイナー研修、音楽づくり、放送局訪問等）、ミニ・ミニヨコのようなプレイベントの実施、また行政のイベント参加や他のこどものまち訪問等、多岐にわたる。

次頁以降に2009年夏開催に向けて進められたこども会議の記録を記す（出典：NPO法人ミニシティプラス「2009 こどものまち EXPO 報告書」より）。こども会議を通して、運営市民のこどもたちで創り上げるこどものまちの概念の共有化をはかる一方、そこで必要な仕事、自分がしてみたい仕事を積み上げ、まちのルールづくりとレイアウト（「まちの都市計画」と呼ばれていた）決めに大人のサポートの下、中高生主導でチームに分かれて行っていった。



## 第1回

- 日時:2月22日(日) 10:00~12:30
- 会場:ハウスクエア横浜(都筑区中川)
- 参加数 こども55人 おとな20人
- 主なテーマ
  - 「まちに何が必要か、自分はそこで何をしたいかを考える」
- 議事
  1. 8月のイベント概要の説明 自己紹介
  2. どんなまちがあるか資料をみてみよう
    - ◇ いろんな国のまちの写真、いままで開催されたこどものまちのパネルをみて、「まち」に対して自分なりのイメージをつくる。
  3. どんなまちが作りたいか考えてみよう
    - ◇ 浮かんだイメージをなんでも、書き出す
    - ◇ まちのイメージをだし、キャッチコピーを書き出す。
  4. まちのイメージを「ことば」にしてみよう
    - ◇ 上記をグループでまとめ、さらに短いことばにしてキャッチコピーをつくる。
  5. まとめ→[別添資料:090222 こども会議記録-1](#)  
[090222 こども会議記録-2](#)
  6. 小学生、中学生に別れて、8月のイベントに向けたワーク
    - ◇ 小学生
      - 各自がミニヨコ運営市民応募用紙に記入しながら、8月に行うEXPOのまちに何が必要か、自分はそこで何をしたいかを考える。
    - ◇ 中学生
      - 昨年のミニヨコの運営や U-19 シンポに出た人を今回のプロデューサーとして、以下の3つのプロジェクトをまとめ、8月までのスケジュールをつくる。
        - 他のこどものまちからの参加方法
          - 通貨の両替レートを定める、標準的時給を決める
        - まちの中の公共イベントについて
          - こどものまち世界会議・U-19シンポジウム、市長選挙(立候補演説、当選者の演説)、観光大使コンテスト、エンターテインメントステージ
        - ミニヨコのまちの運営に必要なプロジェクト
          - 公共(市役所)プロジェクト、まちづくりプロジェクト、ジョブセンター・銀行プロジェクト



## 第2回

● 日時:3月20日(金・祝) 13:00~16:00

● 会場:ふりーふらっと(野毛)

● 参加数 こども37人 おとな9人

● 主なテーマ

➤ 「まちのしくみについて考える」

● 議事

➤ リーダーが考えたまちのしくみをロールプレイで表現し、理解する

寸劇例 「まちには、働く人がいて、消費する人がいて、経済が生まれることを理解する。」

店長)お店の準備が完了した。さあ、お客さんが来るかな〜? ぜんぜんこないな〜(バイト)バイトにきました。

店長)まだだれもお客さんいないからバイトはないよ、帰ってください。

★ナレーション

バイトを雇わないと、まちがはじまっても、お金をだれも持っていないから、お店にもお客さんはこられませんが、まちに遊びに来る人は、まず働き、それから始めてお金ができてお客さんとして遊べます。

バイト)(まだ小さい子)・・・バイトにきました。

店長)こんな小さい子のバイトはうちでは無理。帰ってください。

★ナレーション

バイトの人の仕事は、準備をしたり、広告をつくったり、なんでも考えてあげましょう。

小さい子でもお店の宣伝のチラシを配ったり、ゴミを拾ったり、なんでも考えてあげましょう。

例えば店員の練習も、バイトとしての研修の一環です。

### 別紙資料:

- わかりやすい、迷わないまちのしくみ
- まちが動き始める前にアルバイトがする仕事
- まちの中での大人の扱い



別紙資料参照: 第1回、第2回をまとめた「まちのアイデンティティづくり」

### 第3回

- 日時:4月4日(土) 13:00~16:00
- 会場:ふりーふらっと 市立図書館団体室
- 参加数 こども15人 おとな8人
- 主なテーマ
  - ①「まちのしくみを考える」
  - ②「こどものまち」をわかりやすいものにするために
- 議事
  - ①TMC(タウンメイクコミッティ)
    - 1、大人の入場はどうか。  
→基本的には入れない!! ツアー、緊急時のみ。
    - 2、小さい子の対応はどうか。  
→ミニヨコ入場は小学生以上にする。小学生未満の子は保育園に入ってもらおう。
    - 3、その他…  
ミニヨコガイドブックを作り、当日配ることにする。  
地図・各お店の看板にマークをつけることにする。  
(例えば、食べ物屋ならフォークとナイフのマークというような感じで…)また、TMCの中で役割分担(食品・公共・お店・デザインなどなど…)をして、まちをつくるチームと連携しながら、これから進めていきたい。
  - ②「まちをつくる」チーム
    - ◆ 象徴的な建物があるといい
    - ◆ 道路計画(メインストリートとか、歩行者専用とか、路地的なもの)が必要
    - ◆ サイン計画(交通標識とか店案内)をちゃんとする一ぱつとみてどこになにがあるかわかり易い案内表示とか
    - ◆ ゾーン毎に色分けしたようなわかりやすい案内マップがあるといいというような意見を受けて、
    - サインのデザインを調べる
    - 道路計画のことを調べる
    - 案内マップ的なものを調べるといった自分なりの興味に従って、都市計画の本や、グラフィックデザインの本とかを、学生達と一緒に探し、コピーや写生をした。



#### 第4回

- 日時:5月3日(日) 13:00~16:00
- 会場:ふりーふらっと
- 参加数 こども34人 おとな12人
- 主なテーマ
  - 「こどものまちでの自分の仕事、まちに必要な仕事について考える」
- 議事
  - 小学生→別紙資料参照:コンサルシートを記入しながら、自分のやりたい仕事を考える。
  - 中学生以上
    - ◆ 公共の仕事についてどんなものがあるのか、書き出し、分類してみた。

別紙資料参照:090603 公共の仕事



#### 第5回

- 日時:5月10日(日) 10:00~12:00
- 会場:都筑区役所
- 参加数 こども24人 おとな5人
- 主なテーマ
  - 「こどものまちでの自分の仕事、まちに必要な仕事について考える」
- 議事
  - 主に小学生→コンサルシート(別添)を記入しながら、自分のやりたい仕事を考える。



### 第6回

- 日時:5月30日(日) 14:00~16:00
- 会場:ふりーふらっと
- 参加数 とも25人 おとな12人
- 主なテーマ
  - 「ミニヨコのまちのイメージを共有する、足りないことを認識する」
- 議事
  - ホールの模型と計画平面図を囲み、意見交換
  - 公共で必要なもの再確認
  - 公共の担当者の分担について話し合い



### 第7回

- 日時:6月28日(日) 14:00~16:00
- 会場:東京電力神奈川支店
- 参加数 とも34人 おとな15人
- 主なテーマ
  - 「まちのしくみと運営について詰める」
- 議事
  - お金のこと
    - ◇ ①お金の基本について
      - 1ミニヨン=10円
      - どういうお金にするか??
      - 時給が、物価の基本になる。30分労働=50ミニヨン
      - 店長の資本(Fund)は別にある。
      - 税金は売上の30%
      - アルバイトの給料は売上からではなく、銀行から支給。
      - 人気のない仕事は…
        - 30分の時給を10~30円
        - 公共の仕事は60~65
    - ◇ ②大使館で使うお金のこと
      - いくらまで持ってくるのか決める
      - 両替所をつくる
      - 大使館共通通貨をつくる→今後この街でも使える
        - →「ミニロ」を創設、ミニヨコの貨幣価値と同じレート
        - 5, 10, 50, 100の紙幣を創る

### 第8回

- 日時:7月5日(日) 13:00~16:00
- 会場:ハウスクエア横浜
- 参加数 こども15人 おとな13人
- 主なテーマ
  - 「まちの都市計画、サイン計画等について最終決定」
- 議事
  - 建築家 遠藤氏から、まちづくりについての講義
  - 各自担当施設のシンボルマーク、看板デザイン等をWSで制作



### 第9回

- 日時:7月25日(土) 13:00~16:00
- 会場:東京電力神奈川支店
- 参加数 こども34人 おとな15人
- 主なテーマ
  - 「まちのしくみ、各施設の詳細を確認」
- 議事
  - ミニヨコ学校の確認
  - 紙幣のデザインの確認
  - 各施設、店舗の最終確認
  - ジョブセンターのリハーサル
  - 各施設、店舗の個別相談



どんなまちをつくりたいか  
(2月22日こども会議)

・食べ物系	・見ため(～みたいな町)	・暮らし
お菓子がたくさんある	ネバーランド	①お金関係
給食が食べ放題	まんが	安い物がたくさん売ってる
給食で好きな物が食べられる	竹下通り	お金がなくても遊べる
	商店街(多数)	たくさんお金を儲けられる
	日本文化あふれる	タイムセールがある
・建物・乗り物	綺麗で清潔感がある	割引券がある
水族館がある	古い歴史がある	何でも無料
動物園がある	ディズニーランド・シー	1日1万・100万円拾える
観覧車がある	渋谷	必ず玉の輿にのれる
お城がある	昭和っぽい	家・財布・お金が全て本物
気球に乗れる	遊園地(多数)	交通機関が全部ただ
ゲームセンターがある	ロマンチック	
	時代劇	②物関係
・学校関係	古代遺跡	ぶつづつ交換ができる
学校がない	宇宙人が作ったみたい	地下でもケータイが使える
毎日学級閉鎖になる	かわいい	音楽を作れる
算数がない	丁寧	怖い映画がない
体育の時間が延びる	塩分控えめの町	CMのないテレビがある
知らなかった手を学べる	他国の良さが集まった	大きな部屋がある
色々な体験ができる	海の中	
お弁当を10分で食べなくていい	どこに何があるか分かりやすい	③人間関係
	英国風	障に因らない
		大人も子どもも楽しめる
		女子優先
		自由
・自然・環境	・未来	みんなが仲良く過ごせる
地球に優しい	ドラえもん の道具が使える(多数)	みんなが楽しいと思える
エコロジーに取り組む	自分の好きな時代にタイムスリップできる	どんな人でも楽しめる
花がたくさんある	ロボットがいる	周りに、騒音などで迷惑にならない
可愛い動物がたくさんいる	神話に出てくるような妖精が出てくる	スポーツがたくさんできる
サバイバルができる森がある	1瞬で色んなところにいける	他の国の人と交流ができる
植物が多い	空飛ぶ車がある	先輩・後輩関係なく仲良くできる
夜になっても明るい	一年が長くはやく過ぎる	誰もが積極的に活動できる
雨が降ってもアメが降ってくる	思った事が叶う	事故が起きない
雨が降っても濡れない	忍者がいる	いじめがない
ポニーに乗って一周できる	宇宙にいける	掃除がない
大きな木がある	未来技術を取り入れている(電気自動車など)	遊びたい放題
ポイ捨てがない・ゴミがない	神様がいる	運動がよい
いつも星が見える		夜遊びができる
一年中四季を感じられる		有名人・キャラクターに会える
		→オバマ大統領
		ヒラリー・クリントン
		宮崎はやお
		シナモン
		ドラえもん(せめて四次元ポケットだけでも借りられ
		トロと遊べる
		誰にでも挨拶する

わかりやすい、迷わないまちのしくみ(3月20日こども会議)

お店の種類	空間
ガイドブックを作る	・案内所をつくる
看板などに、そのお店に關係のある絵をかく	・みんながわかりやすい所に地図を貼る
店の内容をかく	・地面にテープなどで方向を示す。
求人誌をつくる	・店の種類ごとに店を配置 する。
シンプルなお名前にする	
看板の下に説明をかく	地図
大きく字を書く	・お店ごとに色分けした地図 をつくる。
指定のマークをつくる	(飲食系→○色)
絵を書く	(サービス店→□色)
ハローワークで職業をジャンル別に分けておく	・案内所・出張案内係をつくる
目印になるものを店の近くに置く	・小さい字用・大きい字用に分けた地図を作り直す。
案内人という仕事をつくる	・デパートみたいな地図をつくる
各お店ごとに、地図記号のような簡単なマークをつくる。	

ミニヨコに必要なと思う・やりたい職業

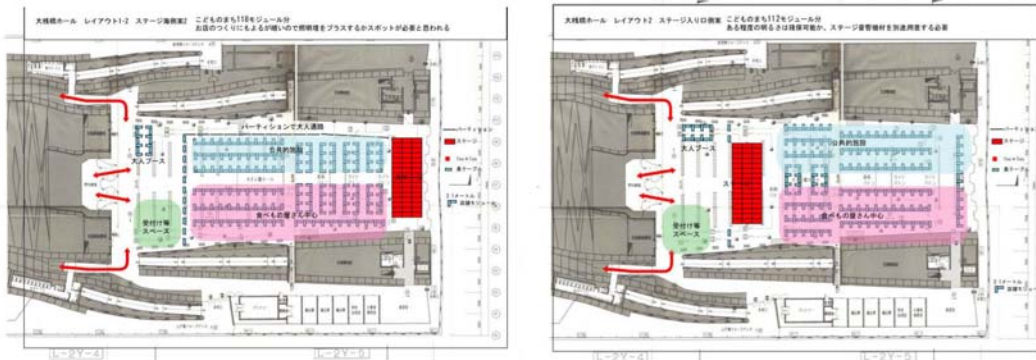
飲食系	サービス系	公共系	お店以外
カフェ	ネイル	ミニヨコ学校	点字表示
お菓子屋(駄菓子も)	大人の休憩所・たまり場(多数)	図書館	ポスター
ミックスジュース発明所	迷子センター(多数)	ごみステーション	ステージ
ポップコーン	子ども110番	裁判所・裁判官	落し物箱
ずし屋	フリマ	門番	地図
パン屋	公衆電話	警察	小銭
おにぎり屋	音声案内	市役所	PR係
アイス屋	デザイナー	ハローワーク(たくさんつく)	字書き案内
やおや	荷物預け所	仕事相談所(初めてのの人に仕事を教える)	ガイド
カレー屋	フリースペース(ハイブ椅子を置く)	水道局	アナウンサー
	大人の悩み相談	チラシ屋	通訳者
	射的	郵便局	警察犬
乗り物系	映画	受付	盲導犬
新幹線	病院	ガス	消火器
飛行機	お掃除屋	ストレス解消のための公園	電話
電車	全部手作り屋	消防署	家
エコカー	002をなくす為の実験所	刑務所	ルールをつくる
ペタクシー	化学実験をすること	銀行	カメラ
バス	老人ホーム	国会	草・木
人力車	写真館	造幣局	池
レンタル自転車	スポーツセンター	発電所	まちアピール
レンタルスクーター	宿泊所		
	家		
	コンビニ		
	なんでもセンター		
	デパート		
	遊園地		
	おもちゃ屋		
	お化け屋敷		





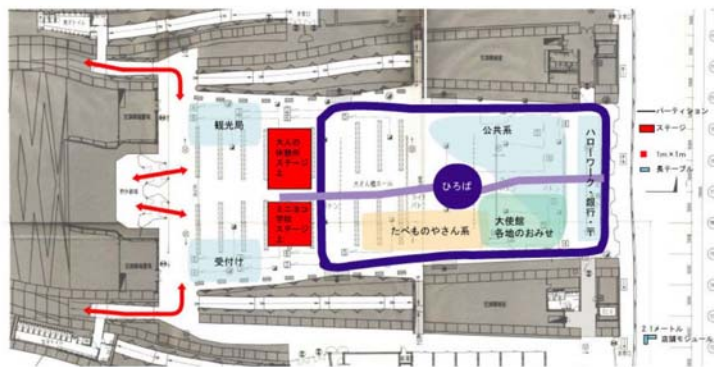
こども会議の話し合い等による、まちの計画図変遷

☆5月時点は、ステージのーが違う2案が存在した

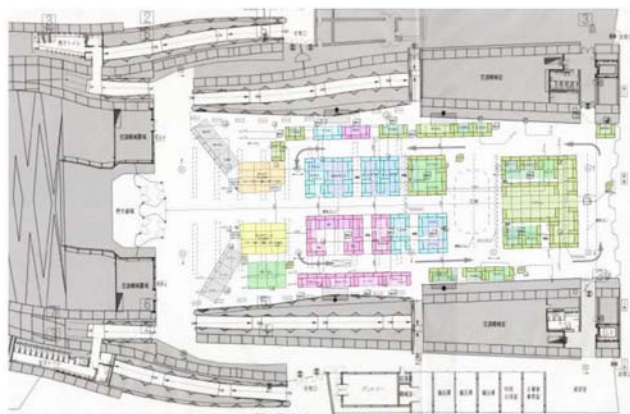


その後、ペロタクシーを会場内に回遊させる案が正式採用、また、まちのアイデンティティとして、中心部にみんなが集まれる広場をつくることになり、5月30日以降の会議を経て、レイアウトは変わっていく。

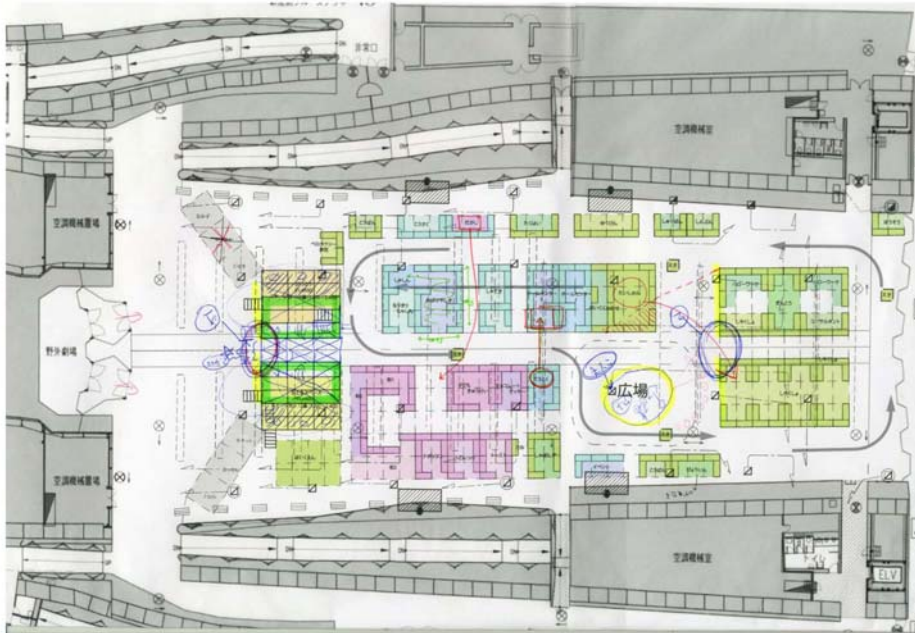
広場案その1(5月30日)



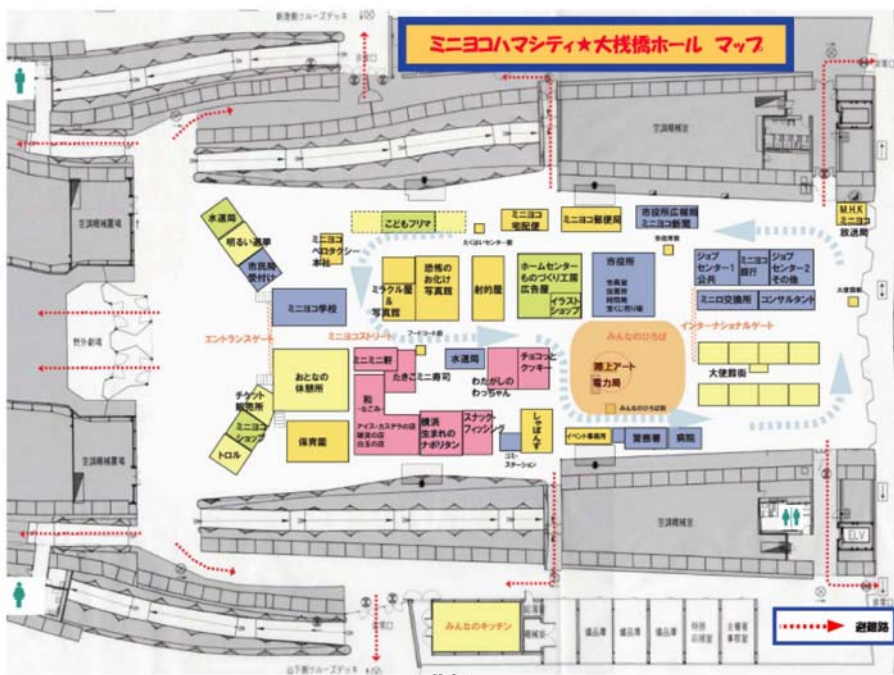
広場案その後①



7月13日の建築ワークショップでの書込（広場案その後②）



そして、7月25日にこどもたちの最終意見が入り、こうなった



### まちづくり実践ワークショップ

- 日時： 8月1(土)～6日(水)
- 会場：@BankART NYK 10:00～17:00 大棧橋ホール(6日)
- 参加数 5日間延べ こども140人 おとな110人
- 主なプログラム  
(関東学院大、横浜国大等の建築科の学生たちとともに)
  - まちなみ(都市計画)のイメージ確認
  - お店のイメージ(看板やサインの統一性)確認
  - 実際に掲出するお店の看板づくり
  - まちのシンボルとなる、「エントランスゲート」、「国際ゲート」、広場の「シンボルツリー」等の製作
  - まちのなかにある「案内サイン」「ペロタクシー停留所」の製作
  - 店舗のファサードとなる「黒板幕板」、「LEDあんどん」を製作



### (3) ミニヨコハマシティにおける異世代交流の成果とこどもの変化

(2) で示したとおり、ミニヨコは当日できあがったまちで遊ぶ楽しみもあるが、なによりもこども会議を通してこどもたち自身で仮想のまちを創り上げる過程が最大の魅力といえよう。「遊びながら楽しく」進められる過程において、子ども達は、自分たちが現実に住むまちを良くも悪くも手本にすることになるので、まちを評価しながら、自分達が思うまちに必要な地域資源について必然的に考えることとなる。また仲間が見つけた店やルールがどのようなものなのかそれを自分の考えとどう繋げたら発展するかについても、スタッフの大人に聞きながらこども同士の話し合いで決めている。こども同士で話し合いで決めるといっても子ども達は同じ年齢ばかりではない。中高生が小学低学年生と接して、こどものまちのルールづくりに向けて合意形成をしていく。時に小学低学年生が中高生に意見する場面もある。そして困った時には常に大人がさりげなくサポートする。彼らにとっての大人スタッフは「専門的知識を持つ中間支援者」といったところであろう。

一方、大人スタッフが子ども達と接して得られたこどもの声を一部紹介する（出典：こどものまち EXPO in Yokohama 資料）。

\*\*\*\*\*

母親が NPO 会員のため、なんとなくお手伝い、で当時来てくれた Nさんは、2008 年高校 3 年生のとき、ミニミュンヘンとベルリン世界会議にいき、「こどものまち」の社会での意義をテーマに、大学の推薦入試でプレゼンし、見事合格した。今年は大学生になり、語学の勉強をしながら、ミニヨコの運営市民の中心にいる。彼女は「まちは大人たちだけにまかせておけない。自分たちもよりよくすてきに変えていける」「ちいさなこどもたちが夢をもてるような環境をつくりたい」と話してくれた。

\*\*\*\*\*

市長を 2 年務める現在高校 3 年生の Mさんは、アナウンサーになりたいといていた最初の頃から、学校の先生になろうかなとっている。一人っ子だからミニヨコのこどもたちは兄弟姉妹のようで、うれしいという。「小さい子たちの意見にはいつも驚く、みんなをまとめるのは大変だけど、楽しい」「自分もまわりのこどもたちも、一緒に成長していく、それを感じるのがうれしい」という。大人になっていく過程の中で、ミニヨコは大きな影響を及ぼしていて、なかなか自分の意見をいえなかったり、伝え方がへただったりしたこどもたちが、ちゃんとまわりの人たちと協調しながら、発言していけるようになっていっている。それを強く感じるという。

\*\*\*\*\*

第一回目当時6年生で副市長になったKさんは、2008年ドイツのミニミュンヘンやベルリンでの世界会議で堂々と英語を暗記して、ミニヨコの発表をした。最初にこどもの中のいじめをなくしたい、そういう会議をミニヨコでやりたいといていた彼女は、2回目にこども会議を実現し、高校生に混じって様々な場面で最年少キャストとして活躍した。「自分たちは大人たちの社会的政策にふりまわされている、ゆとり教育をやって、だめなら廃止、そういう狭間にいるこどもたちのこと、もっと考えて欲しい」という。一方「ミニヨコの大人スタッフと接し、大人も悩んだり、苦しんだりするんだ、と身近で感じた」という。いい顔をして、大人ぶる大人が多い中、ミニヨコに関わる大人はストレートにこどもと接しているから、そう感じただのと思う。他にも「近所の人に思い切ってあいさつをしてみたら、すごくイイ感じで話せるようになった。あいさつは大切だからミニヨコの中でもみんながなかよくあいさつできるようなまちにしたい」という。

\*\*\*\*\*

これらの声にみるように、ミニヨコにかかわってきたこどもたちは大きく変化していく。彼らのコメントからは同じ学校の仲間や同級生に閉じない関係の効果だけでなく、そこに大人がさりげなく関わることの重要性が垣間見られる。

### 3-2 先進事例の考察—ドイツにおける子ども・若者の参画施策—

ドイツでは多くの自治体において実社会での子どもと若者の参画を推進している。

例えば20年以上も歴史のある「ミニミュンヘン」の開催地ミュンヘン市社会局では子どもと家族にやさしいまちづくりをめざし、『子ども・家族政策ガイドライン』を制定し、都市開発等に際して子どもの意見を聞く制度を推進している。その根源となっているのは、「子どもの権利条約」である。すなわち、子どもの権利条約第12条で明記されていることに応じ、意志決定への子ども・若者に相応しい参画が保証されるべきである、という考え方である。

都市再開発、居住環境改善、村おこしや農村開発、公共空間の整備、といった案件の、政治的協議プロセスや整備計画・デザイン、ソフトづくりの実践において子ども・若者が参画されるようになっている。ここでいう参画は問題解決に向けて大人と一緒に働くことを意味する。参画の過程は「大人と同じようにともに考え、ともに読んで、ともに計画し、ともに決定し、ともにデザインし、ともに責任を負う」としているものである。参画の具体的成功例として、公園などの遊び場の整備への子ども参画である。利用の当事者である子どもが参画することで、アイデンティティが高まり、破壊行為の減少、利用者の増加、事故の減少といった効果が得られているようだ。

実社会での計画において子ども参画を推進するには、大人側にも変化が必要である。子どもと同じ目線で理解すること、大人の権力ではなく子どもとわかちあうこと、より多くの大人の関心を高めることが求められる。また子どもの声を聞き参画を推進するため、研修等を通じて大人の資質を向上させ、コーディネーターを多く配置することも重要と考えられている。

## 第4章 地域参画の方法 —教育ツール、プログラム—





## 第4章 地域参画の方法 —教育ツール、プログラム—

### 4-1 まちづくり・コミュニティ活動への参画を促す教科学習の可能性

#### —中学校および高等学校家庭科教科書の記述分析から—

##### 4-1-1 研究の背景と目的

###### (1) 参画の広がり と 課題

良好な住環境をつくるには、市民参加が不可欠であると指摘されて久しいが、近年、多くの自治体で住民参加のまちづくりの事例が当たり前に見られるようになってきた。小・中学生や高校生といった青少年がまちづくりやコミュニティ活動に参画する活動も、学校教育や地域での取り組みとしてみられるようになり、その意味や意義も徐々に理解が広がっている。筆者らが行った1991年から2000年までの住まい・住環境に関する教育研究の動向調査の結果においても、ワークショップなど参加型で実践的な教育活動に関する報告が1990年代後半から増加しており、各地で多様な取り組みがなされていることが確認できた(文献1)。

これらの背景には、小中学校では2002年、高校では2003年の「総合的な学習の時間」創設も大きな影響を与えていると考えられ、程度の差はあるが、地域とのかかわりを重視し主体的な参画を促す教育活動の可能性は確実に広がっているといえるだろう。しかし、新田等が『「住まい・まち学習」実践報告論文集』1号(2000)から7号(2006)までを分析した結果報告によると、総合学習におけるまちづくりやコミュニティづくりに関する学習は、小学校での取り組みが中心となっているようである(文献2)。

しかし、まちづくりやコミュニティ活動への参画の意味や意義は、中高生や大人においても大いにあると考える。筆者が、コミュニティ活動参加者へのヒアリング調査を行った結果からは、参加による自治意識や共生意識などの形成が確認された(文献3)。さらに、高校生に対して学校内外でのさまざまな活動経験と意識に関する調査を行った結果からは、実社会に結びついた経験や主体的な学習経験は市民としての主体性の形成につながる事が考察できた(文献4)。これらからわかるのは、まちづくりや地域活動への参加が、今後の社会生活において「生きる力」につながるということではないだろうか。今後は、小学校段階から発展・継続する形で、中高生をまきこむような取り組みや仕組みづくりが求められるといえよう。それには、横浜市などの取り組み(注1)にみられるような、自治体の支援や地域のNPO活動の広がりが重要であるが、同時に、学校教育においても、より多くの若者にそのような活動の事例を知らせ、その意味や意義を実践的に学び考える機会を提供することも重要であるということになるだろう。

###### (2) 学校教育の実態と本研究の課題

学校教育において地域活動や環境づくりへの参画を学ぶ教科というと、一般には社会科

が思い浮かべられるかもしれない。しかし、小学校においては社会科で地域を学ぶ事が多いものの、中学・高等学校段階で身近な地域生活を積極的に学習項目に掲げているのは、教科としては家庭科である。学習指導要領においては大きく取り上げられてはいないが、中学校家庭科では「地域の人々の生活に関心を持ち、高齢者など地域の人々とかかわることができること」、高等学校においては「衣食住にかかわる生活文化の背景について理解させるとともに、生活文化に関心をもたせ、それを伝承し創造しようとする意欲を持たせる」と非常に大綱的ではあるが、地域や生活文化の主体的創造者になることが学習課題として述べられており、その可能性は小さなものではないと考えられる（文献5・6）。

すでに、家庭科の先進的な実践では、中高生が身近な地域の課題を発見し学びを深めるなかで、中高生が参画する地域活動へと発展させた総合的な学びが全国各地にみられる（注2）。そのいくつかは、総合学習をもまきこむような総合性を持って展開されているのだが、その学習活動の核には、地域の衣食住等の生活文化を学びの対象としてきた家庭科がある。いずれも、問題意識を持って自分たちの生活や地域の生活課題をみつめるところから、学習課題が発展しているのである。それは、家庭科が、個人の生活から出発しつつ家庭や地域の生活の質的向上をめざす家政学（生活科学）を学問的背景としている教科であるからだということもできよう。

筆者自身、家庭科にかかわりながら住環境形成の主体を育てることをめざし、参加・参画を重視した授業づくりを行ってきた。また、教科書や指導書の執筆、研究発表等を通してその可能性を提案してきた（文献7・8等）。

さまざまな取り組みが、徐々にではあるが成果として表れつつあると感じている。そして、このような学習が、結果として、今後のまちづくり・住環境づくりの主体を育て、子どもたちの人生の豊かさを広げるものになっていくと考える。そこで本研究では、中学・高等学校の家庭科におけるまちづくり・コミュニティ活動への参画に関する学習について、教師の教材研究・授業のもとになる教科書記述を分析し、その現状を把握し考察していきたい。

#### 4-1-2 研究方法

現在最も新しい平成19年度版の中学校「技術・家庭」教科書2種と高等学校家庭科科目「家庭総合」の教科書9種を対象に、まちづくりやコミュニティ活動への参画を促す記述を抜き出して表にまとめる。その場合、短いものは記述をそのまま抜き書きするが、長文の場合は抜粋し、簡単な解説を付す。本文以外に、フィールドワークや調べ学習を求める記述、コラムなどについても抜き出す。

そのうえで、「まちづくり」「地域づくり」「参加」「参画」およびそれに類することばにはアンダーラインを引いた。その結果を分析・考察する。

表4-1 分析した教科書名（出版社）

中学校	
1	技術・家庭<家庭分野>（開隆堂）
2	新しい技術・家庭<家庭分野>（東京書籍）
高等学校	
1	「家庭総合 生活に豊かさを求めて」（第一学習社）、
2	「家庭総合－出会う・かかわる・行動する」（教育図書）
3	「家庭総合21」（実教出版）
4	「家庭総合－明日の生活を築く－」（開隆堂）
5	「明日を拓く 家庭総合」（大修館書店）
6	「生活の創造をめざして」（大修館書店）
7	「パートナーシップ」（実教出版）
8	「自立・共生・創造」（東京書籍）
9	「新家庭総合：ともに生きる、くらしをつくる」（教育図書）

表4-2 中学校技術・家庭科<家庭分野>教科書記述

	まちづくり・参加に関する教科書記述 (一部、省略部分は…とした)	本文以外の関連記述 (抜粋したものに加え、*として解説付記)
1	<p><b>家庭生活と地域</b></p> <p><b>1 地域の中で育つ</b></p> <p>地域の人などの支え：地域には子どもから高齢者まで、生活の異なる人たちが生活しています。生活を快適にするために、互いに支え合っています。</p> <p>人々は、地域でさまざまな活動を担っています。…また、最近、新たに近隣の人びととのつながりをつくり出す試みが、各地で始まっています。私たちは、地域の中でいろいろな人びととかかわり、活動に<u>参加</u>することで、成長することができるのです。…</p> <p><b>2 地域でつながる</b></p> <p>地域の活動を維持していくためには、さまざまな工夫や取り組みが必要です。</p>	<p>図：地域での活動の例（①サッカーチームのサポート、②自宅を開放した子ども文庫の世話、③田植えの体験、④子どもの悩みの電話相談）</p> <p>◆調べてみよう：○地域の活動や取り組みにはどのようなものがあるか。○地域（学校区内）には、どのような活動が行われているだろうか。○活動している人にインタビューしてみよう。活動内容・意義や困っていることや改善したいこと、活動維持に必要なことなどを聞いてみよう。</p> <p>◆[お祭りの組織委員長をしている近所の人に聞きました]*聞き取った内容の紹介</p> <p>◆参考：中学生・高校生の施設「ゆう杉並」*解説と施設の写真紹介あり</p>
2	<p><b>地域の人々とふれあおう</b></p> <p>暮らしやすい地域：…誰もが暮らしやすい地域にしていくためには、そこにらす人びとが、地域の問題について考え、解決に向けて、世代をこえてみんなで取り組む必要があります。自分が取り組めることがないか、考えてみましょう。</p> <p>次の資料は、中学生が地域の活動にどのくらい<u>参加</u>しているかを示しています。これまでに参加したことがあれば、その内容や感想などを、みんなに話してみましよう</p>	<p>◆実習例：暮らしやすい<u>地域づくり</u>に参加しよう</p> <p>◆教えあいつこ交流会：*北海道厚岸町の「情報館」の活動事例を紹介。</p> <p>◆ひとくちメモ：「地域の茶の間」（新潟）の紹介</p>

表4-3 高等学校家庭科科目「家庭総合」教科書記述

	参加に関する記述の抜き書き・概要 (太字は節・項などのタイトル。抜粋したものに 加え、*として解説を付記)	本文以外の関連記述 (抜粋した文に加え、*として 解説付記)
1	<b>地域コミュニティとまちづくり</b> *本文は特になし。	◆話題： <u>まちづくり</u> への 高校生の参加 *岐阜県の高校生が地域の 人とともに、まち歩きや福 祉マップ作成などのまちづ くりに参加している例の紹 介。
2	<b>あなたが参加するまちづくり</b> 「都市計画を考えるのは専門家だけではない。…まちの実態や問題点、解決すべき課題をしっかりと調査することも大切である。まちづくりは民間と行政の協力によってなされるものである。下のコラムのように地域の緑化や景観に力を入れたまちづくりもあるが、…福祉のまちづくり、地域の防犯に力を入れたまちづくりでもいいだろう。…積極的に発言し、未来のまちをつくっていこう。」 <b>地域コミュニティの一員として</b> 「あなたは日本、そして地球の共同社会のメンバーである。…高校生であっても地域コミュニティの一員であり、その役割をになうことを期待された存在なのである。…」	◆ワーク：まちの実態を調べる「点検マップ」をつくってみよう ◆コラム：①プラムおじさんの <u>まちづくり</u> ②主婦たちの <u>村づくり</u> ◆コラム：岡山県津山市での取り組み例（つやまエコシステム）
3	<b>まちづくりに参加する</b> 「地域の住環境や住まいと周囲との調和など…、これまで行政主導による対応が中心であった。しかし、最近では公園や遊び場・学校の計画などに子どもの意見を取り入れたり、地域住民の意見を取り入れたりする事例も増えてきた。 <u>まちづくり</u> 、特に身近な市町村の計画は、住民が積極的にかかわっていくことでよりよい内容に変えられる…。若者が <u>まちづくり</u> に主体的に <u>参加</u> することで地域に活気も生まれるし、参加者の人格形成にもつながる。多くの地域で、住民の自主的な組織の活動が生まれ、地域の特性に合った <u>まちづくり</u> が展開されている。…独自の条例を制定し、こうした動きへの支援を行っているところもある。また、非営利の市民活動団体が <u>まちづくり</u> の分野でもさまざまな試みを始めており、海外でこれまでみられたような自主的な地域活性化の活動、	図：参画のはしご ◆ワーク：① <u>住まいやまちづくり</u> には、どんな人がどんな立場でかかわっているのか調べよう②あなたの住んでいる地域の <u>まちづくり</u> 組織の活動を調べてみよう。できればかかわっている人の話を聞いてみよう。 図：「もっとまちを知ってほしい」と浴衣でまちを案内する試み／多彩なまちおこしを試みる「NP◆法人粋な <u>まちづくり</u> 倶楽部」（東京新宿区神楽坂）

	まちづくり政策や計画の提案独自の住宅供給などの活動がようやく日本でも始まりつつある。」	
4	<p><b>住民参加のまちづくり</b></p> <p>「地域の活性化や地域環境の整備を目的とし、住民が自分たちの住むまちを一緒に点検したり、話し合ったり、さまざまな作業を行うことを通して…具体化していくことをまちづくりという。まちについての住民の考えを実現する方法には、住民同士の自主的な取り組みによるもの（まちづくり憲章やまちづくり協定など）と法律や条令に基づく…（地区計画と建築協定など）とがある。一般的には地区を対象としたまちづくり…地元住民の組織を「まちづくり協議会」という。建物やまち並みなどハード面だけでなく、…ソフト面を含んだ活動が行われ、地域住民は子どもからお年寄りまで誰でも参加できる。住民たちが考えて行動したまちと、行政まかせのまちではどんどん差が広がっていく。まちとのかかわりは、新たに建物を建てたり、イベントを計画したりするときだけでなく、まちが日ごろどのように維持・管理されているか、その仕組みを考えることから始まる。日常的に住民同士でコミュニケーションをはかり「こんなまちにしたい!」という思いをみんなで共有していると、さまざまな取り決めや計画などが円滑に進む。自分の意見でまちが変わることの醍醐味を子どものころから経験させたい。」</p>	<p>図：中高生への情報誌作成の呼びかけ（世田谷まちづくりセンター編のポスター）</p>
5	<p><b>住民参加のまちづくり</b></p> <p>「歴史や文化がまちをつくり、個々の住居がまちなみを形成し、住む人の生活を育ててきた。まちや住居については、建築基準法や都市計画法にその指針が示され、土地利用の用途や建築物の形態などが決められている。しかし、それだけで地域の特性をいかし、快適で美しいまちなみが形成されるわけではない。子どもが安心して遊べるまち、高齢者や障害者が気軽に出かけられるまち、緑あふれる美しいまちなど、それぞれのまちの歴史や文化、景観、自然などを大切にしたい、住みやすいまちにしていくためには、住む者の立場から意見を出し合い、協力してまちづくりに取り組む必要がある。」</p>	<p>◆フィールドワーク：あなたのまちをさらに暮らしやすくするための課題を見つけよう</p>

6	<p><b>住民参加のまちづくり</b></p> <p>「まちや住居については、建築基準法や都市計画法にその指針が示され、土地利用の用途や建築物の形態などが決められる。しかし、それだけで、魅力あるまちなみが形成されるわけではない。それぞれのまちの歴史や文化、景観、自然などを大切にしたい、住みやすいまちにしていきたいためには、住む者の立場から意見を出し合い、協力して<u>まちづくり</u>に取り組む必要がある。</p> <p>私たちは、国や自治体の住宅・住環境政策に関心を持ち、積極的に住環境づくりにかかわっていきようにしたい。」</p>	<p>◆実習：まちの点検をして、意見交換してみよう</p> <p>図（写真）：<u>住民参加のまちづくり</u>の例＝コーポラティブハウス、<u>まちづくり</u>ワークショップ、地域住民で守るまちなみ</p> <p>*本書では、「地域社会で活動しようー家庭クラブ活動ー」という項で、地域の生活問題を発見し、問題解決へ共同的に取り組もうとはたらきかけている。</p>
7	<p><b>近隣と住まい方のルール</b></p> <p>「…快適な住生活の実現には、居住者相互の信頼関係とルールの確立が必要になる。意識啓発し、自覚していくためには、居住者が主体となって、居住地でのさまざまな取り組みやはたらきかけが重要な意義を持つことになる。…時代の変化に応じて、居住地の再生や改善課題に積極的にかかわっていくことが大切である。」*本書は、参加・まちづくりというキーワードが唯一明確にされていない教科書であった。</p>	<p>図：まちづくりの課題とプロセス（東京・世田谷区）</p> <p>◆act：まちの成績表をつくってみよう*「問題点マップ」と改善案の発表によるまちの点検活動のすすめ</p>
8	<p><b>住民参加のまちづくり</b></p> <p>豊かな住生活は、一戸の住まいだけで成立するものではなく、周囲との調和やまち並みと深くかかわっている。わたしたちは自分が住む地域の環境づくりに積極的にかかわる必要がある。環境づくり（都市計画）は長い年月をかけて進めるものである。地域の人々が地域全体の生活環境について考え、話し合い、知恵を出し合っ解決策を見つける方法もある。また、身近な公園づくりや集合住宅の計画、商店街の再生などを共に考えることにより、地域のコミュニケーションが活発になり、人間関係を深めることにもなる。これからは、市民と行政が共に進める<u>まちづくり</u>が各地で活発に行われることが望まれる。</p>	<p>◆コラム：<u>住民参加の公園づくり</u>、公園管理（東京都武蔵野市の木の花小路公園）</p> <p>図：<u>まちづくり</u>センターの仕事の例（東京都世田谷区）</p>

9	<p><b>住民がつくる、地域でつくる</b></p> <p>「住宅や年の計画的な整備を進めるために、建築基準法や都市計画法など、さまざまな法制度が用意されている。しかし、かかえる問題や望まれる住環境は、地域それぞれである。それを実感しているのは住民であり、本当に住みやすい住環境をつくるには、住民の参加が欠かせない。</p> <p>最近では、住民が主体となって、行政や専門家とともに地域づくりをする地域が増えてきている。このような活動を<u>まちづくり</u>といい、この活動を通して地域住民のコミュニティ意識も高まってきている。<u>まちづくり</u>の実践は、地域それぞれの特色をみせながら、全国的に広がってきている。私たち高校生も、地域の一員として何ができるか考えていきたい。」</p>	<p>表：住民と行政が協力して行う<u>まちづくり</u>のメニュー</p> <p>*いえづくり、みどりづくり、なかまづくりの3点から例示。</p> <p>◆福祉 EYE：みんなにやさしい<u>まちづくり</u>～高校生の車いす体験～※福井県あわら市の NPO によるまち中での体験を紹介。</p> <p>◆課題研究：福祉マップ、エコマップをつくり、まちを見直してみよう</p> <p>発展学習：安全マップをつくってみよう</p>
---	---	---

参考

### 中学生・高校生の施設「ゆう杉並」すぎなみ

東京都杉並区つうしやうに通称「ゆう杉並」と呼ばれる区立の児童館があります。

1997年にオープンしたこの施設は、建設計画の段階から中・高校生が参加し意見が取り入れられました。建設後も「中・高校生運営委員会」がイベントを企画・実施しています。

そのため、ホールや体育館、集会室、工芸室、調理室、鑑賞コーナーや学習コーナーなどに加えて、スタジオやフリーライミングボードなどもあり、中・高校生による幅広い活動が行われています。3つあるスタジオには、ドラムセットが設置されており、バンドの練習が可能です。ホールは、ライブやダンス・演劇などの表現の場として利用されています。

開館時間は朝9時から夜9時までですが、無料で利用できることもあり、現在（2004年2月）は、1日に約230名が利用しているそうです。




イベント・ホールで発表する中・高校生(上)  
と掲示板(下)

※記載教科書『技術・家庭<家庭分野>』（開隆堂）

図4-1 中高生の参加・参画に関する教科書記述例

#### 4-1-3 考察

表4-2、4-3をみてわかるとおり、家庭科においては、学習指導要領でのごくわずかな記述を足がかりに、中学・高等学校いずれにおいても、まちづくりやコミュニティ活動への参加・参画に関わる記述が相当量になり充実していることがわかる。おとな中心のNPO活動に目を向けさせるような記述や写真もあるが、中高生の参加・参画にかかわる活動事例も、<コラム>や<参考><話題>などの形で写真などを用いて紹介されている(図4-1)。

中学と高等学校での内容の違いをみると、学習指導要領とのかかわりから、高校では「住生活分野」において記述が見られるが、中学では、「住生活分野」の学習としてではなく、「地域生活とのかかわり」に焦点を当てた学習として記述がなされている。高等学校では、大部分の教科書が住生活分野の最後に、まちづくりやコミュニティづくりに主体的に参加しよう、という内容でのまとめを持っている。

学習分野は異なるものの、中学校・高等学校のいずれにおいても、まちづくり活動にかかわる人から聞き取り調査をするような課題や、参加を促すような記述が多くみられ、家庭科において地域活動参加を促す学習の可能性が大きく広がっていることがわかる。

より詳細に見ると、中学校教科書は2種類あるが、中学校教科書1では、中学生自身を主体として学習を深めていけるような内容構成となっている。中学生が行うインタビュー活動のプロセスが丁寧に示されている。また、中高生の参加によってつくられた施設の事例紹介もあり、身近なこととして感じられるよう工夫されている。その一方で、価値を押しつけるような表現は意識して押さえられているようである。したがって、比較的初心者の教師にも授業として取り組みやすいのではないかと思われた。一方、教科書2では、ストレートに「参加しよう…」と呼びかけるものとなっており、中学生の地域参加の実態をデータで示し、話し合えるよう工夫されている。学習方法は異なるが、どちらも、受け身でない主体的な授業展開を願って書いている執筆者の気持ちが伝わってくるものといえる。

次に、高等学校教科書をみていく。高等学校では、それぞれの教科書ごとに、特徴がみられる。教科書3のようにインタビュー調査などをすすめるものもあれば、まち点検マップを作成して討論をさせようとしているもの、事例の写真を紹介するものなどさまざまである。教科書4などは、記述内容は多く詳細であり、執筆者の強い思い入れが感じられる。しかし、大人の目線が強く感じられる書き方であり、知識を伝達するだけではない主体的学びをどう展開するのか、教師は悩まされるのではないかと思われた。実践的・体験的に学ぶという家庭科のねらいを達成するために、どう学びを展開すべきなのか、今後の可能性に期待がかかるとはいえ、授業展開は容易でないといえよう。

しかし、課題はあるものの、全体を通して、中学・高校生時代に、このような内容を学ぶ機会を持つことの意味はやはり大きいといえるだろう。改訂に時間がかかり、小回りのきかない学習指導要領に比べ、教科書は短期間で時代の変化や執筆者の問題意識を反映し



てその内容が変わっていく。今回の家庭科教科書の分析結果からは、家庭科教育にかかわる人びと（執筆者）の大きな期待を読み取ることができた。

中学・高校生時代は、ともすれば地域や周囲の大人との交流に苦手意識があったり批判精神ばかりが旺盛になり、また逆に異世代や地域に無関心になる世代でもある。この時期の中高生たちに、別の価値観や生き方を提示し、さらに体験を促すことは貴重で大切なことであると思われる。筆者の以前の調査では、日本の高校生の社会参加経験や機会の少なさが問題であることが指摘でき、参加経験は問題意識や主体性の育成に繋がる可能性も示唆された（文献4）。わずかな学習機会であっても、多くの若者が生きた情報に触れ、経験を持つことで、将来にわたる地域への主体的参加が広がることが望まれる。

今後の課題としては、これらの記述が、実際の中高生にとってどのくらい納得のいく意味ある学びとして実践されるのか、ということであろう。それぞれの記述内容が中高生にとって十分に理解し納得できるものといえるかの吟味・検討も必要であろう。このような学習は、一步誤ると、規範意識・理想の押しつけに陥ってしまう危険性もある。教師がどのくらい子どもたちの身近な地域に目配りできているか、教師の問題意識や教材づくり・授業づくりの力量によって学習効果に大きな違いが出ることが予想される。

したがって、今後は先進的实践例をもとに、具体性ある授業づくりへの提案を活発に行っていくことが求められる。そして教科書にもさらなる内容や記述の工夫が求められるといえよう。

※本稿は、住宅総合研究財団『「住まい・まち学習」実践報告・論文集9』（丸善）2008 に掲載された。

<注>

1) 横浜市では、自治体とNPO団体がネットワークを組んで「ミニヨコハマシティ研究会」を立ち上げ、研究会や各地の視察を重ねながら、小学生から高校生まだが参画したミニヨコハマシティづくりの活動が行われた。ドイツで約20年の歴史を持つイベント「ミニ・ミュンヘン」を参考にしたものといえ、近年、類似の活動が日本でも実施されている。

(2007.10.17 シンポジウム資料：ミニヨコハマシティ研究会「ミニヨコノキセキ」参照)

2) 最近の家庭科実践報告から一部紹介する。例えば、今年の全国教育研究集会（日教組）で報告され注目された家庭科の授業実践は、地域の農産品であるイチゴを使ったお菓子を開発した成果を地域の大人や商店に向けて発信し、実際に商品として販売してもらったという北海道の中学校での実践だった（授業者は川上美穂教諭）。同様に、三重県の中学校の実践では、地場産業の松阪もめんの仕入れから始めて授業で小物づくりを行い、実際に地元土産物店で販売活動を行い収益をあげ、それで途上国支援の募金が行われていた（授業者は西村朱美教諭）。いずれも地域とつながり発信するまちづくり学習であり、同時に消

費者教育であり、生徒の「生きる力」を育む実践であった。

※これらの実践の一部は、『日本の教育第57集』（アドバンテージサーバー，2008）に収録されている。

<参考・引用文献>

- 1) 妹尾理子，平井なか：住まい・住環境に関する教育研究の動向－日本建築学会大会梗概集他，関連学会における論文分析から－，日本家政学会誌，2003
- 2) 新田瑠衣，篠部裕：総合的な学習の時間におけるまちづくり学習の実践に関する基礎的研究，「住まい・まち学習」実践報告論文集8，住宅総合研究財団，2007
- 3) 妹尾理子，小澤紀美子：コミュニティ活動と住環境意識に関する研究，東京学芸大学紀要 第6部門 第41集，1989
- 4) 妹尾理子：高校生の環境問題に関する経験と意識に関する研究，学校教育学論集1，1999
- 5) 中学校学習指導要領（平成11年9月），文部科学省，1999
- 6) 高等学校学習指導要領（平成12年3月），文部科学省，2000
- 7) 妹尾理子：生徒・教師・市民がつながる環境学習，子ども・若者の参画－R. ハートの問題提起に応じて－，萌文社，2002
- 8) 妹尾理子：住環境リテラシーを育む－家庭科から広がる持続可能な未来のための教育，萌文社，2006

## 4-2 建築博物館、エコミュージアム等における取り組み

博物館の基本的機能の一つに、展示を中心とした教育普及活動がある。常設の展示室を持つ博物館では企画展示毎に教育プログラムを組み合わせることがあるが、必ずしも展示質の展示に関わらなくとも、自立した教育プログラムを展開しているところも見られる。いくつかの博物館では、様々な中高生対象の学習プログラムが組まれるようになってきたが、中でも建築博物館や現代美術館等では、建築やまちづくりに関する展示教育活動が行われているところがある。また、博物館活動において地域全体に広がりをもつものでは、その地域の全体の遺産を保全し学習するエコミュージアムとして発展しているところがある。社会教育機関として地域展開をしているこれらの博物館における事例から、とくに中高生の世代に対応したプログラム等についての先進的な事例を調査した。

### (1) 建築博物館等における子ども・若者の地域学習の事例

各地の建築博物館の活動において、展示やアーカイブの保存だけではなく教育活動は重要な役割を持っている。多くは、その地域固有の建築の歴史を理解するための活動がなされているが、そのためには気候風土や生活習慣、建築家やデザイナーの歴史などが展示されているが、中には、地域社会への市民の関わりをうながすような活動もなされている。

#### ① スtockホルム建築博物館・近代美術館 (Arkitekturmuseet och Modernamuseet)

ストックホルム建築博物館は、常設展示の片隅に教育用のワークショップスペースを持っている他、専門図書館と図面資料庫およびその複写サービスなど、教育用に配慮された機能を総合的に持っている。ワークショップは主として小学生程度の子どものためのプログラムが中心となっているが、地域のまち歩きツアー、建築探検のツアーなどが企画され、それらには、一般成人も含まれるし、中高生の参加も多い。とくに近代の住宅団地の歴史などを学習するツアーなどが豊富に企画されている。ストックホルム市内は地区に応じて開発された時期が異なり、それぞれの地区を巡ることで、それぞれの時代の住宅や都市開発の特徴が視覚的に理解しやすい。博物館を起点として、地域の建築や地域開発の歴史を学習することで、現在の姿を形作ってきた近代の建築行為を地域全体で理解することができる。歴史的建築物だけではなく、近代化の過程における生活の変化と組み合わせた理解をうながすようにプログラムが工夫されている。

建築博物館は同じく国立の近代博物館と複合した建築物となっているが、この近代美術館では、さらに、とくに未来の社会を形成することを視野にいたした教育プログラムに力を入れている。20~30人の高校生を対象に、プロのアーティストと共に3ヶ月間、集中して協働作業によって作品を作り上げるというティーンエイジャーのためのプロジェクト(Zon Moderna)を行ってきた。館長のLars Nittveによると、そのためには特別な配慮が必要で

あり、まず予算を十分確保し、教育のためにスタッフを配置し、さらに、このための専用の空間も用意した。高校生たちはアーティストと一緒にあって、最終的に展示やパフォーマンスの企画を成し遂げるため、最初の企画やロゴ、パンフレットの制作から始まり、展覧会のための作品を作り、その発表を自主的におこなうものである。このことによって、キャリア教育ともなり、衣類のデザインのプロジェクトを終えた高校生は、卒業後、自らそのようなワークショップの店を開くなどを実現した者もあり、職業としてのその後の人生につながっている。このような、密度の高い活動を行うことによって、地域社会における若者の位置を自覚させ、単なる知識や技術を習得するだけではなく、自立してその社会に参加し向き合う能力を身につけるための学習となっている。

## ② ウィーン建築センター博物館 (AzW : Architekturzentrum Wien)

ウィーン建築センターは美術館の集積した複合施設群の一部として設置された博物館機能を持つ組織である。この中には教育部門があり、子どもから大人までの教育プログラムを持っている。

この中で、学校の制度向けの様々な活動を展開するに当たっては、教育部門の責任者の Alexandra Viehhauser は、建築や街を題材にすると統合的な学習が可能となるので、建築博物館は教育において格好の材料となる、という。子どもたちへの教育としては、ティーンエイジャーは、一面的ではなく多面的な把握や比喩的な理解やモデル的思考が可能なので、例えば、建築立体の模型を果物で作成し、後でそれを食べるというような行為などを組み合わせると効果的であるという。この建築博物館における教育プログラムは、学校との連携による Semester プログラムと、一般公募によるサマーワークショップとの2種類が中心となっている。前者は、教師に呼びかけて、学級単位で学校の授業の一環として行っていく方式である。カリキュラムに関しての教師とのコミュニケーションが重要となっている。一方で、後者はイベント的な意味が大きく、企画展との関わりや新しい試みを行うこととなっている。

街の建築物を訪ねるプログラムもおこなっており、これは学校における教科目との関わりについてみると、美術、地理、生活、社会、理科、歴史、などに加えて、語学科目との関わりもあるという。例えば、英語の授業では、来訪者とのコミュニケーションの取り方を習うので、観光客などに対していかにその地域の特性や建築を説明するかが重要な点となる。様々な教育の領域において、このような建築や物理的環境、人工的環境について学ぶ地域学習は、総合的な学習の基礎として必要かつ効果的な手法と言えるのではないか。

## (2) エコミュージアムにおける子ども・若者に対する地域学習の事例

### ① 地域の産業を訪ねる

エコミュージアムでは、地域における多くの伝統的な産業を訪ねやすく整備することによって、大きな博物館の屋内展示施設に押し込められた展示物だけではなく、広がりをもった地域全体をまるごと学ぶことを可能にすることができる。エコミュージアムは地域に分散されている多くのサイトがネットワークを組むことによって、全体として有効な総合学習機関になるのである。それぞれテーマを持つ各サイトには、こどもたちは個人ではもちろんのことクラス単位でも見学に訪れている。例えば、フランスの老舗、フルミ・トレロン・エコミュージアムでは、地域の伝統的産業のひとつである吹きガラスの工場を運営しており、リタイヤした職人を博物館のために再雇用、そこにボランティアの解説員をつけて、とくに子どもたちの来訪に対応している。やはり学習の場としては、臨場感のある施設体験が有効であり、そのために足を運ぶことが重要な手続きなのである。



写真4-1

### ② 地域の歴史を知る

イタリア国内のエコミュージアムは、いま急増中である。都市近郊の町でも地域の文化を再発見するための活動を自治体が熱心に進めているところである。そのひとつ、フレイダーノ・エコミュージアムは、人口 48,000 人の町で、地域の産業を支えた工場を改築し 2002 年 9 月にオープンした拠点施設をもち、そこではとくに水を利用した産業や生活の展示をしている。この施設では地域内の 13 の小学校が入れ替わりたちかわり来訪し利用している。この地域では、昔から運河・水路が活用されていたが、20 世紀には下水として利用され暗渠化されていた。そのふたをはずして、川を自分たちの文化として呼び戻そうとしている。その理解を深めようと、水路のモデルをこの拠点施設の庭に洗濯場や水路として教材的に再現している。地域ではグリーンハイウェイ構想という公園など緑地とリンクした地域全体の計画があり、学校の子供たちは、ここに訪れて展示で学習した後、川沿いを歩くのが一般的なプログラムとなっている。

### ③ 古代を体験する

デンマークのユトランド半島の中西部、フィヨルドの干潟の周辺の地域に広がっているスキヤーンとエヴァーの2つのコミューンにわたる地域にあるのが、ベストユラン・エコミュージアム。ここでは、古代村と言われる施設がひとつのサイトになっており、ここでは「鉄器時代の住居における生活体験プログラム」が行われている。紀元0年当初の再現住居で、1週間、一家族単位で宿泊体験、生活体験ができるプログラムである。インストラクターに古代生活の手ほどきがされて、家族全員で古代住居に泊まり、調理をし食事をする。宿泊と食材、衣料は博物館側から無償で支給・貸与されるが、そのかわり、日中の開館時間帯には、コスチュームをつけて生活し、博物館の生きた資料として自ら見せ物になるのである。このような体験は、学術的に裏付けのある再現環境にもとづいた活動となっている。例えばこの古代村で放牧されている牛の種類は、交配して古代の牛の再現を試みたものである。これまでのところ、体型や大きさはほぼ再現できたと思うが、まだ角が大きすぎると言う。馬についても、時代に適合するように、アイスランドからの馬とポニーとを掛け合わせた小さい馬を飼育している。周辺の植生も当時の環境を再現することに博物館としての研究の成果を反映させている。

### ④ 子どもたちへの学習のための道具と環境

地域を知るための学習のためには、子どもたちの利用に適した道具が必要となる。イラスト入りのガイドブック、そこにはクイズ形式のワークシートなどが盛り込まれている。地域を歩きながら発見するための工夫がされている。フランスのエコミュージアムでは地域の動植物や建築物等についてのワークシートやパンフレットなどが豊富である。また、エコミュージアムでは博物館の展示施設にこだわらず、スタッフも教室も移動して地域環境の中で学習活動をおこなう。このために、スーツケースに入れた移動式の博物館学習教材のパッケージが用意されていることが多い。

また、学習の場としての学校や教室という空間は、どの世代にとっても経験のある空間として、何らかの記憶の接点が得られやすい。教室を保存・再現したり、学校建物自体を活用したりすることは、エコミュージアムでは比較的常套手段のように行われている。

### ⑤ 少数民族の誇りを次世代に伝える

中国ではここ数年、各地の州政府で少数民族の保護に力を入れている。観光政策でもあるが、その伝統的集落をまるごと保存し、伝統芸能や文化産業生活の継承を目的にしてとくに子どもたちへの教育に力を入れている。このために、博物館、学校校舎、診療所、近代化された住宅などの建築物による新しい町を近傍に建設するという大がかりなプロジェクトをエコミュージアムとして実現しはじめている。これによりもともとの集落全体は凍

結保存され、子どもたちと高齢者がそこでテーマパークのように伝統的な生活を演じていく。しかしここで重要なことは、伝統的な踊りや音楽の修得と民族文化の意味を学び、その表現として披露しているということである。決して見せるために演じているのではなく、自分たちの自文化の理解のために学習の手段として演じるのである。

貴州省のソーガ・エコミュージアムは中国で最初のエコミュージアムと言われているが、山地のミャオ族の集落空間をまるごとそのまま保存し、生活や文化を保存しており、多数の子どもたちが、伝統的な音楽や踊りを自らの民族の誇りとして学び伝えている。祭りやイベントの際には、村中の人々がそれを楽しみ、民族衣装の刺繍など高齢者から子どもに伝承されるべき文化は多い。

広西チワン族自治区のペイクー・ヤオ・エコミュージアムは、やはり独特の民族衣装に身を包み、山間の集落での生活を維持しつつ、野生的な音楽や踊りなどの文化の保全継承に力をいれている。

#### ⑥ エスコーラ・ジ・サンバ 放課後の学校

リオデジャネイロ州のサンタクルス・エコミュージアムでは、サンバ学校もエコミュージアムの重要なひとつの部分である。体育館のような大きなホールにおいて、カーニバルに向けて老若男女が毎夜練習をしているのだが、そこは地域社会の交流の場であり、近隣意識の結束を固める場であり、少女達の晴れの舞台でもあり、世代間に知恵を伝承する場でもあり、何よりそこで展開される踊りにはコミュニティのアイデンティティを強化する意義がある。そして、夜な夜な練習され演じられるサンバの演目には、インディオや奴隷性に触れたブラジルの歴史をストーリー化したものがあって、ただ利他的に享乐的に歌って踊るものではないのだ。子ども



写真4-2

もたちが学校を終えて、放課後にここで踊りを学ぶこと、このことが自分たちの身体を言葉による歴史学習となっている。踊りと音楽の渦の中に巻き込まれていくのは地域社会の歴史、アイデンティティーである。

サンタクルス地域にある中学高校では、同じくブラジルの歴史を劇として自ら演じ、長い過去の歴史に位置づく存在としての自分を確認するエコミュージアムのイベントが行われており、また、高校生たちはイベントで現在の自分たちの姿を問い直す「私のモナリザ展」を開催した。これも人に見せるための展覧会ではなく、自分たちのために行うパフォーマンスのひとつなのである。

#### ⑦ ローカルアジェンダづくり

スウェーデンの農村地域にあるネドレ・エトラダレン・エコミュージアムのひとつのサイトに、農家の納屋を利用したアジェンダ 21 ハウスがある。これは、地域のローカルアジェンダ 21 を考えるための会合と学習活動のための場所である。何よりもこの展示は、地域の家からの持ち寄りで作られた手作りの展示で



写真4-3

ある。そのそばには、この地域の農産業として可能かどうか実験的に試みているハーブ園もあり、エコミュージアムは過去の歴史を知るだけではなく、現代の地域生活を自ら形成していく視点をもつものに他ならない。

また、パリ近郊のフレンヌ市は、60年代から住宅開発が進んだ人口25,000人ほどの地域で、現在はほとんどが新住民、しかも様々な民族の移民が約1割含む地域である。住民の5人に一人は祖父母に異国の人を持つと言われている。この地域に、かつて一軒だけあった農家の建物が保存されエコミュージアムの本部になっている。周囲は近代の集合住宅などが建ち並ぶ。ここでは、近年の都市化を焦点にあて、住民が自ら地域をつくるための様々な働きかけをしており、多くのエコミュージアムや博物館が過去のものの収集や保存に力を入れているのに比べ、ここでは地域にある近代の建築物も積極的な対象としている。エコミュージアムの主催する地域めぐりツアーの企画の中には、近代建築物である集合住宅も対象とし、その住民の組織による案内や対話なども含まれている。



### ⑧ 社会的インクルージョン 若者文化のとりこみ

パリ近郊のフレンヌ・エコミュージアムにおけるユニークな活動のひとつには、「想像のアトリエ」と呼ばれる子供対象の教育ワークショップがある。これは、写真などを活用したもので、子供たちにカメラをわたし、自分と家族などテーマを与え、写真やそれによる小説を作らせたりするものである。親に対する不信、家族不在の住宅風景などが写真に表れており、子供の身近な環境の捉え方を展示し合うことによって、現代の生活と地域の抱えている課題を住民が自覚し再認識するということを目論んで様々な活動が工夫されている。

フレンヌ・エコミュージアムでは、1991年に若者文化としての「Hip-hop」を取り上げた。これまで既存の博物館ではなかなか対象としてこなかった世代・分野をとらえたのである。若い世代が自らこの企画に参画し、ブレイクダンス、ラップ、グラフィティ（落書きアート）などを通じて表現行為をするものである。

これは、社会的・文化的・学問的・職業的に排除されやすい若者に焦点をあてて、積極的に取り上げることによって、社会的マイノリティの排斥に対抗しようとして企画された。Hip-hop やグラフィティは、若者のアイデンティティ喪失に起因し移民の多い都市近郊における特徴でもあると分析している。とくに移民の二世としての世代が、自分の住む地域にアイデンティティを感じることができるようになることが、エコミュージアムの活動の目的としている点でもある。

エコミュージアムは地域の社会的インクルージョンを目標に、住民が地域づくりのために力を合わせる機運を高める役割を持つ。若い世代を地域に疎遠な存在にしないために積極的なはたらきかけをすることの重要性を教えてくれる。



写真4-4

## (3) 日本のエコミュージアムにおける子ども・若者の関わり実態

### ① 調査の概要

日本全国でウェブサイトや資料などでこれまでに情報の得られているエコミュージアムをピックアップし、その活動の内容や考え方について調査を実施した。

対象は、ウェブサイトに連絡先が公開されている全国のエコミュージアム・フィールドミュージアム・田園空間博物館を抽出した結果、117 件選出できたので、これらを対象に郵送でアンケート調査を行った。

調査の時期は、2008 年 11 月 13 日にアンケートの発送、同 11 月 26 日にアンケート返信締切とした。この結果、回答は以下の通りに得られた。

調査票回収数：回収数 54 件【非該当であるとの回答 8 件を含む】

実質回収数：46 件【実質回収率 42%】

さらに、神奈川県内のエコミュージアム実践団体に対しては、実地訪問しヒアリング調査を行った。

## ② 子ども・若者のためのプログラムの実施状況

アンケート項目としては、活動や理念のチェックリストの他に、「エコミュージアムの持続可能性（サステナビリティ）について」との大項目を設定して、以下の 6 項目の質問をした。

- 1) 子供のためのプログラムはありますか？
- 2) 学校教育との協同はありますか？
- 3) 中高生をターゲットとした取り組みはありますか？
- 4) 18 歳未満の子供たちの参加を有効であるにとらえますか？
- 5) 20 代・30 代の若者に活動に興味を持たせ後継者として育てる努力を行っていますか？
- 6) 地域の人々が活動に興味を持つ窓口となるようなイベントはありますか？

## ③ 子ども若者へのプログラムの実施状況と取り組みへの考え方

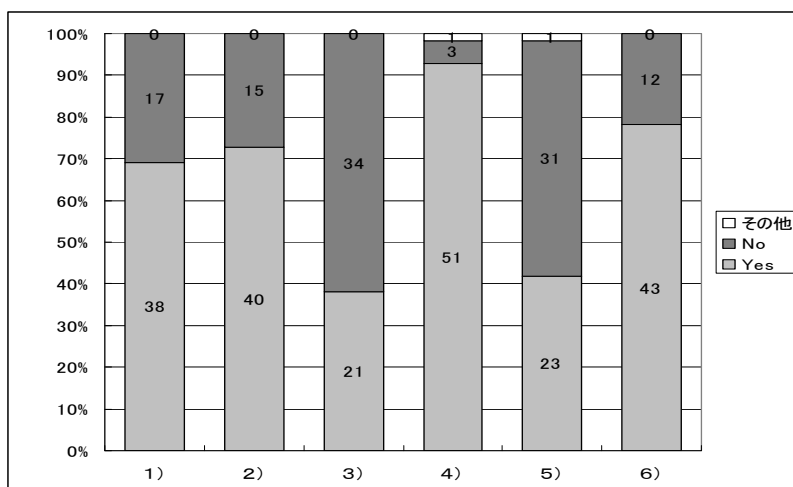


図 4-2 エコミュージアムの持続可能性の項目における回答の割合

図4-2より、4) 18歳未満の子供たちの参加を有効であるにとらえますか？の質問に対し、有効であるという回答が90%を超えた。実際、1) 子供たちに対するプログラムの実施と2) 学校教育との協同については、共に約7割が実施されていた。一方、中高生に対してのプログラムとなると、40%弱と約半減してしまう。

このことから、18歳未満の子供たちへのプログラムの有効性が十分に理解されていることが分かり、一般的には、より若い小学生以下の子供たちへのプログラムが充実していることがうかがえる。

また、『三浦半島まるごと博物館連絡会』事務局の一端を担う「かながわ国際交流財団」からは「こどもを参加させるためには、こどものためのプログラムが必要であり、大人と一緒にプログラムに参加することは難しい。まだまだ、大人の参加が充分でない中、まずは、大人のためのプログラムを実施し、実際に活動をする年代に発信し、知名度を上げていくことが必要である。」との回答を得た。

歴史の浅い日本のエコミュージアムにとって、子供に対するプログラムの大切さが理解されつつも、実施できるバックボーンが完成していない状況があるもの理解できる。

また、さらに年齢の高い層に対しての質問 5) 20代・30代の若者に活動に興味を持たせ、後継者として育てる努力を行っていますか？に対しては、約40%が実施していると回答している。若者の参加に関しては、「仕事や家庭があるので『仕方ない』」とされる。一方、『城山町エコミュージアム』では、「大学生が、自分の専攻分野を活用し、活動に参加してくれ、高校生もイベントがあるたびに、参加者としてではなく、スタッフとして活躍してくれる。」と、学生の参加の可能性について述べている。しかし同時に、「学生は、卒業すると、就職などのために、町を離れてしまう傾向にある。」といった問題点も挙げられた。

次に、無関心層の取り込みについての設問 6) 地域の人々が活動に興味を持つ窓口となるようなイベントはありますか？に対して、約80%が実施していると回答している。

『ふじの里山くらぶ』を調査した日はちょうど「ふじの里山まつり」の日であったが、これは、ふじの里山くらぶにより開催されている。ヒアリングでは「里山くらぶはそれぞれのグループの主体性に任せている。資金的な強力は出来ないが、力をかす。パンフレットやHPなどで活動を紹介し、里山まつりなどで、発表の場を提供し、人を集めることで、活動を活性化している。培われた文化は、独自に継続されているのであり、無理に継続させるわけにも行かない。継続できる環境を提供することが里山くらぶの役割である。里山くらぶはクロコである。」との意見が得られた。

また、『おおくすエコミュージアム』では、「『私たちは、イベント屋ではない。』と普段から会の中で言っている。行政からの予算がつくときには実施しているが、活動の呼びかけをすることを主にしている。地域を知ってほしいので、資料の提供やガイドの紹介に

関しては非常に協力的である。」と、述べている。

イベントは、地域の情報を発信するツールの一つでもあり、地元の活動を活性化するための起爆剤ともなりうる。エコミュージアムとして、組織化することで、活動自体の知名度が上がり、一つ一つの小さな活動ではできなかったPRや情報の発信ができ、それが会員の増加、ひいては活動の活性化となる。エコミュージアム同士のネットワークもまた然り、おのおのの活動報告や情報交換などがネットワーク化により、より広範囲に容易に行える。

これらのことから、一般の人に向けた取り組みは、イベントなどの気軽に参加できるものが有効に機能する要素を多分に含んでいる。

約80%が、一般の人に向けたイベントを実施していることは、エコミュージアム活動の広報となり、活動への参加を誘引できる効果の面から見れば、今後のエコミュージアムの展開に大いに期待が持てると言えよう。

#### 参考文献

高階秀爾・蓑豊編：『ミュージアム・パワー』慶應義塾大学出版会、2006

大原一興：様々なエコミュージアム活動と子どもたち—こどもたちと共に地域文化の過去と未来を学び考える—、pp. 60-65、No. 32、バイオシティ、2005. 11

大原一興・有嶋清之・藤岡泰寛：三浦半島における市民活動によるエコミュージアムの展開—地域を学ぶ場としてのエコミュージアム活動に関する研究—、「住まい・まち学習」実践報告・論文集9、pp. 101-106、(発表依頼論文)、住宅総合研究財団、2008. 8

竹内智美：『エコミュージアムの基本理念からみた活動実態に関する研究—チェックリストによる日本とイタリアの比較考察から—』平成19年度横浜国立大学大学院修士論文

Icam print01, international confederation of architectural museums, 2005

#### 4-3 地域資源の学習 水俣の事例から

地域資源を学習の材料として活用している事例として、水俣市の取り組みについて調査した。調査対象は熊本県環境センター、歴史考証館、の2施設である。

##### (1) 熊本県環境センター

センターについて

- ・1993年(平成5年)8月開館。
- ・隣接敷地内に県立施設(環境センター)、市立施設(水俣資料館)、国立施設(水俣病情報センター)がある。
- ・職員は5名
- ・情報プラザ、学習ルーム、エコステージなど。エコステージは1年かけてつくりあげた。

環境教育について

- ・熊本県のこどもは小学5年生のときに全員このセンターに来て学習しなければならないことになっている。交通費はすべて県負担。
- ・ただし、こどもが入りきらないので資料館に集まってもらうことも多い。
- ・館内学習については、各小学校の取り組みを聞いた上で、学習を支援するメニューを考えて実施するようにしている。
- ・環境教育指導者の派遣も行っている。登録者は現在60名程度いる。講演やフィールドワークなど、年間で40回程度。

その他(館長の方の意見)

- ・環境の話が大学生や高校生以下のこどもたちによりやく通じるようになってきたことを感じる。
- ・環境を一度壊してしまうとお金もかかるしこんなに大変だということを現場で見せる。
- ・ゴミ減量作成を全市民で取り組んでいる。分別精度が高いので水俣市のゴミは他都市よりも高い価値を持っている。生ゴミは100%リサイクルしている。



写真4-5 来訪者への解説



写真4-6 エコステージ(館内施設)

## (2) 歴史考証館（財団法人 水俣病センター相思社）

### 考証館について

- ・相思社は1974年（昭和49年）4月7日設立。考証館は1988年（昭和63年）開館。
- ・聞き取りやフィールドワークなどによって資料収集を行い、それを整理・研究し、考証館内展示に加えて機関誌発行やセミナー開催、環境学習プログラムなどを通じて発信する活動を続けている。

### 館内展示・資料について

- ・不知火海について、チッソについて、水俣病の原因究明期について、認定制度と未認定患者運動について、健康被害について、「もやい直し」について、など
- ・「絵で見る水俣病」（ILLUSTRATED MINAMATA DISEASE）として、世織書房からも出版。
- ・資料室には1000本近いビデオが保管。
- ・試・視聴用に約200本を用意、水俣病入門者・小中学生用にはその中から20点ほどを選別し公開。
- ・そのほか20万点以上の水俣病関連資料（新聞記事資料を含む）が保管。現時点で50点ほどを公開。

### ガイド

- ・水俣案内、環境・公害学習のお手伝い。
- ・基本コースはあるが自由に設定もできる。マニュアルはなく相思社職員の知識・経験からのディープな水俣の紹介・解説。
- ・同様のガイドとして、「NPO法人水俣教育旅行プランニング」によるガイドもあり。



写真4-7 館内展示



写真4-8 ガイドツアー

(3) (参考) NPO 法人水俣教育旅行プランニング

・2001年(平成13年)9月設立。「この法人は、小中高校生をはじめとした水俣芦北地域住民および当地域を訪れる人々に対して、地域住民の暮らしや自然環境にふれ、環境問題について自ら考え、感じることでできる学習の場を提供することによって水俣病問題への反省を踏まえて、再発を防ぎ、当地域における経済、文化等の活性化を進め、環境に配慮した共生(もやい)に基づく地域作りに寄与することを目的とする。」とある。

・水俣病に特化せず、地域の暮らしを知ることや、自然と向き合う遊びのプログラムを設けるなどの工夫あり。市内各種施設との連携(環境センター、資料館、考証館などの見学)。

・理事長(湯の児温泉山海館 社長)、副理事長(福田農場ワイナリー 取締役)、など。ガイドは主婦や塾講師、議員などさまざま。

・事業

①修学旅行の受け入れ

②環境学習を広め充実させるための市民ガイド育成および研修

③環境、体験プログラムの作成

④修学旅行誘致のため学校、自治体、婦人団体、旅行会社への広報活動

⑤水俣環境学習に関するパンフレット作成

⑥テクニカルビジットとしてアジアと地域産業の新たな結びつき創出

写真2点 ホームページ(<http://www.mkplan.org/>)より引用



写真4-9 水俣に聞くプログラム



写真4-10 ガイドツアー

#### (4) まとめ

水俣病という地域にとっては負の遺産を、環境教育の資源として積極的に活用し、さまざまな工夫を行っていることが分かった。

熊本県のこどもは小学5年生のときに全員環境センターに来て学習しなければならないことにもなっており、教育プログラムにも中心的に組み込まれているようすがうかがえる。

県外から訪れるこども（修学旅行など）へのガイドツアーも複数存在し、目的に応じて利用することが可能となっている。

環境センターでは、環境教育指導者の派遣も行っており、講演やフィールドワークなどを通じた継続性のある取り組みにも発展している。

中学校や高校において具体的にどのように活用されているか、水俣病だけでなく暮らしや地域の歴史・文化を含めた環境教育の各学校での工夫や中学生・高校生活動の実態などについては今回調査しきれなかった。今後の課題としたい。

#### (参考 URL)

環境センター <http://www.kumamoto-eco.jp/kankyocenter.html>

水俣病歴史考証館 <http://www.soshisha.org/koushoukan/koushoukan.htm>

水俣教育旅行プランニング <http://www.mkplan.org/>



考察とまとめ



# はびすくの友

vol.1  
 平成20年12月号発行  
 価格・発行：1000円(税込)  
 印刷：印刷立大  
 発行所：はびすくセンター



いろいろな人が来て、自由にしゃべって暮らす  
 軽食も売ってるんでおしゃべりしながら注文してくれ！



第2、第4土曜日にやっている  
**「地産/市」**  
 近地産の野菜が売っているよ！

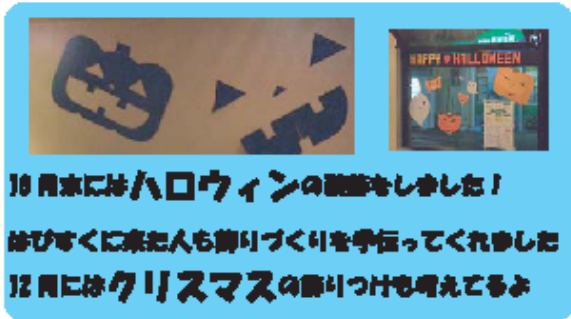
2口のサポートを受け、子どもたちが増えた  
**料理・カフェの空間**



**毎どじゃがモンブラン 30円**  
**好評につき完売続出！**

毎週、毎週、毎週  
 食卓の定番の  
 じゃがモンブラン  
 が完売続出！  
 毎週、毎週、毎週  
 食卓の定番の  
 じゃがモンブラン  
 が完売続出！

**野菜カフェ開きました！**



10月にはハロウィンの装飾をしました！  
 はびすくに来た人も作りづくりを手伝ってくれました  
 12月にはクリスマスの飾りつけも増えちゃいますよ



10月の装飾  
 ↓  
 12月のクリスマス  
 ↓  
 12月のクリスマス

## ◆はびすくとは・・・？

はびすく（ハッピースクウェアの略称）とは、平成19年10月1日に富士ヶ谷区天王町に存在する青少年の地域活動拠点のことです。ハッピースクウェアの愛称がよみかたで平成20年に募集を募り、決まりました。ここでは、青少年の皆さんの交流・体験・活動の場となり、地域の中で青少年の居場所を目指しています。青少年の方が放課後や休日に気軽に立ち寄れて、友達と交流をしながらかししゃべりをしたり、読書や勉強、くつろぐことなどができ、ときには地域のイベントを行うことのできる場になっています。



住所：富士ヶ谷区天王町 1-30-17  
運営法人：NPO法人 リロード  
TEL/FAX：334-3040  
E-mail：you-pla\_west@lobe.ocn.ne.jp

はびすくのマスターからでした

# はびすくの友

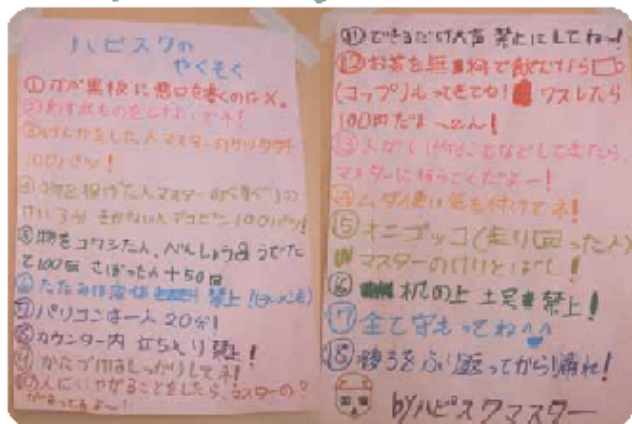
vol.2

平成21年6月発行

編集・発行：NPO法人リロード  
横浜国立大学

## ハビスク緑化計画！

5月からハビスクの外周を緑化していく動きが始まっています。まず外周の花壇に植えてあった木や雑草を抜きました。そして、6月2日にハビスクに来ていた小学生や中学生と一緒に花壇に花を植えていきました。これから成長していくので楽しみにしていってください。



子どもたちとマスターで考えた「ハビスクのやくそく」  
項目は18個にも及ぶ。

### ハビスク図書館 開館！

このたび、ハビスクに図書館が開館しました。これから随時本を増やしていく予定です。みなさん期待していてください。

### 間違い探し

5月のGW中に壁のペンキを塗りなおしました。そこで皆さんにちょっとしたいたづらを仕掛けてます。塗りなおす前と後で変化している場所があります。それはどこでしょう？  
ヒントは右の塗りなおす前の写真だよ。

# はびすくの友

vol.3

平成21年8月発行

編集・発行：NPO法人リロード  
横浜国立大学  
横浜市こども青少年局



また、商店街で遊んできた子どもたちが休憩しにハピスクに顔を出していた。

いさつを交わっていた。

6月13日の天王町商店街のお祭りでは、よくハピスクに遊びに来る子供たちが羽織を着て、神輿を担ぎながら、ハピスクの前を通過して、マスターに手を振ったり、あいさつを交わっていた。



7月20日(月)に保土ヶ谷中学校2年生のLikaさん(14)によるライブが行われた。全部で6曲、うち3曲がオリジナルの曲で会場は大いに盛り上がった。

## ハピスクでライブ開催!



### 観察日記

6月にハピスクのまわりには植えた植物はハピスクに来る小学生や中学生が自主的に世話は行っており、順調に成長している。

### 七夕祭り

ハピスクに来る子供たちが思い思いに自分の願いを短冊に書いて竹につるしていた。



# はびすくの友

vol.4

平成21年10月発行

編集・発行：NPO法人リロード

横浜国立大学

横浜市こども青少年局



**早い者勝ち！  
流しぞうめん大会**  
8月、ハビスクで「流しぞうめん」を行った。カウンターから外に向かって装置をつくり、ぞうめんを流していった。参加者はいつもハビスクを利用してきている小学生たち、みんな流れてくるぞうめんを夢中で取り合った。



## 小学生スタッフ!?

実は夏休みごろから、ハビスクを利用してきている小学生がボランティアとして働いている。働いていると言っても、マスターが忙しい時に注文の品をお客さんに持って行くだけである。

時期も定期的にといいわけではなく、小学生の気が向いた時に手伝うようだ。

## 勉強中!

テストが近い中学生にはマスターが分からない問題を教えてください（暇な時限定）。カフェもあるので勉強にも使えます。気軽にどうぞ!



## 緊急連絡!



神奈川県内でも新型インフルエンザの感染が広がっています。ハビスクでも消毒液を用意しているのでハビスクに入る際は必ず手を消毒しましょう。また、家に帰った時はうがい、手洗いを忘れずにおこなしましょう。

## 観察日記

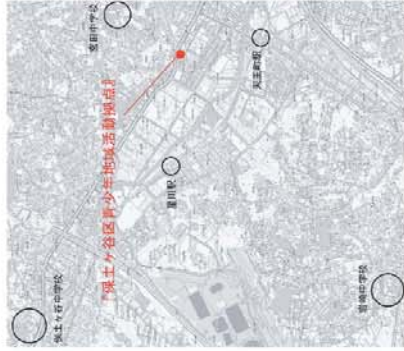
6月に植えた植物も、とうとうハビスクのガラス面を覆うほどに成長した。これもハビスクに来る小学生や中学生の献身的な水やりのおかげである。そのおかげもあり、野菜もすっかり育った。でき



た野菜は収穫をして、スタッフやハビスクに来ていた方々でおいしく頂いた。これから冬に向かうにつれて葉っぱは落ちてくるので、いま日陰になっている室内も日当たりを取り戻してくるだろう。



# ハピスク家具作りプロジェクト



住所：横浜市保土ヶ谷区天王町1-30-17

2007年10月1日、保土ヶ谷区天王町地区に横浜子ども青少年局によって、主に中高生を対象とした地域活動拠点「ハピスクエア」がオープンしました。商店街の近くに位置し、地域社会や街との関わりを作る拠点として期待されています。

しかし現状において、中高生の利用は少なく、人を集めるプログラムが必要とされています。そこで、私たちが学生が中心となり、家具作りなどといったイベントを開催します。地元の高生たちを中心に呼び込みを行い、机、椅子、照明などを共に作ることににより、他世代との交流の面白さや、視点を自分たちの空間へと作りこんでいく楽しさを学んでもらいます。そして、中高生たちが自ら率先して視点を活用し、他世代との交流を深め、地域や街に良い影響をもたらすことを期待しています。

## 『ハピスクにしかない家具を作ろう』

まず普通の家具にどのような機能があるかを考えてみました。それが、下のような1対1対応の関係です。「一つの家具には一つの機能しかない」という固定観念に捉われないことなく、より豊かな家具を作っていくというのが出発点です。

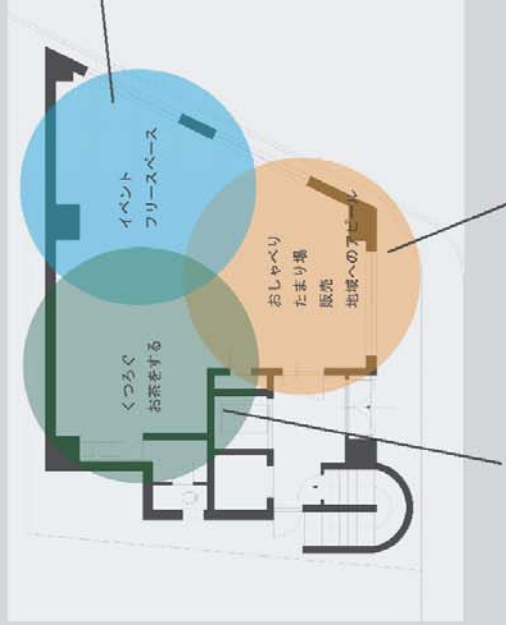


## 4月までの流れ

ワークショップの風景



横浜市子供青少年局  
NPO 法人リロード  
横浜国立大学一建築計画研究室  
天王町地区の大人と子どもを繋ぐ学生の会



横浜市、NPO 法人リロード、横浜国立大学を中心に、どのような空間にすれば人が集まるかについてワークショップ形式で議論しました。話し合いにより意見を抽出し、実際に模型を使って具体的に動かすことでイメージを固めていき、出来上がったのが左のイメージです。このイメージに沿って写真のようにホール、カウンターと畳のスペースが設けられました。







ハッピースクウェアはワークショップを通して青少年を中心に今まで進られてきた。最初は壁、そして今回は「家具」である。今ある家具は「今」のハッピースクウェアには似合っていないという声が寄せられた。そこで、ハッピースクウェアならではの家具をつくることとなった。今回のワークショップはその第一歩ということで、まずは子供たちにハッピースクウェアという場で自由にモノを作ってもらおうとした。そこでつくられたものから、どのような家具が求められているかを探るためである。

# 第1回家具作りワークショップ

天王町地区の大人と子どもを繋ぐ学生の会

## 0. オープニング

ワークショップ参加者に対して「ハッピースクウェア」がどのような経緯でできたか、どのような目的でつくられたかを簡単にパワーポイントを使って説明した。参加者はスクリーンのまわりに集まり、静かに聴き込んでいた。



写真1：開会の説明をつくく

## 1. 分身段ボールをつくる

アイスブレイキングも兼ねて、チームのメンバーがお互いの型を段ボールに書き込み、切り出す。時間の都合上、2人分ぐらいをチームで切りだしてもらい、残りの人型はサポーターの先生や学生が切り出した。最後に自分の分身に名前を書いて完成！



写真2：自分のユニットをつくつく

## 2. ユニットを作ろう

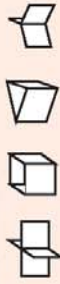
各チームごとに三角、四角、十字、T型の4パタンのユニットを4つずつ作ってもらった。材料は900x900の段ボールを使って作ってもらった。



## 6. まとめ

今回のワークショップを通して、ユニットを組み合わせることでいろいろな働きを持つ家具が作れるという可能性を発見することができた。また、指令4では四角のユニットがメインに使われていることも分かった。さらに、ここで行われる行為が単純な行為の計算式で書けるのではないかという仮説が導かれたことから、次回のワークショップに生かしてハッピースクウェアならではの家具をつくっていくこと思う。

ユニットの4パターン



## 3. シーンを使って写真を撮ろう

指令2で作ってもらったユニットを使って、日常で使うようなものを組み立てた。そこに、自分の分身段ボールを置き、チェキで写真を撮ってもらった。



写真3：写真を撮る

## 4. 自由にカタチを考えよう

### オリジナルのシーンを作ろう

今度は好きなユニットを好きな数だけ使い、チームごとにオリジナルなシーンを作成した。シーンに必要なものを段ボールを使って製作していった。



## 5. 感想の発表・講評

自分たちのチームが作ったものがどのようなシーンで用いられるかを代表者が発表した。その後、講師の岸野太氏や学生などによる当日の感想と講評が行われた。



集まる十座る x4十食べる十隔れる



# 第2回 家具作りワークショップ

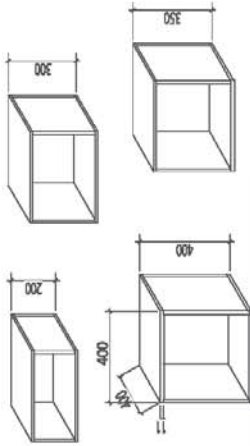
玉王町地区の大人と子どもを繋ぐ学生の会

## 前回のワークショップの結果から

ユニット × ユニット → ∞ (無限大)

箱型のユニットを組み合わせれば色々な働きを持った家具を作ることが出来るのではないかな？

そこで今回は、4種類のユニットを用いて、高さによって使いやすさを使い方を考え、様々な家具を作って写真を撮ります。



## ユニットの式で家具を作ろう！

かけ算 ① × 人数

① 立つ、座る、寝る、見る、乗る、下りる

足し算 ② + 立つ

② 収納する、飾る、隠れる、ひじをかける

### 指令②

こちらで機能を式で提示し、その注文に従って思い通りの家具をチームごとに作っていきました。



### 指令①

予め並べられたボックスには、家具としてどのような機能があるか、皆で考えました。そして、お気に入りの写真を指令書に貼りました。



### 例 1



立つ × 2 + ひじをかける × 2

### 例 2



座る × 2 + 足をかける + 話す

2008年8月25日 @ハピスク

### 指令③

指令1、2を参考に自分たちで家具の機能を考えながらボックスを組み立てていきました。



### 指令④

ハピスクのマスターにどのような家具が欲しいか要望を書いてもらい、それをチームごとに再現していきました。



### 最終指令 家具を作ってパーティーをしよう。

テーブルと椅子のような家具、座卓のような家具、それらの中間になるような家具が出来上がりました。それぞれのチームが工夫しながら全く違う形を作っていました。



平成19～21年度 科学研究費補助金 基盤研究C 研究成果報告書

## 中高生の地域への参画促進方法に関する研究

平成22年3月

研究代表者： 大原 一興（横浜国立大学大学院 工学研究院 教授）

Dr.Kazuoki Ohara,Yokohama National University

研究分担者： 三輪 律江（横浜国立大学 地域実践教育研究センター 准教授）

Dr.Norie Miwa,Yokohama National University

研究分担者： 妹尾 理子（香川大学 教育学部 准教授）

Dr.Michiko Seno,Kagawa University

研究分担者： 藤岡 泰寛（横浜国立大学大学院 工学研究院 講師）

Dr.Yasuhiro Fujioka,Yokohama National University

報告書 横浜国立大学工学部建築計画研究室

〒240-8501

横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-5

TEL : 045-339-4069

FAX : 045-331-1730

URL : <http://www.arc.ynu.ac.jp/usr002/>